夢みる竜は鳳翔ける空を仰ぎて海を飛ぶ

YeahBy

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

気がついたら鳳翔さんになっていた。

な、何を言ってるかわからねーと思うが――って違う！　こんなの鳳翔さんじゃない‼？

この鋭い眼差し、気難しそうな雰囲気、小柄ながら威風堂々とした立ち居振る舞い。

竜　飛　さ　ん　だ　コ　レ　――‼？

＊＊＊

なぜか竜飛さんになっていたので、大海原をさまよったり、助けたり、沈んだり、出会ったりして、気まずくなったり、誤解されたり、理解されたり、打ち解けたり、呆れられたり、どやされたりしながら、仲良く出撃したり生活したり鳳翔さんと後輩育てたりするお話。

＊＊＊

※完全なる思いつきからできています。

※二次設定の竜飛さんらしきものがウロチョロします。

※鳳翔さんと仲良くなるのはもっと後になってからです。

※遅筆注意。

＊＊＊

＃面白がってつけたタグが眼にうるさかったのでちょっと整理しました。

目次

序文　なみだ　つ　み　たま ―― 1
始動の八節
一節　愛シ文（あしぶみ） ―― 9
二節　導ヅ涅（どうづくり） ―― 26
三節　夜ガ前（ゆがまえ） ―― 44
四節　討チ起コシ（うちおこし） ―― 69
五節　退キ別ケ（ひきわけ） ―― 94

序文　なみだ　つ　み　たま

海に、波が静かにうねっていた。あるいは、現世の海ではないのかもしれなかった。昼とも夜ともつかぬ、薄ぼんやりと明るく霞んだ大水（うみ）であった。

そのただなかにあって、潮騒は不思議に間遠だった。波音のみならず、水面も、空も、大気も、色も、香りも、なにもかもが茫洋としていて、なにもかもが、そこにはないようですらあった。

そこに、彼女は、ひとりきり、ぽつりと浮かび上がった。

彼女。

彼女とは、なにか――それは、ただ彼女と呼ぶほかないものであった。

まるで泡沫のごとく、今しも消え失せそうに儚いものであった。

まるで赤子のごとく、今しも生き絶えそうに弱いものであった。

まるで氷雪のごとく、今しも融け崩れそうに脆いものであった。

そして、そのすべてであるがごとく、純粋であった。

――まだ。

彼女が、ふるえる。淡く、細く、柔く、ふるえる。

それは、嘆きだった。

――まだ、まだ。

あまりに儚く、あまりに弱く、あまりに脆い。そのすべての純粋をふるわせて、彼女は泣いた。

――まだ、なにも、できていないのに。

生まれたかった。往きたかった。観たかった。聴きたかった。触れたかった。味わいたかった。感じたかった。

喜びたかった。怒りたかった。哀しみたかった。楽しみたかった。

愛したかった。憎みたかった。

戦いたかった。傷つきたかった。守りたかった。救いたかった。

そう、救いたかった。

救いたい。

救いたいのだ。

――望まれたのに、希んでくれたのに、臨んでいけたはずなのに。
それは、誰のみた夢であったろう。あるいは、なにが抱いた希望であったろう。多くの願いから成り、多くの祈りから生り、そのすべてを織り混ぜて、しかしてその想念は、あまりに一途で、それゆえに無垢そのものだった。
――こんな、いったい、なんのために。
まさしく、妄執である。
怨念ですらあったかもしれない。
世にありとあらゆる、どんな存在にすら、これほど〝一つ〟のみを念じられはしなかっただろう。
――どうか、わたしを、わたしが。
その、叫び。
儚く、弱く、脆く、純粋であるはずの彼女の、すべてを尽くした、たったひとつの願望は、三世のなにものよりも鋭く、強く、堅く、濃密であった。
――あのひとたちを救って、救わせて、わたしに。
しかし、自らをかきむしり、引き裂かんばかりに放った、声にすらならない慟哭、音にすらならない悲鳴は、それを耳に出来るものもいなく、知るものすらないまま、ただ溶けていくしかない。
溶けていくしかないはずだった。
――誰か、誰か、わたしを、お願い、こたえて、たすけて、誰か。
あまりにも強すぎる妄念は、とてつもない奇跡――もしくは不条理、理不尽の類――を起こすことがある。
では、この彼女にとっては、いずれであったのだろう。
花咲く丘を、遠き岸辺を、静かの海を超えて。
泣き叫ぶ彼女を、彼女がその両腕で、抱きくるんだ。
彼女の胸もとで、細い鎖が無骨な六角の環に絡み、こすれて、しゃらりと音を立てた。
そのささやかな音は、どこか波の響きに似ていた。
彼女の、懐かしいそれのようであった。

＊　＊　＊

夢を、みていた。
ひどく曖昧な、つかみ所のない夢だった。
ただ、哀しかったことと、嬉しかったことだけは、はっきりと思い出せた。
泣き声と、波の音も。

――ぽっかりと、眼がさめた。
それ以前に、自分が本当に眠っていたのか、彼女には確信が持てなかった。
むしろ、ここがあの雲をつかむような夢の続きで、どこからか自分の意識のみを、前後の脈絡もなにもなく、ざっくりと切り取って、無造作に貼り直したのだと、そう思った方が、しっくりとくるような気さえした。
そんなことを半ば本気で考えてしまうほどには、彼女は朦朧としていて、夢見心地であった――簡潔にいうと、寝ぼけていた。
ただ開いただけだった彼女の眼を、光が白く灼く。
思わずうめき声をもらし、せっかく上げたまぶたを再びきつく下ろしてしまう。そのまま眉間に寄ったしわを、右の掌で押し揉んだ。
ふと、顔に触れた感触に違和感を覚える。よくよく見てみると弓懸を挿してあった。
「は」
疑問とも、感嘆ともつかない声が零れる。
弓懸である。弓を引く際に、弦で指を傷つけないよう、保護するそれに間違いなかった。
四掛と呼ばれる、親指から薬指までを包む形のもので、これは強弓を引くのに向いていたはずだ。色は黒。巻き止める紐も同じく黒い。この形に一般的な、堅帽子に控えつきである。

ほとんど茫然としたまま、緩慢に逆の手へと視線を移すと、こちらには、和弓を握り締める、籠手。
小具足と呼ばれるものの一つで、武将などが、甲冑では守りきれない、腕や脛の部分に身につけた防具だ。
黒い布地が胸部から肩先を通り、手の甲までを覆って、中指と親指に輪を通して固定している。腕の外側には金属製の鎧が瓦のように段を作っていた。左腕のみを保護し、右は弓懸だけである。
視線を落とせば、右足と左足、それぞれの親指と人差し指の間から、黒い紐状のものが二股に分かれて甲を這い、足の両脇まで抜けている。鼻緒だ。自分はおそらく下駄をはいている。
と、そこまで観察して、彼女はさらに深々と眉を寄せた。たった今、脳裏を駆け巡った一連の情報の出所が、わからなかったためである。にもかかわらず、ごく当たり前のように、さらさらと知識が流れ落ちてきた。
わからない。否、思い出せない、それとも、忘れているのか。
ありとあらゆることの、あまりの不明瞭さに不安を覚え、必死になって脳裏をかき回し、記憶を掘り起こそうとしていると、大丈夫だ、と、胸内で何者かがささやいた気がした。
――そう、なにも心配などいらない、必要なものは、もうそろっているし、知ってもいる。あとは思うさま動くだけでいい。このからだは、こころを裏切らない。感じたままに望むことを成せば、ただしくそれは成る。
その通りだ、と彼女は思った。なんの根拠もなく、ただ確信した。この一連の思考を余人が読み解けば、おかしな妄想の類ととられても、彼女自身ですら反論できなかっただろう。
だが、このときのそれは、決して妄想ではなかった。
彼女は右足を持ち上げ、下駄の歯で足下を蹴った。煤色をした行灯袴の裾がはねる。ばしゃり、としぶきが上がって、水面が波立った。水面である。彼女は水面に下駄の二本歯を埋めて、二本の脚で直立していたのだ。
これは本当に水面なのか。地面にうっすらと水を張っただけでは

ないのか。
どうでも良いといえば、どうでも良い、そんな好奇心に任せて、籠手をまとった左手で、携えていた和弓を、おそるおそる足下に突き刺してみた。思ったより勢い良く、そして深く沈み込んでしまい、慌てて引っこ抜く。水がはねて足先が濡れた。
はたと現状を思い出し、呑気な自分にあきれつつ、彼女は周囲を見回した。眼につく限りにはなにもないし、自分以外になにもいない。あたり一面に水が広がり、空には雲もほとんどない。
とにかく、現在位置を知りたい。そう望んだ瞬間、意識せずとも躰が動いた。籠手に包まれた左腕が弓を掲げ、弓懸を挿した右手が、苔色をした着物の袖を翻し、肩越しに矢羽を手挟んだ。
流れるような動作で矢を番える。
打ち起こし。
すう、と筆で線でもひくようにさり気なく、当の彼女すら驚くほどごく自然に、成りと弦とが分かたれた。
引き分け。
背筋に力が充ちる。強く、しかし過分に力まず、必要なだけの力でもってして、弦が引かれ、弓がしなった。
会。そして伸合い。
緊張が頂点に達し、番えられた矢はただそのときを待つ。
そして。
離れ。
「――発艦！」
無意識に、そう告げていた。そのことに、特に疑問は感じなかった。眼の先、弓返りした鳥打の遥か向こうで、放たれた矢が激しく発光し、破裂音にも似た音をたてて、いくつかの、小さな翼を持つ塊に分離した。
航空機だ――確かめるでもなく、ごく当たり前にその光景をのみこんで、彼女は再び矢を番える。あれだけでは足りない、疑問を差し挟む余地すらなくそう判断して、弓を引いた。
――偵察機をもう一隊と、その後に念のため直掩機を出そう。

彼女の躰は、遅滞なくそれにこたえた。

艦載機の着艦と発艦を定期的に繰り返しつつ、彼女はゆるゆると北上した。

ときおり偵察機より、正体不明の水上生物を発見した報告を受けては、迂回する航路をとった。

興味を引かれないわけではなかったが、単独で、どことも知れない海を往かねばならないこの状況で、意思疎通が可能かもわからない、胡乱な生き物と接触する気には、とてもなれなかった。

陽が傾き始めた頃、偵察機に近場の島か、せめて隠れられそうな岩場を探させ、翌日の行動方針について考えを巡らせていると、西側を捜索していた偵察機より入電があった。

［我　艦影　発見　セリ］

［不明艦　一　水上生物　三　交戦中］

判断に迷う内容であった。

不明艦、というのだから、少なくとも乗船しているのは意思疎通が可能な人間であるはずだった。

現在位置がいまいち判然としない今の状況で、この海域に関する情報が得られる。その可能性は、魅力的なものである。

反面、不明艦と接触するということは、正体不明の水上生物とも接触――むしろ、不明艦を支援ないしは救助する必要から、高確率で交戦することになると考えられた。

相手の戦力がわからない上、僚艦のないこちらと、三体もいるあちら。さらに、もう間もなく陽が落ちてしまうこの時間に、自ら危険に飛び込んでいくなど、狂気の沙汰である。

気の毒ではあるが、見捨てるほかないか――そう冷静に断じつつも、鳩尾のあたりが、どうしようもなく締めつけられるような、なんとも居た堪れない気持ちになった。

ひたひたと、湧水のように、とある疑問が胸裏を浸しはじめる。

――これでいいのか。

言葉にするなら、そんなかたちであった。
――本当に、これでいいのか。
それを払うようにかぶりを振り、彼女は堅い弓懸で、しくしくと痛む胸もとをなでた。一本だけ露出した小指が、さらりとした苔色の着物の衿もとに触れる。と、その小指の先に、なにか細いものが引っかかった。
「あ……」
鈍色をした、細い鎖であった。首にかけてあるそれは、今の今まで衿もとにしまわれていたようだった。
彼女は小指に巻き取るようにしてそれをたぐり、そこにぶら下がっているらしいものを、着物の合わせ目から引っ張り出した。
それは、六角をした分厚い環であった。
「あぁ――」
――まだ、なにも、できていないのに。
――あのひとたちを救って、救わせて、わたしに。
――救って。
唐突に、腹の底が、かっと熱くなった。大声で怒鳴り散らしたいような、倒れ伏して泣き叫びたいような、わけのわからない感情が、彼女の中で暴れ狂った。
それは、衝動、と呼ばれているものだった。
――誰か、誰か、わたしを、お願い、こたえて、たすけて、誰か。
――どうか、わたしを、わたしが。
気づけば、彼女は思い切り良く水面を蹴っていた。波飛沫をまき散らしながら、一目散に西を目指す。
同時に、発艦済みの全航空機を向かわせた。
陽が落ち切る直前、あちこち破損した船舶を目視し、端的に打電した。
「〝我に航空戦力あり、貴艦に味方せり〟」
弓を引く。
ありったけの艦載機を発艦し、彼女は再び猛然と水上を駆けた。

『救援に感謝申し上げます。私は松岡、松岡辰之進といいます。海軍の――なんというか、まあ。一応のところは、少尉です。もう違うかもしれませんが』
『ご無事でなによりでした。その、わたしは、どう名乗るべきか――そうだな。とりあえず、竜飛、と名乗っておこうか。わたしは、そう』
『ひとのかたちをした、軍艦――空母だ』

彼女たちは出逢い、そんな妙に腰の引けた挨拶を交わすことになる。
そして、これこそが――やがて膨大な歴史の波に飲まれ、どこに沈んだのかすら定かでなくなる、この出逢いこそが、長い戦いの記録、その序文であったことを、いまこの瞬間に大海原に漂う、いかなる者に予想し得ただろう。
いずれにせよこの世界の一隅で、とある人と、とある奇妙な軍艦とは、人知れずして出逢い、そして人知れず訣れていくことになった。
この顛末について詳らかにするには、まだもうしばしの時が必要となる。

始動の八節

一節　愛シ文（あしぶみ）

自分は、なんのために生かされたのか。

彼女はずっと、それを考え続けている。

旧い家の生まれであった。分家筋で、末端もいいところではあったが。

本家は神職を担っていた家系で、現代でもそれは続いていた。彼女の家の方は、昔は武家として、それなりに栄えたこともあったというが、今となってはもはや見る影もない、斜陽の家だ。

ただ、歴史だけは確かに長い。そのことだけは、彼女も身をもって理解していた。他でもない、彼女自身が修めた、数々の業によって。

ちょうど物心のついた頃に、彼女の母は身罷った。

まだ三十路にもならない、若い身空で。最後まで分家当主の嫁という立場に縛られ、故郷の地を踏むことすらなく。

ある程度ものがわかるようになった頃には、子供の眼で見てわかる母の痕跡など、ほとんど残されてはいなかった。

たったひとつ、柔らかな声でもって紡がれる、かすかな旋律のみが、記憶に残っていた。子守唄だろうか。

――妻を亡くした父が、彼女とろくに眼も合わせなくなったことに気づいたのは、いつだったろうか。

母は幼い娘に、大人の事情を聞かせるような人ではなかった。幼い子供にはどうせわかるまいと、大っぴらに噂話をする者たちが多い中で、生々しい話は聞かせないよう、細心の注意を払っていてくれたのではないかと、大人になったいま考える。

だから、父の彼女に対する対応がぞんざいになっても、自分の置かれた立場に、大した疑問を抱かなかった。

彼女と母との間に通っていた情が、父と母、そして父と自分にもあるのだと、信じて疑ってすらいなかったのだ。

そうではないのだと知ったのは、母の一周忌が終わってすぐに、前ぶれもなく後妻と引き合わされたときだった。
後妻は、彼女の存在を黙殺した。
なにも知らされないまま、急に家族として連れて来られただけの女性に、母にするように甘えたいとは思わなかった。それでなくとも、彼女の存在を家庭から徹底的に締め出そうとする様子に、この人と家族になることは絶対にできないのだと、幼心に悟った。
彼女が七つになった頃、異母弟が生まれると、さらに身の置き場がなくなった。
父は後妻と、刀自である大伯母の機嫌をとることに忙しく、後妻はますます彼女を邪魔くさそうに扱った。それでなくとも、乳児のいる家庭というのは、その子供を中心に物事が回るものだ。
こうなってしまっては、もはや彼女の居場所などないに等しかった。
彼女は、自由な時間のほとんどを、道場にいる祖父のもとで過ごすようになった。祖父は隠居してはいたが壮健で、家に伝わる武術の数々に、ますます磨きをかけていた。
祖父のもとで、彼女もその手ほどきを受け、尋常でない才覚を示した。齢十になる頃には、あまり熱心でなかったとはいえ、先達であった父を、組み手で叩きふせてしまう程であった。
祖父は、武術にしか興味を持たない人であった。だが、現代社会において、自身のような者は異端であるのだと、自覚している節があった。
そのため、自身を慕い、それ以上の才覚を持つ孫娘には、異端者の師ではなく、なるべく祖父として恥ずかしくない、できるだけのものを残してやりたいと思っていたのだと。そのようなことを、もっとずっと後の、ようやく大人といえる年齢になった頃に、当の本人より聞かされた。
だから、きっと、あの頃の祖父に悪気はなかったのだろう。孫娘にねだられて、生母の話をしてやろうとしただけなのだ。
それでも、強いて悪かったことがあるとすれば、祖父自身の話下手

と、未だ年端もいかぬ子供である、孫娘の理解力を侮っていたことだろうか。
ただ、悪気がないということは、悪意に満ちあふれているよりも、よほど始末が悪い場合もある。
彼女は祖父を尊敬していた。
だからこそ、武術の師としては尊敬できても、人として、大人として、家族としてはとても無理だと、思い知ってしまった。
そうして、実際のところ、家族と呼べる存在は生母のみしかおらず、その死と同時に、家庭というものも死んでしまったのだろうと、打ちのめされるような気持ちで、彼女は悟った。
そしてそれは、自分がもういまさら、どうしたところで、取り戻せはしないのだとも。
それを理解することは、ある種こどもの彼女の――彼女の中の、純情が死することを意味した。
それ以来、彼女はずっと考え続けている。
――いったい、なんのために生かされたのか。
自分は、なんのために生かされたのか。
自分の出来ることを。自分がすべきことを。
それを、ずっと、考え続けている。

再びの浮上は、とにかく苦しかった。
「……っげぇ、ほ！　げぇほ！　がぁっ、ほ！　ぅ、げ……っ」
全身を力ませて、力の限り咳き込む。勢いにのって、塩辛い水が吐き戻された。気管は痙攣したように、ぴったりと閉じてしまっており、それを無理矢理こじ開けるようにしてじわじわと息を吸う。
窒息までごく僅かな猶予を得て、再び体を折って咳き込んだ。
「いまっ、さ、らぁっ――が、ふ……、おぁ、っ……もぃ、えふっ！　だ、げふぇっ！　……さ、ぁせ、えほっ、てぇほっ、えほっ！　――え

えっほ、ごほっ！　かふっ！　かっ！」
今更、思い出させてくれやがって――どうにも辛抱できなかったのか、思わずぼやきが混ざって症状が悪化する。その後、優に三倍以上の時間を費やし、最後はほとんどえづくようにして、ようやっと正常な呼吸が適うようになった。
「――あー、ど畜生め……。やって、くれやがりましたね、本当に。……んんっ」
水上に座り込んだまま、疲弊しきったような覇気のなさで、口汚く罵る。喉に残った違和感を気にして、咳払いをひとつ。口から肺の底が覗けそうなほど、盛大なため息もひとつ。
「えぇ、わかっているわ――わかっていますとも」
右手を覆う弓懸が、胸もとをこすった。
「はい。私がちゃんとたすけてあげますからね。大丈夫よ」
小指が、細い鎖を引き上げる。ぶら下がった二つの環のうち、分厚くごつごつとした六角の方を、弓懸ごしに器用につまみ上げた。
不思議に熱を帯びた無骨な金属に、唇を押し当て。
「いいこ――そこにいてくださいね。大好きです。愛していますよ」
大切に大切に、そっとささやいた。

＊　＊　＊

「電さんさぁ、〝送り狼〟って知ってるー？」
「はわ？」
その問いかけに、電は箸を持ったまま眼を瞬かせた。
昼食時である。大本営の食堂は、〝大〟とつく場所の設備だけあって、なかなかに広い。所属艦娘や、彼女らを率いる何人もの司令官や提督、さらには施設維持のための人間の職員などが詰めかけてきても、収容できるだけの規模があった。
その片隅で、本日は内勤のみだった電と、たまたま一緒になった睦

月が、差し向かいで食事をとっていた。
「睦月ちゃん。陽の高いうちから、際どいお話はちょっと……」
「にゃっ⁉？　ち、違いますぅ！　そうじゃなくってぇ、こないだ演習した子から聞いたのー！」
鯖の塩焼きをつつきながら聞くところによれば、少し前から任務や遠征中に落伍したり、航行不能に陥りどこかに漂着した艦娘を、鎮守府近海まで送り届けてくれる、艦娘らしき存在がいるらしい。
中には大破して轟沈寸前のところに現れ、援護してもらいながら撤退した艦隊もいるのだそうだ。
「えーっと、いっつも単艦でぇ、一匹狼が送ってくれるから〝送り狼〟っていうらしいにゃあ。電さんてば長いから、なんかしらないかにゃーって」
「うーん、聞いたことないのです……」
「そっかー。艦種もわかんないって噂だから、ちょっと気になったんだけどにゃあ」
残念にゃしぃ――変な語尾で唇を尖らせながら、睦月。やたらと愛嬌のある仕草に、電は味噌汁を口にしながら、椀の陰で薄く笑った。
独特な緩い口調からは想像もつかないが、これで割と礼儀にうるさいこの睦月は、ここ本営ではそれなりに可愛がられている。同じ駆逐艦ながら、艦娘としては最古参である電にも、それなりに筋を通そうという姿勢がうかがえた。
軍艦としてはむしろ電よりも古いでしょうに、と苦笑のひとつも零れようというものだ。同様に、こちらも丁重に対応したくもなる。敬意の表し方は、なにも言葉遣いだけではないのだという、好例。
「およっ、夕張さんにゃしぃ！　ゆーばりさーん、こっちー！」
不意に睦月が電の背後に声をかけた。肩越しに見やると、こちらに気づいた夕張が、盆にどんぶりをのせて傍まで来たところだった。そのまま電の隣席に盆を置く。ふわりと出汁と醤油の香りが届いた。
「ふたりとも、お昼だったのね」
「夕張さん、お疲れさまでーす」
「お疲れさまなのです、夕張さん」

「ふたりもお疲れさまー」
緑をひとしずく含んだような、灰色の髪を揺らして席に着く。いただきます、と手を合わせて箸をとった。今日の昼食も、いつものように蕎麦であるらしい。
「そーいえば、夕張さんは聞いたことありますかにゃあ？　〝送り狼〟って」
「んん？　狼？」
「えーっとねぇ――」
電にしたのと同じような話を、夕張にも聞かせる睦月。電は、食後の茶に息を吹きかけながら、聞くともなしにぼんやりと湯呑みを揺らしていた。
「うーん、心当たりがあるとすれば……」
「お、お、なんか知ってます？」
麺を啜りながら話を聞き終えた夕張は、汁に箸先を泳がせつつ、声をひそめる。
「ついこの間なんだけど、任務で出てた舞鶴の足柄さんが、撤退するとき艦隊を逃がすために残ったらしいの。その日は引きが悪すぎて、その時点でもう大破してたし、生存は絶望視されてたんだけど、逃がされた艦隊が帰投してからいくらも経たないうちに、なぜか無傷で帰ってきたんですって」
「えぇー？　どゆことですかぁー？」
思わずといった風情で声を上げる睦月に、しぃっ！　と人差し指を立てながら、続ける夕張。
「上の指示で、直接会って聞き取りしたんだけど、艦隊が撤退して少し経った頃、正体不明の艦娘が、ドラム缶を載せたボート引っ張りながら、単艦で助太刀に入ってきたんですって。相手は多少は傷ついていたとはいえ、まだピンピンしてた戦艦ル級と軽巡ヘ級よ。でもその艦娘は、その状態で自分にも足柄さんにも、攻撃をかすらせもせず、流れるような手際であっという間に沈めてしまった」
「ふええ」
状況を想像したのか、睦月が情けない声を上げる。

「その後、その艦娘が近寄ってきたから、なにをされるのかと思って身構えてたら、おもむろにドラム缶の上面を開けて引っ張り出した、これまた正体不明のバケツの中身を、頭からひっ被せられたんだとか」
いよいよ声を落とし、まるで怪談話でもしているかのような口調で締めくくる夕張。だがその口もとは、面白そうに歪んでいた。
「……それ、きっと高速修復剤ですよね？」
なぜか無傷で帰ってきたって、さっきおっしゃいましたし――と、つい口を挟んでしまう電。夕張は眉を寄せて唇を突き出した。
「もー。せっかく育てた話の落ちを盗らないでよー」
「はわ、ごめんなさいです」
「えええ。つまり〝送り狼〟は、〝飢えた狼〟を送るだけじゃなく餌づけして帰したってことにゃしぃ？」
内容だけなら、もはや暴言にしか聞こえない、あんまりといえばあんまりな睦月の言い草に、電と夕張は数瞬、黙り込んできょとんと顔を見合わせた。その後、徐々に湧き上がってきた笑いの衝動を堪えきれず、じわじわと表情を崩し、ついにはそろって肩を震わせはじめる。
「だめですっ。ゆ、夕張さぁん。さすがに失礼なのです……っ」
「ちょっとぉ。電ちゃんだって、わ、笑ってるじゃないのぉ」
まともな会話が不能になった二隻を前に、なぜか少し誇らしげな表情の睦月。もし、当の足柄がここにいたとして、この睦月を前にしては、怒りすらわいてこなかったに違いない。もしくは怒ったふりをして、嫌というほど愛でたおすかだ。
屈託がなく、なぜか妙に憎めない彼女だからこそ、許される発言である。
「はー、笑わせてもらったわ。まぁ、そういうわけだから、一応その……なに。〝送り狼〟に関しては、本営も把握してるの。ただし」
ぐい、と睦月に顔を寄せて、一転して真顔の夕張。
「本営の方針としては、今のところ、こちら側からの〝送り狼〟との公的な接触の予定はないわ。それに、この類の噂を無責任に吹聴して回らないように、通達されることになると思うの」
「えー。なんでですかぁー」

「主に士気の問題よ。悪い噂ではないんでしょうけど、でもね、当てに出来るわけじゃないのよ。相手は単艦のようだし、なんの思惑があって動いてるのかもわからないんだから。それに、いざとなったら助けてもらえるかもしれない、なんて考えながら戦ってたら、命がいくつあっても足りないわ」
「あぁー。まぁ、そうですにゃあ」
そう言われて、即座に納得できる程度には、この睦月も経験を積んでいた。眼の前で仲間が沈んだ経験も、睦月自身が沈む寸前まで追い詰められた経験もある。
本営がわざわざこのような対応をとるくらいには、〝もしかしたら〟の効能というものは、良くも悪くも無視できないものであるのだ。特に、もはや心理状態くらいしか、天秤の重さを左右できるものがない、限界ぎりぎりの状態では。
そもそも彼女自身、〝送り狼〟にそこまで入れ込んでいたわけではないのだろう。あくまで、余暇を楽しむための話題にすぎないのだ。
「ところで、睦月ちゃん。そろそろ帰投予定時刻ですけど、お出迎えに行かないのです？」
「およ？　そーでしたそーでした。じゃ、睦月は失礼しますぅー」
慌しく食器を盆にまとめて、睦月は席を立った。シフトを組んで、交代で遠征に出ている姉妹艦が、予定ではそろそろ帰ってくるはずなのだ。
いつの間にか蕎麦を完食していた夕張のために、電は急須を傾けた。
「はい、ちょっと苦いかもしれません」
時間が経って、やや濃い目に出てしまった茶を、夕張は微笑んで受け取る
「ありがと――いつ見ても元気ね、あの子」
「なのです。でも、きっとお姉ちゃんだからっていうのも、あると思います」
「そうね。そうなのかもね……」
しばし沈黙が降り、二隻はただ茶をすすった。先程と今とでは、明

らかに空気が変わったのを、互いに感じていた。
　それがなにによるものなのかも理解していたし、睦月の前ではあえて口にしなかった内容についても、見当はついていた。
「やっぱり、あのひとなのですか」
　ぽつん、と、ほとんど独白のように、電が零した。
「えぇ。まず、間違いないわ」
　静かに湯呑みを置き、夕張は分厚い手帳を取り出した。よれたページをめくり、その部分の走り書きを眼でたどる。
「艦隊が撤退後。殿、というより囮になった大破の重巡足柄から見て、十時の方向。眼と鼻の先に、小破の軽巡ヘ級。その斜め後ろ、重なるようにして――二隻だけだけど、梯形陣の形ね、これ――十一時の方向に、これも小破の戦艦ル級」
　電が、口にしかけた湯呑みを置いた。眉根が寄っている。背筋にじわりと嫌な汗がにじむのを感じた。
「これに対し、およそ三時の方向から、とんでもない勢いで彼女が突撃してきたそうよ。ヘ級から放たれた砲弾のうち、重巡足柄への、おそらく直撃弾になったであろうもののみ、弾くようにして受け流し、あとは体捌きだけで避けて、ヘ級と重巡足柄の間に、敵艦に肉薄どころか、ほぼかすめるような距離感で割って入った」
　茶で潤っていたはずの電の喉が、ひりついた。脳裏で展開される光景に、めまいを覚え、唇を噛み締める。
「そしてそのまま、ヘ級とすれ違いざまに急激に右回頭。ドラム缶ボートをまるで係船浮標かなにかのように扱い、それを繋いでいた索をヘ級の首へ引っかけつつ、それを軸に回転――こう、ぐるんっ、と急角度で旋回して、ほとんど死角からル級にラムアタック……というより、豪快に両足で跳び蹴りをかましたそうよ」
「ひっ」
　想像した光景における、彼女のあまりの命知らずさに、電は総毛立った。このような所業、彼女以外が実行すれば、自殺にしかなるまい。
「それで、ル級は跳び蹴りで、おおむね一時の方向に吹っ飛ばされた。

体勢が整わないル級に、九九式の爆撃が波状攻撃的に殺到。雨あられと降り注ぐ爆撃に、さしものル級も轟沈――これ、ル級を爆撃したというよりも、むしろ爆撃が効率良く当たる位置に、ル級を蹴り飛ばしたのかしらね。ヘ級に庇われないようにも」

紙面を指でなぞりながら、考察する夕張。今でこそ冷静に説明できているが、当の足柄に詳細を聞いたときは、彼女のお転婆っぷりに顔を引きつらせ、逆に心配された。

「ル級の轟沈を見届けるそぶりも見せず、即座に索を振り回すようにして、ヘ級の首に完全に巻きつけ――ぐいっと引っ張って体勢を崩させ、そこでなにかを投げつけたらしいわ。それがなんなのかは、重巡足柄の位置からは確認できなかったそうだけど。でも、それがなにか、私や電ちゃんにならわかるわよね。推測だから、報告書には書けないけれど」

「……釘」

「そうね。おそらくは」

夕張は小さく嘆息して、茶を口に含んだ。

今このとき、相手の脳裏には、自分のものとほとんど同じ記憶が再現されているに違いない――二隻は示し合わせたかのように、そう思った。

「投げつけられたなにかによって、ヘ級は眼に見えて動きを鈍らせた。そこに、九九式の爆撃が、こう――ぽこぽこぽこん、と」

「あぁぁ……」

敵艦ながら、あまりにも無残な敗北っぷりに、さすがに若干の同情を禁じ得ない気分の電である。自分が相手なら、絶対にこのようなわけのわからない沈み方はしたくないものだ、と心底思った。

「夕張さん、なんていうか……。電の知っているあのひとより……」

「そうねぇ。強くなっているように思えるし、容赦がなくなっているようにも思えるわね」

「――なのです……」

苦笑がもれる。眼の前にいる夕張も、やはり同じような表情で、電を見返していた。

「あれから、どんな経験をしたのかしらね」
久々に知ることができた、恩人の近況に、在りし日の姿が、懐かしく、慕わしく、ほろ苦く、思い起こされた。
アルバムに貼りつけた写真をなでるように、ひとしきり面影を胸中に描いた二隻は、同時に胸の痛くなる記憶をも噛み締める。
「夕張さん」
「うん」
「あのひと、やっぱりもう、帰ってこないのでしょうか……」
夕張の唇が、言葉を発しようと開きかけ、結局また閉じられた。そのまま、なにがしかの感情を堪えるように、震える。自然と息が詰まり、喉元がきゅう、と微かに鳴った。
「電――電は、わたしは」
言葉に迷うように、電。
「あのひとに、なにをしてさしあげられたでしょうか。ただ、仲間になったつもりで、結局、もうどこにも逃げられないところに、追い込んでしまったのではないかと、そう、思っているのです」
「私は」
吐息のような声で、夕張。
「あのひとに会いたい。すごく、すごく会いたい。でも、同じくらい――」
言い淀む。自分の心のかたちを、表しかねるように。
「――私は、あのひとを閉じ込めたわ。連中の、あのひとに対する仕打ちに、憎しみすら抱きながら。守っているつもりで、それと大差ないことをしてしまった」
もはや感情など振り切れすぎたような、いっそ無表情にすら思える様相で、夕張は呟く。
「檻に入れて飼うか、ガラス棚に飾りつけるか、その程度の違いでしかなかったのよ。あのひとの懇願で、海の上に連れて行くまで――あの、満足そうな死に顔を見るまで、自分がなにをしているのか、自覚すらしていなかった」
懺悔にもできない言葉だった。夕張にとって、それは未だ過去にす

ることができない、そんな記憶であったのだろう。
直視できず、電はまぶたを伏せた。夕張の姿は、電自身の鏡うつしでもあった。
昇華しきれない罪悪感を、電もまた、ずっと心に住まわせている。
電も、夕張も、彼女にしでかしてしまったことの、その償いを求めていた。同時に、楽になりたいがために、よりにもよって彼女自身に縋り、赦しを強要しているような――そんな自分たちの勝手さに、嫌気がさしていた。
それきり、二隻は沈黙した。昼食時はとうに過ぎ、まばらになった食堂で、ただふさぎ込む二隻を、声もかけられないまま、出迎えを済ませた睦月が見ていた。

＊　＊　＊

大本営の古参艦が、二隻ほど陸で沈んでいたちょうどその頃、方々で話題の彼女は、案外と元気に海を駆けていた。
索に繋がれたボートが波に跳ね、上に載ったドラム缶が傾いだ。固定用にきつく縛った縄が軋む。馬力のない彼女にとって、この金属の円筒は、動き出してしまえばさほどでもないが、その動き出すまでが、意外と重い。今回のように六つ載せてともなると、出航も停泊も一苦労であった。
実のところ、彼女自身のことだけを考えるのなら、どの物資もさほど量は必要ない。ドラム缶一つか二つで充分だ。
だが彼女がとりあえずの使命として、自分自身に任じていることを鑑みるに、物資の備蓄は、いくらあっても足りるものではないのである。
特に今回は、つい先日に大破した重巡を、一隻サルベージしたばかりで、主に高速修復剤が心許なかった。この際ついでと、燃料の貯蓄も考え、この気の利かない金属筒を、不恰好なボートに六つも載せて、

えっちらおっちらと海上を駆けずり回っていたのである。
いたのである、が――。
「ほら、これ」
「あ、ありがとうございます……」
つい先程のことである。
馴染みの燃料採取地点のすぐ近く、具体的には、小さな島を挟んだ逆側のあたりから、砲撃音を確認した。
ボートを置いて急行してみれば、島の浅瀬にほど近い場所で、燃料切れの艦娘が、大量の敵性艦に群がられているのを発見。
とりあえず敵性艦を片付けた後、艦娘に直掩機をつけてボートを取りに戻り、積んだばかりの燃料を差し出すはめになった。
「それで、なぜこんな中途半端なところで？」
「あ。ええ、と……です、ね」
なぜか妙に歯切れ悪く、艦娘は話し始めた。
「気づいたら、海の真ん中に立ってたんです」
「そうか、よくあるな」
「現在位置がわからなくて。だからとりあえず……」
「――待て」
嫌な予感がして、彼女は指先でこめかみを押し揉んだ。
「まさか、無策なまま、適当に航路を……」
どうか肯定しないでくれと思う内心のまま、語尾を濁して推察を披露すると、艦娘は誤魔化すように曖昧に笑った。
「つまり、見通しが立たないまま、いたずらに燃料を浪費した挙句、腹が空いて動けなくなった、と」
「え、えっと。えへへ」
「どこの迷子のおチビちゃんだ……」
「おチっ……!?？　小さくないですぅ！」
「図体のことを言ってるんじゃあないぞ……。ところで――」
小動物じみた可愛らしさで、艦娘は一丁前に憤慨してみせる。そうしながらもりもりと、可愛くない量の燃料を瞬く間に補給していく姿に、彼女は微かに頬をひくつかせた。

「御前さん、よく食べるな」
「ご、ごめんなさいっ」
　思わずもれ出た、ごく正直な感想に、艦娘が縮こまった。小動物を彷彿とさせる仕草といい、妙な腰の低さといい、この手合いはどうも邪険にできない、と彼女は苦笑する。
「いいさ。たんとお食べ」
　ひどく穏やかな気持ちで促すと、艦娘が釈然としない面持ちで眉をハの字にする。
「そんな子供みたいに――」
「お黙り腹ペコおチビ」
　む、と黙り込み、艦娘は拗ねたように補給速度を上げた。さして時間もかからずに、三つ目のドラム缶にとりかかり、半ほどまでそれを減らすと、満足したように顔を上げる。
「ご馳走さまでした。本当に助かりました」
「それは良かった」
　それで、と彼女は再び話の口火を切る。
「おチビはこれからどうするのかね？」
「おチビ――いえ、あの。日本近海まで行きたいと思うのですが……」
　反射的に文句を言いかけたが、無駄と悟ったのか、本題を進めることにしたようだ。立ち往生した理由が理由であるからか、自信なさげに、両の指先を弄ぶ。
「それでいいと思うが……。正直、心配だな」
「ありがとうございます。でも私だって、これでも――」
「わかっている。だがそうではなくて、このあたりは最近やたらと敵性艦が多いんだ。しかもよくエリートやフラグシップ――通常よりも強力な個体だな――が混ざっている」
　率直に現状を伝えると、さすがに不安になったのか、声色がさらに情けなくなった。
「……そんなにですか……？」
「あぁ。とにかく数ばかり多いんだ……。近々また大侵攻があるのかもしれない。御前がどんな艦娘であっても、単艦で日本近海を目指す

のはお勧めできない。数で押されれば、どんな艦でもいずれ力尽きてしまう。御前は生まれたてで、まだ慣れていないし、その砲だと音でうじゃうじゃ集まってきそうで恐いな」
「うぅ……」
　先程、実際に群がられたときのことを思い起こしたのか、艦娘は眉を寄せてうめいた。顔が可愛らしいと、どんな表情をしてみせても絵になるものだ、と場違いな感想を抱きつつ、意見を述べる。
「だが、大侵攻があるということは、こちらに艦隊が来るということだ。もしかしたら複数鎮守府の連合艦隊かもしれない。私はほとんど毎日、この近海に偵察機を出しているから、どこか近くでドンパチやっていれば、必ず気づく。御前はそれに便乗するのが、最も安全で確実だと思う」
「そう……ですね。でも、そうすると、それまでどうやって生き延びれば……」
「なんなら、私と来るかね？　おチビ」
　気づけばなんの躊躇もなく、するりと提案していた。
「私はこのあたりこのことなら、だいたい知っている。燃料が手に入る場所も、敵輸送船の固定航路もだ。幸い私自身は燃費がいいから、御前が好きなだけ食べたところで、さして困らない」
「え、で、でも……」
　突然の誘いに戸惑ったのか、艦娘は大きな瞳を瞬かせつつ、彼女を見つめた。彼女自身も、らしくないとは思っていた。世話焼きは今更だが、あまりに踏み込みすぎではないかと。
　しかし、この可愛らしい迷子の子供を、こんなややこしい時期に単艦で放り出すなど、彼女にはとても許せるものではなかった。
「あ、あの……」
　ただ案じる思いのまま、なんのてらいもなくその瞳を見つめ返していると、艦娘は照れたのかほんのりと頬を染めて、視線を伏せた。ほんの少し、残念だ、と思ってしまった。
「本当に、ご迷惑ではありませんか……？」
「どこがかね？　そもそも、誘っているのは私なのだがね」

ここまできて、やたらと皮肉げな返し方をしてしまう自分自身に、彼女は苦笑した。自分というのは、どうしてこうも、真っ直ぐに優しくなれないのか。まったくもって、七面倒なやつだ、と内心で自らを罵る。

その苦笑をどう捉えたのか、艦娘は一瞬ぽかんとした顔をした。

ややあって。

「ありがとう、ございます。それでは、あの……。よ、よろしくお願いします」

「あぁ、こちらこそよろしく頼むよ」

もう、行こうか――そう声をかけ、接舷したボートに、空になったドラム缶を積み直し始めると、艦娘が慌てたように、中身の残った三つ目を持ち上げた。わざわざ重い方を選んで手伝おうとしてくれたのだろう。そのまま、もう一つの空のものも手早く積んでくれた。優しい子である。後で愛でよう。

思考がすっかり保護者のそれになっていることに気づかず、彼女は固定用の縄をかけ直す。

「あ、あの！」

「ん、なにかね？」

「お名前、もしかして鳳翔さんですか？」

艦娘の勘違いに、数瞬だけ顎を落とした後、彼女は眉を下げて笑った。

「いいや、残念ながら違うよ」

「で、では……」

「竜飛だ」

彼女は艦娘に向き直った。煤色の行灯袴が揺れる。

無骨きわまりない、黒籠手に覆われた左腕と、使い込まれた弓懸を挿した右腕を、ぐいと組んで、仁王立ちする。潮風に吹かれ、後ろで一筋にまとめた黒髪が、苔色の着物の肩にさらりとかかった。

「私は、竜飛という――憶えていてくれ」

女性弓士というよりも、若武者を彷彿とさせるような、精悍な表情。威風堂々とした態度で、それでも不思議に優しく、柔らかく、彼女は

そう名乗った。
　方や不恰好なボートの上に揺られて仁王立ち、方や小島の浅瀬に足を浸して身を縮ませ、あまりにも様にならないありさまで、それでも、これもまた、いつかのような宿命じみたものを予感させる、そんな出逢いであった。
「はい！　わ、私は――」
「知っている。おチビだ」
「ち、違っ！　もう‼？」
　拗ねむくれる艦娘を引き連れ、機嫌よくのびやかに笑いながら、竜飛はボートを曳いて、出航した。

二節　導ヅ涅（どうづくり）

艦娘――おチビにとって、竜飛は奇妙な空母だった。
自らと同じく、元は人ではなく軍艦であったのだろうに、実にもの慣れた様子で、生活に必要な様々を、容易く用意してみせるのだ。
それもここは、人のいた痕跡があるにせよ、今は無人の孤島である。加えて、残っていた建物のうち、最もまともだったのが、二隻が拠点としている、古い納屋もどきだというのだから、在りし日の環境にしても推して知るべし、といったところだった。
「ああ、ほら。おチビ。おやつだ」
「え、あ、はいっ」
ひょいと下手に投げ渡されたそれを、おチビは慌てて両手で受け取った。黄色っぽくて所々が茶色く変色した、ずんぐりとした形。掌より少しだけ長い、おそらく木の実と思われるものだった。もっとも、おチビの持つ木の実の印象からは、だいぶ外れていたが。
「これは……？」
「バナナだ」
「バナナ⁉？」
木の実よりもさらに予想外だった正体に、おチビはその果物を、ためつすがめつ、まじまじと見た。おチビの知っているバナナといえば、もっと真っ黄色で、すらりとした三日月型のものだったのだが。
「そう、野生のね。野生化したのか、そもそも野生種なのかは、わからないが。ここは南国だからか、さほど苦労せずとも食べ頃のものが見つかる」
こともなげに言いつつ、風呂敷のように結んだ布切れを開き、次々と野生のものらしいバナナを、取り出して並べ始めた。頃合いのものを選んで採ってきたらしい。
それを尻目に、おチビは好奇心の命ずるまま、丸っこいバナナの皮を剥き始めた。なかなか上手いことといかず、爪を使って切れ目をいれ、皮を割るようにして実を露わにする。

「えっ。な、なに？」
多少の苦労をして剥いたバナナの実は、皮より薄い色のでんぷん質は想像のままに、その果肉を透かすようにして、黒い粒をいくつも内包していた。予想外の正体よりも、さらに思ってもみない中身に、おチビの首から上が軽くのけぞる。
「原種に近いものは、種が多いんだ。硬いから気をつけろ」
素直な反応に苦笑しつつ、竜飛。
少しばかり不気味な見た目に反し、漂う香りは甘く、よく熟れたバナナのそれだった。おチビはおそるおそる端をかじり、香りを裏切らない甘みに、頬を緩める。
ふと顔を上げると、竜飛が眼を細めてこちらを見ていた。真顔だときりりと吊りがちな柳眉や目尻が、今はなんとも穏やかに、柔らかく下がっている。その微笑が、揶揄するものではなく、慈しむものであると思い至って、おチビは赤面した。
「気に入ったのなら、好きなだけ食べなさい。種の分、食べ応えが足りないかと思って、量を採ってきたんだ」
反射的に頷いて視線を泳がせるおチビを、さらに笑みを深くして数秒ほど見つめたあと、竜飛は弓矢を携えて拠点を出た。
そう、これだ――と、おチビは思う。
竜飛は、あまりにも多くのことを知っている。ただの知識としてではなく、もっと有機的で、実践的なものとして。
人を生かすための文明の加護など、ここではとうに死に絶え、その残骸ほどしか見当たらない。食を一つ賄うのにも難儀するような、生き残るだけでも一苦労のこの環境で、そのとき最も肝要なことを、要領よく整えてしまえる。
人が生存するために必要な、最低限のものを肌身で熟知し、それを得るために、まずなにをすればいいか、微塵の迷いもなく判断する。さらに突き詰めていえば、自分が死なないための、考え方の枠組みが、すでに自分の中に出来上がっている。これは、まっとうに生き物として生き、生き物として考えることができないと、不可能なことなのではないか、とおチビは思う。

その、いわば生存本能とも呼べる素養は、自分にはない。あるのは、どちらかといえば闘争本能の類である。

この違いをどう解釈していいかわからず、竜飛自身と話をしてみれば、それは単純に、場数や経験の差に過ぎないのではないか、と首を傾げていた。こう見えて、それなりに年季が入っているんだ、とも。

納得できなくはない。だがやはり、釈然としないものがある。必要にかられて身についたような、後づけの技能ではなく、もっと根本的な部分で。竜飛の中に、なにか、自分のような生き物ではなかったものとは、性質の異なるものを感じるのだ。

その異なるものの一つが、先程のような、竜飛が時折してみせる表情である。

ついこの間まで金属の塊であった自分が、上手く飲み込めずに持て余してしまう、血の通った、生きた感情。それを、竜飛はごく自然に、受け入れ、吟味し、当たり前のようにかたちにしてみせるのである。

このバナナのように、おチビにもわかりやすいかたちで、ひょいと渡されるものも多い。あまりにさり気なさすぎてその時にはわからず、しかしなぜか後々にまで印象に残り続け、何度か思い返すうちに気づくものもたくさんある。

嫌だなあ、と思う。

それがひどく素敵で、同じようにできたら、どんなにいいだろうと、そう思ってしまうからこそ、おチビは苦しくなる。

自分は、戦うものであったはずなのだ。そのためだけに費やされるものであったし、今もそうであると考えていた。建造された理念も、希求された役割も、運用された目的も、なにもかもすべてが徹底して、戦うためのものだった。造られてから沈むまで、その因果は最初から最後まで、もつれることなく一本の線でつながっていた。それこそが、自分というモノの本質で、本懐であった。

自分はなにかを作るものでも、かたちにするものでもない。あくまで、それを目的とした人間たちによって、ただ使われるための道具であったはずなのだ。

だからこそ、自分を使ってもらうことで、勝利と敗北のどちらかの

結果を出す以外に、自らの存在を示す術を、おチビは知らない。
しかし、今はどうだろう。
冷たく堅いはがねの体を――それを操舵するひとの手を、往く先を示す意思を失った今は。熱く柔い体を、かたちもわからない心で、闇雲に動かしている、今この時は。
どれもこれもが、あまりにも頼りなく漠然として、はっきりとしたものなど、なにもないように思える。だがそれこそが、今の自分の持つ唯一のもので、もはや自分を操舵できるのは、この覚束ない自分自身をして他にないのだ。
こんなものを抱えて、かつて自分に乗っていたひとたちは、どうして戦えたのだろう。
こんなふうに生まれて、あのひとたちは、どうして海を往けたのだろう。
自分はこれを――自分自身を、どこに向かわせればいいのだろう。
いったい、心とは、どこにあるものなのか。
おチビは竜飛の笑みを見るたび、しばしばその命題へと突き当たる。
たとえばそれが、眼に見える部分にあったのなら。そうでなくとも、せめて、この、手に入れたばかりの肉の体で、じかに感じられる所に宿っていてくれたのなら。それがどんなかたちをしていて、どんな色で、まぶしいのか、暗いのか――触れれば熱いのか、冷たいのか、心地よいのか、痛いのか、すぐに知ることができるのに。
どうして腕や脚を動かすように、心を動かすことが出来ないのだろう。それができれば、竜飛がどんな気持ちで、どのようにして、なにを選んでそれを生み出し、なんのために海を渡り、どうしておチビに微笑むことができるのか、わかるはずなのに。
なぜ竜飛には、あんな表情ができるのか。
それを見ると、どうして、自分が道具であると思うことすら、苦しくなってしまうのか。
けれど、その疑問に苦しみつつも、それを手放すこともできないまま、おチビはどこかで、諦念と共に自嘲してもいた。

そもそもにして、道具(ふね)は悩まない。自らの使い道がどんなものであれ、それを肯定も否定もしないし、できない。
――だから、つまり、あぁ。自分はもう本当に、ただの軍艦(ふね)では、なくなってしまったのだ。
それは、おチビにとって、ほとんど自己否定に近い結論に思えた。
かつてしていたように、戦うために大海原を往き、ただ砲弾によって敵を屠り、それのみを存在意義とする、そんな自分ではもう、到底いられなくなってしまった。
――そんな自分では、もう足りなくなってしまったのだ。
そして、どうすれば足りるのかがわからなくて、おチビは未だ、苦悩し続ける。

＊　＊　＊

そうして二隻は、孤島での夜を、無事に十六度ほど乗り越えた。
無事に、というのは、なにも起こらなかった、という意味ではない。敵性艦による、小規模で散発的な襲撃こそあったが、それをほぼ無傷で切り抜けられた、という意味である。
そしてそのほとんどを、竜飛は一隻のみで退けていた。下位のものしか来なくて僥倖だった、とは当人――当艦の言である。
「せっかく整えた生活基盤が惜しいが、そろそろ潮時かもしれない」
もとは現地住民が飼育していたのだろう、野生化して生き残っていた鶏を絞めてさばき、これも自生していた空芯菜と共に調理した夕食をとった後、竜飛はやや唐突にそう切り出した。
「潮時……。拠点を移そうとお考えですか？」
「そうだ。二日ほど前の襲撃で、敵性艦を一隻とり逃してから、襲撃頻度が上がったように思う。駆逐イ級――確認されている中で最も下位の艦種で、数で押してくるだけの印象が強いが、より上位の艦種に情報を伝達するくらいの知恵はあるのかもしれない」

破れたシーツをつなぎ合わせた、大きな布の端をつまみながら、竜飛は推察を口にした。白かったであろう布は、今は点々と歪んだ水玉のような模様が描かれている。竜飛が偵察機と自身の眼で確かめた、かなり大まかではあるが、周辺海域と群島の位置関係を記した略図らしい。

長さ半分に割れた、戸板とおぼしきものを天板に、簡単に脚をつけただけのテーブルもどきの上で、しわの寄ったそれを平らに広げる。

「連中の生態については、実はまだ、あまり解明されていなくてな。つまり、どれほどの精度で情報を伝達できるのか、はっきりとはわからないんだ」

「なるほど。となると、伝達の精度が高かったとして、上位艦種の速力が速いと考えると――あぁ、本当に潮時ですね」

「そうだな。まぁ、よく保った方だろう。それに、敵性艦がその末端まで、我々が考えているよりも、さらに組織立って動いていたとしてだな。私たちに沈められて消息を絶った艦隊が、どこを航行していたのかは、向こうもやはり把握しているはずだ。そう考えると、こちらの対応はむしろ楽観的もいいところで、無用心と言って言いすぎでもないくらいだった。反省点だな」

御前をいたずらに危険な目に合わせてしまっていた――謝罪する竜飛に、おチビは慌ててかぶりを振った。

いわば年長者としての責任感なのか、矜持なのか、それともまさか庇護欲なのか、竜飛はやたらと過保護なことがある。大袈裟だと思わなくもないどころか、むしろ艦種の違いや仕様と性能、艦隊での役割からすると、場合にもよるが竜飛の方が、おチビに保護されるのが普通のはずである。

むろん、竜飛自身もそれはわかっているのであろうが、それでもこの立場を崩そうとはしない。その姿勢が、今のおチビには心地良かった。

「対抗しようにも、私と御前しかいない上、四方を海に囲まれたこの状況で、護るべきものもないのに防衛戦など馬鹿馬鹿しい。少数である身軽さを生かして、次々と拠点を移していく方が、よほど理にかなっ

ていると思う」
竜飛がボロ布の上、いくつも散らばる島々の一つ、ほとんど丸にしか描けなかったのであろう、小さな島を指し示した。
「ここが、この拠点だ。一応、この周辺のめぼしいところは、以前の資材集めの際に、偵察機越しではあるが調べてある。行き帰り合わせて三日程度の範囲に、上位艦種が潜んでいそうな規模の敵泊地はなかった」
拠点を中心にした一定の範囲を丸く示す。
いくつもの孤島を内包するその範囲を、彼女は偵察機があるとはいえ、一隻のみで調べまわったのだという。
「だから、とりあえず今夜くらいは、無事に過ごす程度の猶予はあると思う――これが、精一杯の楽観といえば楽観だ。だが念のため、いつでも撤収できるように準備しておこう。夜中に叩き起こされて、全力で尻尾を巻く覚悟も、な」
これからする悪戯の内容を暴露するような、なんとなく楽しげな笑みを浮かべつつ、竜飛は肩をすくめた。その笑みが殊の外、彼女には似合っていて、おチビの顔にも、ぎこちないながら、釣られるようにして笑みが浮かぶ。
出逢ってすぐは、竜飛の、あまりものに構わない態度や、やや淡々とした普段の語り口のせいで、朴訥とした性格なのだと思っていた。だが、しばらく一緒に過ごしてみれば、よくおチビを気遣う様子をみせるし、物腰も柔らかいのだとわかった。
「できれば次の拠点は、近くに小さくてもいいから断崖を見つけたいな。艦載機の発着艦に関して、少し考えていることがあるんだ」
「次の拠点は決まっているのですか？」
「いくつか目星をつけてある。御前の意見も聞いてみたい。一つは――」
おチビをあくまで庇護対象としつつも、竜飛がおチビに対し、本当に格下にするような、一方的な命令をしたことはほとんどない。作業の足並みをそろえるための指示や、安全面に慮った警告はあるにせよ。

もっともこれは、おチビが未だ戦闘らしい戦闘をしていないため、単に経験していないだけとも思える。だが、もしそう振る舞うことになったとしても、竜飛にそうされるのであれば、それでもいいとおチビは思っていた。

布地をなぞる短い爪の先を見つめながら、竜飛の声に耳を傾ける。

いつもは弓懸に固められている右手が、いまはありのままの姿でおチビにさらされている。長くしなやかながらも、骨ばった指だ。ごく細かな傷跡が所々を飾るそれは、自らを用いることに練達し、この体で生きることに長けたものの手に見えた。

わざわざ並べて比べるまでもない。彼女におチビなどと呼ばれている自分より、ずっと小さく細い手だ。否、手だけではない。どこもかしこも、竜飛は自分よりもずっと小さくて華奢だ。

それでもこの細い肩で、彼女はおチビを護るための手筈を次々と立て、そして実行している。

その背の、なんと頼もしいことだろう。

彼女のようになりたい。ほとんど傷もなく、滑らかなままの自分の手を見下ろして思う。

自分が、どうして生き、どうして戦い、どうして笑むのか、その理由がほしい。それさえあれば、おチビは他のどんなものより、ずっと強いはずなのだ。

強さの実例が眼の前にいる。しかし、それはあまりに途方もない過程の、その先にいるように思える。まだ、生きるものとしてなにができるかすら、わからない自分には。

「さて、とっとと眠ってしまおう。疲れを残さないように、だが寝ぼけないように」

「人間の休息って、ちょっと難しいですよね」

「なに、すぐに慣れる」

ひそやかな苦笑をもらしつつ、毛布をかぶって壁に寄りかかる竜飛に倣い、おチビもところどころほつれたハンモックに、毛布を羽織って絡まった。

そうして、十七度目の夜が更けていった。戦いなど、この世のどこ

にもないのではないかと思うほど、静かな夜だった。
だがその静寂は、黎明を待たずして破られた。
ある意味で、竜飛の言う楽観が、本当に楽観であったことを、二隻は予想だにしない形で思い知らされることになる。

＊　＊　＊

空が白み始めるより少し前。その砲声に気づいたのは、二隻ほぼ同時であった。
「……竜飛さん。今、なにか……」
「聞こえた……。微かだが、砲撃か？」
そろって遅滞なく跳ね起きる。遠く海側を望む、枠だけに成り果てている窓の傍に、二隻とも背をつけて外をうかがい見た。
「で、弾着は？　おチビはわかったか」
「いいえ。こちらへの砲撃ではないのでしょうか」
「……今、また聞こえたな。海岸から隠れる場所を拠点にしたが、こちらも発砲炎が見えない……。襲撃じゃあないのか？」
呟きつつ、竜飛は弓と矢筒を展開して、収納されていた探信儀を伸ばした。
「竜飛さん？」
「海岸線に沿って、数ヶ所に偵察機を残しておいたんだ。今、発艦指示を出した。まだ暗いが、せめて少しでも――」
言葉が途切れた。ぐい、と、怪訝そうに眉間にしわを寄せた次の瞬間、竜飛は微かに頬を引きつらせ、弾かれたように窓枠を跳び越えた。
「た、竜飛さん⁉？」
「艦娘だ」
走り出す竜飛の背を、おチビは慌てて追う。
「艦娘の少数艦隊が、敵性艦に襲われている」
おチビは息をのんだ。

竜飛は振り返りもせず、拠点を隠す木々の中を疾走する。おチビより小柄で、手脚も相応の長さであるはずが、とてつもなく速い。未だ四肢を使いこなせないおチビは、危うく足をとられそうになりながら、必死に後に続いた。そのまま、ちょっとした入り江状になった海岸まで、一息に駆け抜けてしまう。
「あぁ――一隻やられた」
「行きましょう！」
「こちらも発見されるが、いいか？　覚悟はできているか？」
確認する竜飛に、おチビはきつく瞑目しつつも、一呼吸すら悩まず、答えた。
「助けましょう！　邪魔をするなら、私の主砲でなぎ払ってみせます！」
「頼もしいな。できれば撃たずに済ませたいがね。　――抜錨！」
「はい！　出撃します！」
浅瀬の水を蹴立てて、竜飛が海へと飛び込んだ。おチビも巨大な艤装を展開してそれに並び、速力の差からすぐに追い越す。
「岩陰から抜けて二時の方向！　すぐそこ！」
「了解！　右回頭します！　――面舵六十度のち定針！」
すれ違いざまの指示に応え、おチビが先行した。
宵闇が恐ろしいほどに黒々としていて、眼と鼻の先にあるはずの、左右からせり出す岩肌ですら、上手く判別できない。稜線を透かし見るようにして、ようやっと形がわかる岸壁を抜けて、すぐさま右に転針した。
後ろで竜飛が発艦した直掩機が、おチビを見失わないように低空で追従してくるのがわかった。
未だ夜明け前の、視覚などほとんど意味のないような時間帯である。今まさに海上を往くおチビの眼にも、空と海との区別がつかないようなこの状況では、艦載機を飛ばすこと自体が至難の業だ。敵味方の判断が難しいばかりか、方向感覚を失って、海面に衝突しないだけでも御の字。もはや完全に気休めにしかならず、目覚ましい働きは期待できない。

［こちら竜飛。感明は？］
竜飛から近距離無線の感度確認がとんだ。
「こちらや――おチビ。感明良し」
眼をすがめて前方を見やる。さほど離れていない位置に、ほんの一瞬、強い光が散った。続いて聞こえてくる、砲声。おチビは歯噛みした。
「前方に発砲炎確認！　敵性艦のものです！」
おチビが無線に向けて叫んだ。
［艦娘との距離はわかるか？］
間髪いれずに、問いが返ってくる。落ち着いた声色に、おチビもやや宥められた。
「ほぼ肉薄距離です――今、また……」
［こちらでも発砲炎を視認できた。まずいな、ほとんど抵抗できていないんじゃあないか］
「竜飛さん、私が割り込みます！　砲撃許可を！」
もう嫌というほど、砲撃音が響き渡った後だ。もはや潜伏の目的で砲を封じておく意味はないと、おチビは判断した。竜飛もそれに同意する。
［わかった、許可する。距離が近いから、主砲の扱いには注意してくれ］
「了解！　突撃します！」
せめて、もう少し明るくなっていれば――荒いようでいて実際はかなり穏当なあの竜飛が、めずらしく舌打ちと共にひっそりと愚痴を零す。無線が律儀に拾ったそれが、状況の酷さを物語っていた。
唇を噛み締めつつ、さらに加速する。そのまま戦闘海域を突き進み、微塵の躊躇もなく敵艦の前に滑り込んだ。艦娘と、間もなくその傍につくであろう竜飛を背後に隠して、おチビは鎮座する。時折いたたまれなくなるほど大きな体躯が、この時ばかりは有難く思えた。
千にも満たないであろう、ほとんど肉薄と呼べる距離で、発砲炎が上がる。おチビはすぐそこに上がる水柱に眉を寄せつつ、主砲の方位角を修正。眼を凝らした。数秒後、再びの発砲炎にほんの一瞬、おぼ

ろげに敵艦影が浮かび上がる。
「敵艦見ゆ！　戦艦二、重巡一、駆逐一！」
　至近弾から腕で眼を庇いつつ、無線に報じた。砲弾の破片がかすったのか、前膊に微かな痛みが走る。
［了解！　無理はするなよ。敵の眼を引きつけてくれるだけでもいいんだ。その間になんとか撤退させる］
「できる限りやってみます！　諸元入力完了！」
　砲撃準備が整う。砲弾は三式弾。視界などほぼないといっていいこの状態で、一撃の火力よりも面での制圧に重きを置いて、敵艦の行動を阻害する選択をした。
「主砲斉射用意！　――撃ちます！　警報！」
　警告音から一拍。轟！　と大気が震えた。凄まじいばかりの爆風圧が、おチビを中心に海面を抉るように砕いた。放たれた砲弾が敵艦隊を目前に炸裂し、子弾が雨あられと降り注ぐ。
「敵艦隊、進行止まりました」
　対地攻撃にも秀でていた砲弾だ。装甲を抜けないため、対艦において決定打とするには難しいが、それでも構造物――この場合、敵艦の装備や艤装――を灼くには充分であった。
［よし。もう少しそのまま踏ん張っていてくれ。ようやく接舷できた――しっかり！　応急を報せろ！　動ける艦は曳航を！］
「了解。砲戦、続行します！　――装填完了！　仰角修正！」
　状況を交換しつつ、各々が対処する。急造の、艦隊とすら呼べないたった二隻の遂行能力としては、すでに限界を突破していた。
　故に天秤は、ほんのひと匙で、いとも簡単に逆へと傾く。
「警報！　全主砲、薙ぎ払え！」
　警告音に続いて、再びの轟音。この砲声の前では、雷神とて縮み上がるに違いない。
　三式弾に換わり、九一式徹甲弾が猛然と敵艦に喰らいついた。容赦なく黄色い光をくゆらせた戦艦に大穴を穿ち、余波だけで駆逐艦をも吹き飛ばす。残るもう一隻の戦艦と重巡も体勢を崩した。これを好機と、おチビは次弾を装填する。

瞬間、背後でくぐもった破裂音が響いた。水しぶきが上がる。
「な――」
［雷撃！　どこから――おい！　……駄目だ、沈んでしまった……！］
水滴が叩きつけられる音を混じらせて、竜飛の呻くような声が無線から届いた。
「竜飛さん！　今……！」
［駄目だ！　そっちに集中しろ！］
「ぐ――！」
唸り声がもれる。
竜飛を助けに行きたい。彼女の装甲が薄く、速力も決して速くないことを、おチビはよく知っていた。孤島生活では作業の手助けの際に、彼女に触れることもよくあった。力の強すぎる自分は、最初はそれすら躊躇われるほどだったのだ。握った腕に痣を作ってしまったことも、何度もある。
これまでの期間、ほぼ彼女のみで襲撃に対応できていたのは、単純に経験が多く、要領が良いだけだ、と竜飛自身も語っていた。その上、今は傷ついた艦娘の救出を試みているのだ。これでは雷撃を、咄嗟に避けることすらできないに違いない。
助けに行きたい。今すぐ助けに行きたい。おチビは焦燥に駆られる。
おチビが見せた、たった一息のみの硬直に、敵艦は体勢を立て直し、反撃を開始した。おチビの足元で、海水が爆ぜる。至近弾だ。砲弾の欠片がかすめ、左脚が血をしぶく。
「くっ……」
いつ直撃が来てもおかしくない。おチビの装甲なら耐えられようが、砲を破損してはさらに戦況が悪化する。撃たれる前に撃たねばならない。
砲撃姿勢をとる敵戦艦を前に、なんとか追いつこうと砲身の角度を動かしたその時、敵重巡が唐突に爆ぜた。激しい波に、敵戦艦が出鼻をくじかれる。

瞠目するおチビの頭上を、直掩機――竜飛の九七式艦攻が通り過ぎた。
［おチビ――夜明けだ］
静かに、いっそ寒気がするような口調で、竜飛がささやく。
水平線の彼方が、じわりと緋に染まった。払暁の時間。夜が取り払われ、闇に隠されていたものが、その姿を表し始めた。
無線の向こうで、竜飛が吼える。
［爆撃機、発艦せよ！　直掩機、援護にまわれ！］
凄烈な声だった。
無線を介してすら、焦れ乱れたおチビの精神に冷水を浴びせるほどの、凄味を帯びた声色であった。おチビの知る、朴訥としながら柔らかい、いつもの竜飛のそれではなかった。
［爆撃甲、及び直掩機、敵本隊へ！　爆撃乙！　八、六時の方向、対潜開始！］
甲乙はどうやら、航空隊につけた区分かなにかであるらしい。
竜飛から飛び立ったのであろう艦爆が、おチビを追い越して行った。大きく旋回するように高度を上げていく。直上に至るや、すでに虫の息だった敵重巡と、中破の敵駆逐を周囲の海水ごと爆撃で吹き散らした。
［おチビ！　畳んでしまえ！］
爆撃音の混じる竜飛の無線が、惚けるおチビの横っ面を張り飛ばした。
歯をくいしばる。そう、ぼんやりしている場合ではない。未だ期待された役割の、半分も終わってはいないのだ。
「次弾装填――！」
叫ぶ。もはや悲鳴じみた声だった。なんて無様なのだろう。戦うことにだけは、長けていたはずだった。そうでなければいけなかった。なのに、なんなのだ、この様は――己を罵倒しつつ、砲は速やかに角度を変える。
「警報！　全主砲、斉射！」
三度目の、警告音と砲撃。自らの足元ごと粉砕するような爆風圧と

反動に、おチビはぎりぎりと奥歯を噛み締めて堪えた。
解き放たれた砲弾が、最後の敵戦艦を半分に吹き飛ばす。白煙にくもる視線の向こう、敵戦艦の残った下半身が、飛沫をあげて海面に崩折れ、沈んでいくのが見えた。
[……やったか？]
「敵艦隊、殲滅しました……」
[こちらも、別動の敵潜水艦二隻、浮遊物を確認した。なんとかなったようだな……。よくやってくれた]
心から安堵したような、吐息混じりの声で竜飛が労う。そこに、先程の裂帛とした気勢は見当たらない。そのことに、おチビはなぜだか、少し情けない気分になった。
[こちらは二隻の生存を確認している。両方とも大破だ。しかも片方は意識がない。曳航を手伝ってくれ]
「了解です。すぐに向かいます」
ため息をもらしつつ、おチビは後方に回頭した。自分自身の心の問題はそれとして、今はとにかく艦娘たちを保護しなくてはならない。なにを考えるにしても、まずはその後だ。
夜が明けたこともあり、竜飛たちを見つけるのには、まったく苦労しなかった。眼で距離を測るに、おチビは艦娘と敵艦の、ちょうど中間あたりに横槍を入れたらしい。この場合、槍はおチビ自身ということになるが。
益体もないことを考えつつ、さらさらと航行する。さほど時間もかけず接舷したおチビを、どうやってか水面に座った竜飛が、籠手に包まれた腕を軽く挙げて迎えた。両肩に、一隻ずつ艦娘を寄りかからせている。両方とも弓懸を挿しているのを見るに、どうやら空母らしい。夜戦で無防備になり、抵抗できなかったのであろうが、かえって標的になりにくかったのかもしれない。
「あぁ――お疲れさま、おチビ。本当によくやってくれた」
「いえ、そんな……」
緩くかぶりを振る。謙遜ではなく、おチビは本気で自分自身に落胆していた。

おチビの心持ちを知ってか知らずか――まず前者だとおチビは思うが――竜飛は朗らかに笑い、意識のある空母を眼で示す。
「彼女を頼む。私はこの子を曳いていこう」
「了解です。――失礼しますね」
「はい……。すみません。よろしく、お願いします……」
苦痛を堪えるように息を詰まらせながら、その空母は律儀に謝意を伝える。おチビより小さかったため、両手を腕の下から通すようにして、半ば吊り下げるように支えた。身長が違いすぎて大人と子供のようだ。
竜飛は意識のない方を、正面から抱えるようにして、首に両腕をまわさせていた。こちらは支えられる方が竜飛より大きいので、ほとんど上から覆いかぶさっているように見える。
昏睡する空母の肩越しに、竜飛がおチビを見た。
「とりあえず、拠点に引き返そう。移動は延期して、まずはこの二せ――」

この直後に起こった出来事を、おチビは自分が水底に還るまで、忘れられないだろう。
否、還ってからも、その先も、決して忘れられないだろう。

「危ない!!?」
おチビに身を寄せ、脱力しきっていた空母が、凄まじい勢いでおチビを振り払った。身をひねって竜飛の方に突進し、飛びつくようにして、それを押し飛ばす。
勢いのまま、宙に泳いだその空母の右半身が、なにかに抉り取られるようにして消し飛んだ。異様なほどくっきりと見える、散り散りになる肉の欠片。血の雫。
事態に引きずられるようにして、遅れて聞こえた、轟音。
すなわち、砲声。
すべてが、緩慢に感じられた。弾かれるように振り向いた、その動作ですら、粘り着く空間の中をかき回すように、ただひたすら鈍く思

えた。
「し――」
だが実際のおチビは、驚異的という表現すら生易しいような反応速度で振り返り、主砲に次弾を装填し。
「に――」
対象――腹に大穴を開けた、黄色く輝く戦艦ル級――を確認し。
「ぞ――」
方位角を修正し、砲撃姿勢をとり。
「こないがァァァァァ――ッ!!?」
そうして、自らの砲声にすら勝ろうかという声で、絶叫していた。

＊　＊　＊

大きすぎる背中の、幼すぎる艦娘（ふね）が、慟哭した。
癇癪を起こしたように、重すぎる砲で、泣き叫んだ。
それを聞きながら、助けたはずの者に助けられ、その血で真っ赤に染まった竜飛は、水面に仰臥する空母の傍に膝をついて、身を屈める。
「――は。ず、かく、は。……」
慟哭も砲撃も、ほんの一度で止み、ひどく静かな海が戻った。
その海の上。吐息よりももっと弱々しい声で、白い空母はただそれだけを訊ねた。
その声が、潮騒にかき消されないよう、竜飛はさらに頭を下げる。
奇しくもそれは、贖罪を求める姿に似ていた。
「い、くは。ぶ、じ……？」
「あぁ、無事だ。ボロボロだけれど、無事、だ」
「ああ、ぁ、ぁ。よ、か……」
すっかり力の抜けきったその左手と、彼女が守った弓懸を挿す右手を、そっとつないでやる。
「きみは、すごいな――なんて立派なんだ」

万感を込めて、そう讃えた。自分の賞賛など、この空母にはなんの価値もないとわかっていても、そうせずにはいられなかった。

懸命に自身の指を動かし、弓懸から出た約束の指に絡め、空母は笑った。白い装束も、絹のように透ける髪も、すべてを自らの朱に染め、海水に浸しながら、笑った。くしゃりと笑って、ひとしずく、泣いた。

仄暗い水底に、朱が、煙のようにたなびいて落ちていく。

「おね、が……。お、が……ぃ、ます」

「あぁ、聞こう」

「ぁ、くを……。ず、……くを。いも、ぅとを」

「うん……」

「いもぅと、を……おねが、ぃしま、す」

「必ず」

切れ切れになる呼吸の中、最期の願いの言葉だけは、はっきりと口にして、白い空母はそれきり黙り込んだ。

もう、どこも見ることのないまぶたを、竜飛は優しく閉じさせた。ゆっくりと沈み始める姉の頭を撫で、そこに巻かれていた紅の鉢巻を、するりと引き抜く。

そのまま、ゆるり堕ちていく白い大鳥を、黙して見守った。籠手の内側に、託されたものを抱え込んで。

誇り高い姉が没し、完全に見えなくなってからしばし、竜飛はようやく瞳を上げた。その向こうに、大きすぎる肩が、重すぎる荷を背負って、ひとり立ち尽くしていた。

薄明に照らされ、その背は消えてしまいそうなほどに、儚かった。

知らぬ気にただ、海風は巡る。

三節　夜ガ前（ゆがまえ）

――もしかしたら始まる前から、すでに終わっているのではないか。

幾度となく想像し、その度に暗澹とした心地になったが、それは現実と、そうかけ離れていない結論に思われた。

彼女は空母であった。工廠にて建造されたが、それがどこの工廠であったのか、空母は知らない。教えてもらえなかったからだ。

ただ、その造られたての肉体というもので、感じることのできる外気の熱――気温というらしいそれは、おぼろげながら知っている故郷のそれよりも、ずっと高いような気がしたので、おそらく南の方なのではないかと、空母はそう当たりをつけた。

肉眼というものを得て、初めてみたものは、同じくひとのかたちに鋳直された姉の、涙であった。なぜそれを姉と思ったのかは、空母自身にもわからなかった。ただ、目の前の彼女に対する、奇妙なほどの慕わしさが、空母の胸膈を強く締めつけた。

記憶に強く残る艦名を呼んでみれば、はたしてそれは姉だった。仰臥して見上げる空母に、漂白されきったような白い髪を垂らして、姉は身を折るようにして、泣いた。

感情というものを、生み出すのも受け取るのも、まったくの初めてであった空母には、姉の涙の意味がわからなかった。ただ、自分の再びの誕生を、姉は祝福していないのだということ。自分は彼女に歓迎されていないのだということは、うっすらと察することができた。

ひとしきり、静かな嗚咽さえもらして落涙した後、姉は頬を濡らしたまま、取り繕うように微笑んでみせた。

しかしその頃にはもうすでに、得体の知れない疑念と不安が、さながら、かつて空母の上のみに雨をもたらした、あの雲のように、その胸中を覆い尽くしていた。

空母は、姉に手を曳かれ工廠を出た。おぼつかぬ足どりで通り抜ける廊下は、自分たちのような存在も、ただの人間もおらず、ひっそり

と静まり返っていた。
誰とすれ違うこともなく、姉は空母を連れてどんどんと、奥へ奥へ進んでいった。やがて、普段は使われていないのか、壁や床のそこかしこに傷んだ箇所のある区画へと入り、その最奥。頑丈そうな鉄扉を前に、姉はようやく歩を止めた。
そうして姉は言ったのだ。
――ここにいなさい。
――絶対に出てきては駄目。
あっけにとられる空母を、強引に鉄扉の中へと押し込んで、姉は足早に去っていった。
ひどく歪んだ、怖気の立つような笑みを、ひとつ残して。
だから。
もしかしたら、今の自分が始まる前から、すでに弁明のしようもなく、なにもかも終わってしまっているのではないか。
どうしてこうなってしまったのか、くり返し、くり返し考えて、そうして得たこの結論は、真実からそう遠くないもののように思えた。
――大好きよ。
ことあるごとに、姉はささやく。
在りし日々に、この身の幸運の、身代わりじみたことをさせてしまった彼女に、今度こそ幸運ではない確かなもので報いたかった。
けれどももう、本当はすべて手遅れで、かつての別離は、今生では決して取り返しのつかないものだったとして。これが、この仕打ちがそのツケだというのなら。
空母には、姉の思う通りにする以外に、もうどうすることもできなかったのだ。

＊　＊　＊

南国の昼は相応に暑い。

ぐいと頬を拭った腕に、乾いて微塵になった血がついた。
それを払おうと、着物の身頃に、こするように叩きつけてみたものの、細かな血の欠片がさらに飛び散っただけで、まるで効果がない。そもそも、その着物からして、元は苔色であったものが、今はどす黒く染まって乾き、衣ずれの度に血粉を落とすのだから、もうどうしようもない。
全身が鉄錆臭いのも、着物がごわごわするのも、血を浴びて乾いた肌がひりつくのも、もはやいまさらと、竜飛は諦めた。そもそも真昼中から火を焚いて、煙を立ち昇らせるわけにもいかず、かといって、肌についた血を、冷水のみで洗い落とすのは無理がある。
着物はもう、血のしみが落ち切らなくても、着られればいいや、と竜飛はこれも半ば投げやりに匙を放り捨てた。
夜明けの救出戦から、おおよそ半日が経っている。
あの後、茫然と立ち尽くすおチビを促し、敵増援を警戒しつつ拠点へと戻ってきた。海へと堕ちた空母から、その妹を託されて。
彼女はまだ目をさまさない。備蓄してあった、なけなしの高速修復剤は、その損傷を癒すのにかろうじて足りたものの、心身にのしかかる疲労までは、如何ともしがたいものがある。今はただ休ませておくのが吉であろう。
敵の増援を覚悟した割に、海は不気味なほど静かであった。それでも気を緩めるわけにはいかず、竜飛は休む間もなく、こうして海岸から偵察機を放っている。成果は芳しくない――というよりも、敵性艦を発見すらできず、その動向がつかめない。
先ほど発艦させた偵察機が戻ってきたら、今朝に使ったような簡易飛行待機場を経由させて、もっと広域の偵察に切り替えるべきか。それともいっそ、自分が単艦で偵察に赴くべきか――。
冷静な思考のもとでは、目まぐるしく現状の対応策を検討しつつも、竜飛は自らの胸中に居座る重たいものを、どうすることもできずにいた。
彼女が目をさました時、自分はその姉の結末を、どう語って聞かせればいいのだろう。そして、彼女はそれを、どんな気持ちで聞かされ

るのだろう。それを想像すればするほど、竜飛は胸が苦しくなった。
できるだけ傷が深くならないように、などというのは、あまりに都合の良すぎる願いだ。どんなに柔らかい言葉を選び、どう言い繕ったところで、彼女の姉が沈んでしまった事実は覆らない。
軍艦（ふね）であった頃はもちろん、艦娘となった今も、こうした永訣や離別の経験は避けて通れないものだ。
艦娘は戦っている。そしてそこに身を置き続け、それを手段と目的のどちらとするにせよ、ともかく関わり続ける限りは、必ず勝利か敗北、どちらかの結果を問われ続けることになる。竜飛も、おチビも、そして彼女も、戦い続ける限り相手を沈め、そして相手に沈められる。
けれども、と竜飛は思うのだ。
そんなものは、わかりきった御託であって、なんの慰めにもなりはしないのだと。そんな事実のみで誰もが納得できるのなら、そもそも自分のようなものは、生まれることすらなかったのだと。
心を持つものが、それを簡単に切ったり貼ったりできるようになっては、いけない。
弓を持つ左手が、胸もとの鎖を撫でた。
「――竜飛さん」
背後からかけられた声には、隠しようのない暗さがちらついていた。振り返れば、おチビが竜飛よりも大きな背で、所在なさげに立っている。
「おチビ。御前、傷を負っていただろう。戦闘もあったことだし、もう少し休んでいるといい」
おチビはふらふらと力なくかぶりを振った。動きに合わせて、桜色がひとつ、ふたつと儚く落ちる。
「小破以下のかすり傷ですから……。復元して、もう跡形もありません。それに、大したことはできませんでしたし」
「なにを言っている。充分に大したことをしてくれた。御前がいてくれなかったら――」
「いいえ」
強い否定が、あふれ出るようにして竜飛の言葉尻を断ち切った。

くるりと大きな瞳は伏し目がちで、決して竜飛を見ない。その澄んだ輝きはどこかへと失せてしまい、悔恨にまみれて揺れていた。
「いいえ、いいえ。できませんでした……。私は――私、あの時」
抑えようとして抑えきれず、思わずもれてしまったような語り口であった。まろび出るようにして零れたものを、はっと塞ぎ止めるようにして口をつぐむ。
愕然としたように眼を見開き、次いで痛みを堪えるように、まぶたをきつく閉ざし、形の良い唇を噛み締める。首を垂れる桜花の、その痛々しさ。
美しいものの悲哀というものは、どうしてこうも、見るものを竦ませてしまうのか。
竜飛は息をのみ、言葉もなくそれに見入った。なにか途方もなく、貴重なものを目の当たりにしてしまった気持ちであった。艦種艦名、そして生まれ持った、大きな大きな力には、あまりにも不釣り合いな、きれいで内省的なこどもの持つ、その潔癖さ。
「――ごめんなさい、竜飛さん。私、お知らせに来たのでした」
ややあって、顔を上げたおチビは、やはり陰のつきまとう微笑みで、そう仕切り直した。
「彼女が、眼をさましたようです」
先程とはまったく別の意味で、竜飛は再び息をのんだ。往生際悪く強ばる背筋を、自分自身の冷静な部分が嘲る。口許に苦笑を刻みつつ、全身の緊張を意図して緩めた。ゆるゆると嘆息する。
「わかった、ありがとう。話を、しなければならないな」
胸元から拾い上げた六角の環へ、祈るように口づけを捧げた。
「いってくるよ」
「はい」
ごく端的にそんな言葉を交わして、竜飛は砂に足跡を刻みつつ、木々の間に分け入った。
南国というと椰子の木の印象が強いが、広葉樹やシダ植物などの植生も豊かだ。特に拠点近くの入り江は、小さな砂地のきわまで、みっしりと樹木がひしめき合うように茂っている。比率を考えれば、むし

ろ、内陸部から沿岸を目指して歩いたとき、木々の隙間に急に狭い砂浜が現れたような印象をもつだろう。
そのささやかな砂場から踏み入った地面は、木々の根が奔放に伸び、平らなところなど見当たらないほどであった。よほどこういった環境に慣れた者でなければ、足を引っかけて盛大に転びかねない。
縦横に這う樹木の根を、竜飛は二本歯の下駄を履いた足で、淀みなく越えていった。
賞賛すべきはその下半身の安定感であろう。歩行の際の衝撃のほとんどが、足首や膝、股関節、腰などで吸収され、安定装置でも内蔵されているかの如く、上体がまるで揺れないのである。特に頭部はまったくと形容していいほどに動かない。
実際には大した距離ではないが、ただ歩くだけでも神経を使う悪路を、さも舗装された道でも散歩するかのように踏破し、竜飛は森林の只中にひとつだけ佇む、小さな廃墟に近づいた。
竜飛の弓懸を挿した右手が、無意識に自らの襟をたどる。そこだけ露出した小指が細い鎖と、ぶら下がる大小の環を撫でた。
しばし、物憂げにそれをしゃらしゃらと弄んだ後、竜飛はゆっくりと、入り口をくぐった。
緯度の低いこの場所のひなたに慣れた眼には、扉や窓の失せた風通しの良い室内でも、妙に暗く感じる。主役をなくした――最初からなかったのかもしれないが――窓枠から侵入した陽光が、古びた床を明と暗に二分していた。
静かだった。
内外を隔てるものなど、大して意味をなしていないこの拠点にあって、眩い陽光は切り分けられ、木の葉のそよぐ音は不思議に遠く、潮騒の音はなおも遠い。まるでここだけが、隔離された場所にあるかのような感覚さえあった。
その静謐の中に、彼女はいた。
戸板に布類を重ねただけの簡易的な寝床に、膝を抱えてうずくまっていた。
彼女の装束は竜飛のそれとは違い、水と修復剤で洗い流されただけ

で、いとも簡単に血脂を除かれ、今は窓の外ではためいている。代わりに、むき出しの肌に縫い合わせた大布をかぶり、とりあえずの間に合わせとしていた。
彼女の体躯が、竜飛よりもよほど大きいことは、抱えて曳航した際に身をもって知っていた。しかし、今ここで丸くなった彼女の背の、なんと儚いことであろう。今は解かれた、若木のように艶やかな、緑を含む黒髪でさえ、萎れて枯れ落ちる寸前のように、まるで生気がない。
竜飛は知らず息ひそめた。喉がひりつき、荒くなった動悸にこめかみが脈打つ。
立てた両脚を抱え込み、膝頭に顔を埋めている姿に、ふとした拍子で簡単にくずおれ、そして二度とは戻らないような脆さを感じて、もはや声をかけることすら憚られる気分であった。
完全に硬直した竜飛の前で、彼女が緩やかに顔を上げる。茫洋とした視線が空をただよい、やがて竜飛をとらえた。
竜飛はついに息を止めた。
空虚な瞳であった。怒りも哀しみもない、ともすれば、すでにそれらに疲れ切ってしまったかような――もしくは、なにもかもをどこかに置いてきてしまったかのような、虚無的な表情であった。
そのまましばらく、二隻は見つめ合った。つい先程まで遠く聞こえたはずの、こすれる葉の音や寄せる波の音が、いやに耳についた。
「――みんなは」
そして、どのくらいか後に、すべてが抜け落ちた顔で、唇で、彼女は問うのだ。
「翔鶴姉は、沈んだの」
疑問にすらなりきらない、半ば確認のような問いかけだった。
竜飛は言葉を失った。泣き叫んで糾弾してくれた方が、よほど良かった。
あの突発的な局面で微塵の逡巡もなく妹を庇い、あのような表情で沈んでいった姉を鑑みても、この妹の無感情さは尋常ではなかった。あまりに急な死別に、精神が追いついていないのか。それとも、とう

に沸点を超えて、無反応になってしまっているのか。
「――あぁ、そうだ」
もはや緊張に乾ききって、ありもしない唾をひとつ飲み込み、竜飛はかすれた声で応じる。
「助けられなかった。私のせいだ。……すまない」
室内に再び静寂が満ちた。
彼女は虚ろな瞳でぼんやりと竜飛を見つめ、なにも言わず。
竜飛は逸らしてしまいそうになる瞳を必死に押し留め、なにも言えず。
つかの間。彼女が視線を外した。その虚ろな眼で、なにもない、傷んだだけの壁面を見つめる。
そして、ひとこと。
「そっか――そっか」
それきり、彼女はなにも言わず、ただ黙ってまぶたを下ろした。
姉の喪失を哀しむ言葉も、竜飛に対する怒りの言葉も、そして涙も。ついに彼女からは零れてはこなかった。
竜飛も、ただ黙ってそれを見つめ続けた。
かつて竜飛を内包していた艦であったなら、どうしたのだろう。竜飛は立ち竦んだまま、そんなことを考えていた。
むろん、ここにいるのは、かの艦ではなく、この竜飛だ。それが逃避であると理解しつつ、それでも考えずにいられなかった。
もしここにいるのが、かつて多くを送り出し、失い続けた、あの艦であったのならば。
やがて彼女が眠りの波にさらわれるまで、竜飛はずっと立ちつくし続けた。
矮小な身には、それだけで精一杯だった。

＊　＊　＊

なにかに意識を引っ張られるようにして、彼女は眼をさました。
横倒しのまま、投げ出した目線の先、劣化した床材には濃い影が落ちている。
時刻は宵の口あたりか。のろのろと片肘をついて、ぽっかりと空いた窓の穴をうかがえば、あれだけ眩しかった陽光はとうに衰え、淡墨に浸したような薄暗がりが、あたりをしんと満たしていた。
そのあまりに寂然とした空気に、彼女は数瞬、自分の居場所を見失った。もがくように手足をうごめかせ、しかしすぐに縮こまる。
仄暗さがじわりじわりと、物理的な圧力を増しながら、彼女を押しつぶそうとしているような気さえした。この体になってから得た肉の機関が、嫌な音を立てて加速していく。
暗闇はいつも、海の底を思い起こさせる。もはやすり切れかかり、それでもなお、しつこくこびりつくあの頃の、ひとり沈む、絶望の記憶だ。
もしくは今生での、あの古びた部屋の、頑丈な鉄扉。足下からひたひたと迫ってくるような暗がりに、溺れそうになりながら、姉の訪れだけを、ただひたすら待ち続けた、孤独の記憶。
それらをまざまざと思い起こし、彼女はおずおずとあたりを見回した。自分以外の何者かの存在が欲しかった。
「――翔、鶴姉……」
ほぼ無意識にもれた呻き声に、彼女は自嘲した。
結局のところ、自分が求めているのは孤独を埋めてくれる他者であって、それは別段、姉でなくとも構わなかったのではないか。
それは人に似たかたちを得てから、ずっと考えていたことだった。
思うに、折に触れてもてはやされてきた、自分の幸運というものの本質とは、降りかかる禍を、周囲の誰かしら、なにかしらに肩代わりさせ、そうして自分だけがそれを避け得る、という性質のものなのではあるまいか。
自分という空母が、ことさら孤独を嫌うこの感情は、実際のところ、生贄のない状態を、ただ不安がっているのにすぎないのではないか。
だから、自分が姉を求めたのは、単純に都合が良かったという、た

だそれだけなのではないか。
――大好きよ。
ことあるごとに、自分にそう告げた姉は、本当はその浅ましさを知っていて、だからもう、なにものも犠牲にならないように、自分をあの場所に封じたのではないか。
自分はやはり、ただの疫病神でしかなく、それ以外になどなれなかったのではないか――。
ひどい論理の飛躍で、馬鹿げた被害妄想だった。だが彼女には、それを覆し得る根拠など持ち合わせておらず、唯一それを否定してくれるかもしれなかった存在は、とうに水底へと墜ちてしまったというのだ。
両手で肩を抱いて、可能な限り小さくなる。徐々に深さを増していく宵闇が、彼女の弱った精神にまで、ゆっくりと忍び込んでくるようだった。
それがあまりに堪え難く、恐ろしくて、彼女は肌にかかる布地を跳ね上げて起き上がった。肩を滑る布をたぐりつつ、頼りなくふらつく二本の脚でよろよろと立ち上がり、壁を荒く切り取ったような出入り口を目指す。
「竜飛さん、さすがにお疲れでしょう？　お手伝いしますから……」
枠すら残っていない窓に差しかかった時、外から声が聞こえてきた。
彼女は咄嗟にしゃがみ込み、身を隠す。自分自身でも動機のわからない、反射的な行動であった。そうしてしまってから、むしろそのこと自体に後ろめたさを感じ、なおのこと見つかるまいと身を硬くする。
「ん――ありがとう、助かる」
憶えのある声が、ごく短く謝辞を返した。
彼女はそっと顔を傾けて、外をうかがい見た。

薄暮の中に、白い背中が晒されていた。
ひとすじに結い上げていた長い黒髪を解き、両手でさっと払うようにして、その背中に下ろす。
でこぼことゆがんだ小ぶりの鍋で、ドラム缶から湯をすくう竜飛の腕は、なにも身につけていなかった。
腕だけではない。着衣の上からでは想像もつかないほど華奢な肩も、小ぶりな乳房の美しい輪郭の丸みも、しなやかな腰のくびれも、すんなりとした脚も、すべてである。
唯一、首から吊り下げた、大きさの違う小さな二つの環のみを残し、なにもかもを惜しげもなくさらけ出していた。
弱い月光の下に、白く浮かび上がるような、細く、繊細とすらいえるこの裸身のみを見れば、大方のものは竜飛を、真綿に包むようにして守りたがるだろう。
だが、体のそこかしこに刻まれた、大小さまざまな荒々しい傷跡に気がつけば、考えを改めざるを得まい。まるで歴戦の古兵のように、それらが無理なく体になじみ、それでいて、えも言われぬ迫力をかもし出しているのである。
もし竜飛に、その傷跡の所以を訊ねる度胸のある者がいたとしたら、己のどうしようもない勘違いを、即座に改めることになるに違いない。
すなわち、小さく細くとも、竜は竜であるのだと。
見るものが抱くであろう、そんな感慨になどまったく頓着せず、竜飛は無造作に湯をかぶった。頭頂から足先まで、温かな湯が滑り落ちる。乾いて肌にはりついていた血が、水気を含んで徐々にはがれ落ちていくのを感じた。
身にまとわりつくものが、洗い流されていく感触に、竜飛の口から思わず吐息がこぼれる。
「ようやく人心地ついた」
体の前に回した髪を、揉むようにして洗いながら、竜飛がもらす。
おチビはぬるま湯の入ったバケツに、赤黒く染まった竜飛の装束を浸け込みながら、申し訳なさそうに眉を下げた。

「やっぱり、竜飛さんが先に使われた方が良かったのでは……」
「あぁ、すまない、気にしないでほしい。そういう意味ではないんだ」
苦笑しつつ振り返る、竜飛。眼にかかる濡れた前髪をかきあげ、顔の水気を掌で拭い落とす。
「だいたい、今日ずっとこうだったんだ。後でも先でもさして変わらんよ。それに、私が先に使うと御前まで汚れる。なんのための入浴か、わからなくなるだろう」
額から頬を、首筋から胸もとを。湯を注ぎ、なぞるような手つきで洗いながら、竜飛はこともなげに言い放った。
それをたっぷり数十秒は凝視した後、おチビはおもむろに竜飛の背中へと回り込んだ。
「……うん？」
前触れもなく近づいてきた、人肌の熱源。まぶたを瞬かせて、まつげの水滴を払いながら、竜飛は背後を振り仰いだ。その手からおチビがそっと小鍋を取り上げる。長い腕を伸ばして湯をすくい、さらさらと竜飛の頭上に注いだ。
竜飛は黙って眼を閉じた。
伝い落ちた湯が、髪を、肩を、背を温める。長くたおやかなおチビの指が、竜飛の濡れた髪を引き寄せ、優しく梳いた。二度三度とそれは繰り返され、何度目かわからなくなった頃に、おチビが独白のように口を開く。
「――竜飛さんは」
「ん……」
いまひとたび、沈黙が落ちた。逡巡するおチビを、竜飛はただ黙して待った。
燃えさしの崩れる乾いた音と、埋み火のぱちりとはぜる音。肩越しに腕が伸びて、湯をすくい上げる水音。
そっと鍋を傾け、髪を丁寧に押し揉みながら、おチビはようやく問いかけた。
「竜飛さんは、なんのために戦っているのですか？」
その問いを耳にした瞬間、あぁそれだったのか、と、竜飛はようや

く悟った。そして同時に、それを思い悩むおチビを、心から尊く思った。
もしも、おチビが初めて身を寄せたのが、いずれかの鎮守府であったなら。殊に、大規模な艦隊を擁する提督の元や、最前線のそれであったのなら。この子に、それを考える時間などあっただろうか。
そのときこの子は、どんな大義名分を与えられ、どんな期待や責任によって、押しつぶされることになっただろう。
そして、本当なら自分だけのものであるべきそれを、他者が無遠慮に踏みつける、そのむごたらしさに、この子自身は気づけただろうか。
このことについて考えるとき、竜飛はいつも、やり場のない憤りが、胸中に噴き出してくるのを感じるのだ。
海軍の、提督の、人間たちのやり方を、間違いだとは竜飛も思っていない。戦とは大局の勝敗を分けるもので、そのための用兵とはそういうものだ。特にこの戦いは、国同士のそれではなく、停戦も講和も実質的に不可能な、種族としての存亡を賭けたものなのだ。少なくとも、人間側にとっては。
だからこの憤りは、どこにもぶつけようがないものであるし、こういった考えは、所詮は竜飛自身のわがままであると、しっかりと自覚してもいた。
だが、心とはそもそも、我がままなものではないのか。
死にたくない、守りたい、あるいは憎い。どんなものであれ、人間たちには理由がある。
ならば人間でない自分が、艦娘たちが、自分だけの理由を持ってはいけないなど、そんなことがあってたまるものか。
だから、竜飛は口を開いた。
「――私にとっての戦いは、いかに多くのものを、すくいあげられるかだ」
そんな言葉から、竜飛の述懐は始まった。
「……すく、い……？」
おそらく予想していたそれと、あまりにも違いすぎたのだろう。おチビは戸惑ったように、たどたどしく竜飛の言葉を反復する。

そのあどけなさに、竜飛は頬を緩めた。そうして心から感謝した。この純粋なこどもに、なにかを語り伝えることができる、この機会に。
「おチビはどうして、自分が再び生まれ落ちたのか、わかるか？」
「わかりません。わかりません、けど……」
「うん」
言葉に迷うように、おチビは口ごもる。竜飛は穏やかに頷いて、急かすこともせずそれを待った。
「きっと――きっと、戦うためだと思います。だから私は、戦わなくちゃいけないんです。でも、なにか、信念というんでしょうか、そういうものを持たずに、ただ戦うだけでは、怖くて……。いつか、なにか取り返しのつかないことを、仕出かしてしまいそうで」
語尾が慄くように揺れた。
「今朝、あの空母が眼の前で撃たれたとき――私、なにかとてつもなく強い感情が、噴き出してくるのを感じました。それも、空母が撃たれたことそのものじゃなく、沈めたはずの敵艦が、不意打ちのためにこちらを謀っていたことにです」
おチビの大きな手が、竜飛の、見た目よりもずっと骨張って薄い肩にかぶさる。
「私、あの頃のように、間違いなく合理的でいられる自信が、なくなってしまいました。怖いんです。なにか拠り所がないと、あのときに私を支配した感情が、いつか仲間を撃たせるんじゃないかと、そんな考えが頭から離れないんです……」
「そうか」
南国にあってなお、凍えるように冷えたその指先に、竜飛は自分のそれを優しく絡めた。反射的にか、逃がすまいとするように力がこもる長い指を、親指の腹で宥めるようにくすぐる。
「私はね、とある空母が、ずっと心の奥底に沈めていた願いが、こうして形になった存在だ。復員船となった彼女が、役目を半ばに轟沈されたときに、泡沫のように目醒め、再び生まれるために浮かび上がった」
柔らかく、滑らかに、竜飛は言葉をつないだ。
「どんな艦娘も、願いによって生まれて、そして浮かび上がるんだ。私

の場合は〝救いたい〟という、ただそれだけの、純粋すぎる願いから生まれた」
「――願い……」
「そう。大元となった空母ですら、心にしまい込んだまま忘れてしまっていた、子供の頃の夢のような願いだ」
途方もない話だ。雲をつかむような話でもある。だが竜飛自身にしても、こういう語り口しかできない類の話であった。
「生み出された意図と、抱えていくべき信念が、必ずしも同じものであるとは限らない。ただの道具であったなら、それらが矛盾することもなかったろうが、今の私たちは、私たち自身の心を手に入れた」
親の願いが、そのまま子の願いになるわけではない。元が同じものであったとしても、分かたれてしまえば、それはもう別のものだ。
どんな意図で生み出されたにせよ、実際に生きていくのは――生きていかねばならないのは、生み出された方なのだ。
「それを踏まえて聞いてほしい。私の場合は――ただ、生まれてきた願いに、どうしようもなく共感してしまった。そして、どうしても許せなかったから、戦い続けているんだ」
「許せなかった、とは？」
「あぁ、すまない。上手く言えないのだが。そう、つまり――」
指をつないだまま、腕をくぐって振り返った。張りつめて冷える大きな手を、それよりずっと小さな、自身の両手で包み込む。おチビがまじまじと竜飛を見下ろした。
「私はね、とても幸せなんだ」
脈絡があるような、ないような、どうにも唐突な告白であった。
どうしてこうも、自分には語彙が足らないのか。竜飛は内心で苦悶した。本当に、もう少し系統立てて説明できないものなのか。
それでも、竜飛は言葉をつなぎ続けた。乱れた文脈でいい。すべてが伝わり切らなくともかまわない。ほんのひとかけらでも、この子になにかを残すことができたなら、それだけで僥倖だ。
「とてもとても幸せで、だから同じくらい誰かを幸せにしたいんだ」
言葉にすればするほど、なにも知らない子供のような、幼い願い。

「私は理不尽を心底、憎んでいる。運命だとか宿命だとか、そんな適当な言葉で、痛みや苦しみ、悲しみを賢しらに誤魔化されると、はらわたが煮えくり返る。納得できない。嫌だったら嫌だ」
　重々しい声色と裏腹に、語る内容はまるで、駄々をこねる子供だった。その齟齬に、おチビがくりくりとした眼を白黒させている。真正面から受け止めようとして面喰らうおチビがおかしくて、竜飛は思わず破顔した。
「大仰な大義も、大勢からの賞賛も、第三者からの評価も、私には要らない。ただ、不条理に囚われ、絶望に沈むしかない、そんな誰かの手をとりたい。御前の幸せを、命をかけてでも願うものが、少なくともここにひとりいるぞと、知らしめてやりたい」
　まさに子供の頃の夢物語である。けれどもこれこそが、この単純な願いこそが、竜飛を生み、自分を浮かび上がらせ続ける、根源そのものであるのだ。
「おチビ。なんのために生まれてきたのか、本当はそんなこと、考える必要はないんだ。私はそれに共感できたが、御前が納得できないなら、それでもいい。生み出したものの思惑は思惑で、それは御前の存在意義そのものじゃあない」
　けれど――と、竜飛はおチビの手を引き寄せる。突然の行動に動揺して強ばるそれを、胸もとへ導いた。
「けれど、御前は生真面目だから、きっと、生まれてきたからには、ああしなくてはいけない、こうしては駄目だと、そんなことばかり考えてしまうんだろう。でもそんなのは、そのうち出会う提督や司令官の命令で充分だ。任務だけでたくさんだよ」
　なめらかな手だ。柔らかい掌から、長くしなやかな指先まで、美しく、そして竜飛よりも大きい。
　この手はいずれ、竜飛よりもずっと多くのものを、つかみ取ることができるようになるはずなのだ。他でもない、彼女自身の信念のもとに。
「信念に機械的な合理性なんて要らない。ただ心から尊いと思えるものを信じる。そしてそれを、自分を動かす中心の軸として据える。そ

ういうものであるはずなんだ。――ただ間違えないためだけに計算式を積み上げて、それによって心の在りようまで左右してしまったら、それこそ、こんなふうに生まれ直した意味が、ないじゃあないか」

いずれなにかを握り締める手を、そっと素肌の胸に押し当てる。熱いものにでも触れたように、引き戻されかけるそれを、竜飛は優しく両手で抑えた。

自らの左乳房のやや上方、心臓の真上を、大きな掌に覆わせて、竜飛は静かに諭す。

「だから、できることなら、なんのために生まれたかでなく、なんのためにその命を使いたいかを、考えてほしい。生き方は生きながらでないと、わからないから、間違いと失敗を繰り返しながらでも、自分の心が本当に求める生き方を――このためにだったら、身も心も、命も魂も、燃やし尽くして悔いはない、そう思えるものを、いつか見つけてほしい。他のなにものでもなく、御前には、御前自身になってほしい」

まさに、我がままな理屈であった。放心したように見開かれる、おチビの澄んだ瞳に、竜飛は歯を見せて笑いかける。

少しでも伝わってくれただろうか。この大きなこどもに寄せる、竜飛の慈しみが。互いに息づき、伝わり合う鼓動と体温が。

「すまないな。私が、私自身の片手間に、御前に答えを用意してあげることはできない。だから私には、こんな話しかできない」

「――いいえ……竜飛さん。いいえ」

「けれどもおチビ。この話が御前の心の中の、なにかに響いたのなら。今すぐでなくていい、いつか教えてくれ」

――御前は、どんなひとになりたい？

問いかける竜飛の肩に、屈み込んだおチビの額が埋まった。その豊かな髪を梳けば、淡い色のひとひらが、ふわりと落ちる。

そのまま、震える大きな背を、傷だらけの手で撫で続けた。

矮小な手では、やはりそれが精一杯だった。

＊　＊　＊

意識が吸い寄せられそうなほどの、深い夜の帳にあって、彼方に浮かぶ小さな月だけが、ひとつきり、煌々と輝いていた。

薄紗のような月明かりは、地上へとその裾を垂れるより早く、押し寄せるような宵闇に浚われて、ひどく慎ましやかだ。これを夜歩きの伴とするには、いささか荷が勝ちすぎる配役であろう。

あえかな月光と、波の音のみに満たされた入り江で、耳を澄ますように黙然と立つ人影を、彼女は木々の作る暗がりに、身を隠すようにして盗み見ていた。

黒い襦袢のみを身につけ、気配もなく波打ち際に佇む姿は、暗闇に溶け込むようであった。暗夜に惑う彼女の眼では、その細かな造作はわからない。かろうじて、左手（ゆんで）に弓を携え、馬手（めて）に二条の矢を手挟み、月を臨んでいることだけは窺えた。

ふと、人影がその場で向きを変えた。月に向かって右に体を開き、左足を半歩だけ前へ出す。右足も同様に、半歩だけ後ろへと退いた。影の輪郭が変わり、矢筒を背負っていたことがわかった。

弓に、矢が番えられる。弓を支える左腕は不動のまま、左膝を基点に斜めに立てられた弓も、その豊かな成りを、微塵もぶれさせない。

「――そんなところから見えるのか？」

不意に、手元で交差する弓と矢に視線を落としたまま、振り返りもせずに声が放たれた。彼女が肩を弾ませる。驚愕と動揺に鼓動がはね上がり、胸を内側から叩いた。

「……わざわざ隠れなくとも、誰も御前さんを怒ったりはしない。見やすい所においで」

身にまとう硬質な雰囲気からは、想像もつかないような穏やかな声で、人影は誘った。あまりにも優しい声だった。強要するような響きなど皆無である。にも関わらず、拒もうという気持ちが溶けてなくなってしまうような、なにかがあった。

月色の薄紗が落ちる砂に、彼女の頼りない足取りが刻まれた。人影

は、波に足先をなぶられつつ、彼女を待っているようだった。
手を伸ばすのに三歩は遠い場所で、彼女はしばし逡巡し、人影の背後にそっと回り込んだ。今の彼女には、人影と眼を合わせる勇気が持てなかった。
彼女の様子を眺めていた人影が、軽く嘆息する。悪意を持ってのものでないことはわかるが、そこに込められた意味まではわからず、彼女は戸惑った。
そうこうしているうちに、弓懸の内に二つ目の矢を握る馬手が、下がる袖を払いつつ、弦に添えられた。面が上げられる。弛みない視線が、矢よりも早く放たれて、孤月を射抜いた。
左右の手が水をすくうように、すう、と静かに持ち上げられた。弓を握る左手が、真っ直ぐに掲げられたそれを、柔らかに押し出す。成りがやんわりとしなり、額の上で不動を保つ馬手を支点に、成りと弦がゆっくりと分かたれていった。そのまま緩やかに弓を降ろす動作に合わせて、じわじわと弦が張りつめていく。
やがて呼吸ひとつ静止した後、両の手がさらに距離を開いた。番えられたの矢が、頬のすぐ傍、唇まで降りてくる。
黒い襦袢の背に、力が満ちるのがわかった。
背を半分も隠してしまう、この矢筒が邪魔だ――彼女は唐突にそう思った。
弓を引くこの背を、もっとはっきりと見てみたかった。できることなら、なにも身につけていない素肌に手をあて、その下できしみをあげる筋肉の緊張から、耳をあててその奥の呼吸のひとつまで、つぶさに確かめてみたかった。
陶然と見守る彼女の前で、矢が放たれた。
弦が鳴る。
弓懸に包まれた馬手は、空を弾くように逆に振り開かれ、弓はその軸を微動だにさせないままに、外側に返った。
知らず、吐息がもれる。
そこに至るまでの動作のすべてが昇華されきった、揺るぎない、愚直なまでに一途な射形だった。

彼方へ飛んでいく矢が、これほど惜しいとは思わなかった。あの矢がいまだ留まっていれば、彼女はこの背を、ずっと眺めていられたのだ。

弓の訓練などさせてもらえていない。姉の射ですら、ここまでの航海で初めて見た。そんなずぶの素人である彼女をして、そう思わせるほどに、その姿は鮮烈で、無雑な美しさがあった。

「……御前さんも射てみるか？」

大の字のまま悠然と残心した後、不意に人影――竜飛は彼女に提案した。肩越しに彼女を流し見る眼と、視線が合う。

「い、射たことないし……。そんな綺麗にできない……」

直視できずに足下を見つめ、へどもどと口ごもる不甲斐なさに、彼女は頬を熱くした。

この清浄な夜と、ひたむきな弓の前にあって、自分だけが、そこに紛れ込んだ異物のような気持ちになる。

「最初から、なんでもできる者などいないよ。気が乗らないなら、無理はしなくていい。してみたくなったなら、私が教えよう」

淡々とした竜飛の声は、それでもどこか温和だった。その温和さに甘えて、彼女はおずおずと口を開く。

「あの」

「ん」

短く返す竜飛が、するりと姿勢を改めた。踏み出した足に、ぱしゃりと波が絡む。

自分の話に、折り目正しく耳を傾けようとする仕草だった。それに救われ、彼女は萎みかけた語勢を、なんとか膨らませる。

「なんで、こんな遅くに、矢を？」

言葉をつっかえさせつつ、なんとも不恰好な問いかけに、竜飛は軽く首を傾けた。解かれたままの長い髪が、さらりと夜風に吹かれる。彼女のすっかり乾いた装束も、その袖をささやかになびかせた。

「矢と、弓弦の音には、良くないものを祓う力があるとされているんだ」

「は、はい」

竜飛は、そこで解説を止めてしまった。続きがないことを訝しんだ彼女が眼を上げると、涼やかな瞳がこちらを見ていた。
月に向けて放たれた、矢のような眼であった。
「……もう、辛くはないのか」
妙に熱心に感じる視線に気後れしていると、竜飛はその眼つきに似合わぬ柔らかな声で、そっと彼女を労った。
じわりと、なにかが彼女の胸裏を灼いた。
なにかとんでもなく重要な機会が、いまここで訪れているような気がした。直感はそう告げているのに、具体的なものがまるで浮かばないまま、彼女は焦燥に圧されて、やみくもに口火を切った。
「竜飛さんは――」
「うん？」
竜飛の柳眉が、片方だけ上がった。
「あ、ご、ごめんなさい。あの……」
その反応に、彼女は自らの礼を失した態度を省みて慌てふためく。もっとも実際には、そもそも礼儀を求められてすらおらず、及び腰な彼女の勘違いであるのだが。
「……あぁ、すまない。竜飛でいいんだ」
すっかり狼狽しきった彼女に、竜飛は苦笑しつつ緩く首を振った。目線で促され、やはりもごもごと、俯いて先をつなぐ。
「竜飛さんには、姉妹艦って、いますか？」
「いないな」
少しの躊躇もない、断定である。冷たく冴えた白刃すら想起させる、容赦のないそれに、彼女はよりいっそう萎縮した。
密かに背筋を震わせる彼女の眼前で、しかし竜飛は、その凛とした眼もとをふわりと溶かした。
「けれど、きっと、同じくらい愛おしいものがいる」
眼にも耳にも信じ難い有様であった。
月を射落しそうな射で彼女を魅せた竜飛が、本当に心から愛おしいものを前にしたように、甘さをはらんだ声でささやいたのだ。あの清廉な勇壮さからは、まるで想像もつかない光景であった。

彼女は唾を飲み込んだ。
竜飛とどんな話をすればいいのか、たった今わかった。
「もし、もしも……」
「うん」
だが、それを訊ねて本当に良いのか、彼女は懊悩した。もしかすると自分は、いままさに、はまり込んだら抜け出せない深淵に、片足を踏み出そうとしているのではないか。
自問する間に、膝が笑う。奥歯がぶつかり合う音がした。
不意に、砂を踏む乾いた音がした。肩を引きつらせ、弾かれたように上げかけた視線の先で、見覚えのない傷痕だらけの手が、彼女の慄く指先をさらった。
熱い手だった。
「冷たいな」
自分とは、まったく逆の感想を述べる竜飛の微笑に、彼女の肩から不思議と力が抜ける。この手が、あの射をなしたのか。えもいわれぬ感慨に、彼女の恐れが洗い流された。
熱く、小さく、かたい。しっかりとした手だった。ありとあらゆる箇所が、細かな傷痕によって飾られていた。
「……もしも、なんですけど」
「うん」
その手の温度に励まされて、彼女は先へと進むことにした。
「もしも竜飛さんが、大好きな誰かを閉じ込めることになったとしたら――それって、どんなときですか」
――大好きよ。
何度も何度も紡がれたあの言葉を、彼女は思い起こしていた。
この先、姉の心の内を解き明かしたとして、それが彼女にとって優しいものである保証など、ない。だがそれでも、彼女はどうしても知りたかった。
「ん……」
事情を知らない竜飛には、きっと突拍子もない問いかけであったろう。しかしこの小さな手の主は、問い返すことすらせず、律儀に言葉

を選んでいるようだった。
「――……傷ついてほしくないとき、かな」
「傷ついて――」
「なりふりかまっていられない。なにがあっても守りきりたい。けれど、それには自分があまりに無力で、尋常な手段ではとても守りきれない……」
滔々と、水がこぼれるように、おそらく思いつく限りを竜飛は語ってくれた。そのどれもが、生まれてすぐにあの場所に押し込められた、なにも知らない彼女には、考えてもみないことだった。
「……私からも、言わなくてはいけないことがあるんだ」
新たな観点に戸惑う彼女に、竜飛はふとそう切り出した。
「御前さんの姉の、いまわの際――いいや、生き様についてだ」
思いもかけぬ話題だった。それと同時に、自分がいかに、そのことについて思考を放棄していたのか、彼女は自覚した。
彼女とつながる熱い手が、微かに強ばる。
「あのとき私たちは、敵戦艦の死んだふりにまんまと騙されて、その不意打ちに気づけなかった。唯一、気づいた御前さんの姉が、私と、担がれていた御前さんを突き飛ばして、助けてくれたんだ。代わりに、自分は撃たれてしまった」
慚愧に満ちた声であった。そのときの顛末を、心の底から悔いている者の言葉であった。
それがあまりに痛切で、思わず、小さな手を両の掌で包み込む。竜飛は一瞬だけ情けなく眉を下げた後、彼女の柔らかい手を、自らも両手で包んだ。
互いに諸手を取り合い、懺悔は続く。
「御前さんの姉は、真っ先に御前さんの安否を訊ねてきた。そうして、守れたことを知ると」
一拍、言い淀む。
「幸せそうな、顔をしていたんだよ」
ぽつり、ぽつり、と。
「妹を守れたことを、心から喜んでいるように見えた」

奇しくも、かつて目醒めた彼女に降り注いだそれと似て、雨粒のように、しかしあの頃と違い、どうしようもなく手遅れなその一幕を、竜飛は紡ぐ。
「……そんなわけはないのに」
乾いたままの語勢に、怒りが滲んだ。愛おしむように、哀しむように。そのすべてに困憊したように。
彼女はそれを、茫然と見つめていた。求め続けた、形のない答えが、今こそ、竜飛の言葉の中に見つかった気がした。
「そんなひどいことが、許されていいはずがないのに」
袖振り合うのにも満たないような、ほんの数分の邂逅に、竜飛が心を痛めている。
つまりは心を痛めるほどのものを、あの姉は示して沈んでいったのだ。他ならぬ、彼女(いもうと)に向けて。
それはつまり。
「あんな顔をして妹の盾になるような姉を、私は奪ってしまった」
つまり、自分は、誰の眼から見ても、愛されていたのではないか。たったひとり、自分だけが、それに気づいていなかっただけなのではないか。
そして、自分があまりにも臆病すぎたばかりに、それを姉に問う機会は、永遠に失われてしまったのだ。
「あぁ……――」
驟雨の最初のひと粒のように、雫が眼窩からこぼれ落ちた。
「そっか――そっか」
ぽつり、ぽつり、と。それはまさしく雨粒であった。
彼女の揺れる呼気に、水気が混じる。小さなかたい手を、幼子のように、ぎゅうと握り締めて、彼女はしゃくり上げた。
「ご、めんね。ごめんねぇ、翔鶴姉……」
話をすればよかった。どれだけ煙に巻かれても、振り払われても。何度でも何度でも、縋りついてでも話をすればよかった。
今こうして、出逢って一日の相手と、手を重ね合って、同じものを想って哀しめるのなら、姉とだって、いくらでもできたはずなのだ。

それができないというのなら、なんのためにこの体(いのち)を得たというのだろう。
なにも終わってなどいなかった。終わらせてしまったのは、自分自身だったのだ。
「すまない――すまない、私のせいだ」
苦渋に苛まれる声が、彼女の嗚咽に鈍る耳朶に届いた。彼女は激しくかぶりを打ち振るう。胸をかきむしりたいほどに哀しくて、苦しくて、愛しくて、声が出なかった。
「憎んでくれ。私を許そうとするな。御前さんが幸せになるためになら、なんでもしてくれ」
息もできなくなりそうなほど、重い悔恨の言葉であった。それ故に、誰にも寄り添い難いものであった。
それが、彼女でなかったのなら。
「はな、話を――」
「ん……」
「話を、聞かせてください。翔鶴姉を看取って、哀しむひとが、どんなひとなのか、知りたいの」
「あぁ――あぁ、いくらでも」
その後、空が白むまで、二隻はまんじりともせずに、砂浜に座っていた。夜が夢を見るまでに、何万の言葉が飛び交ったのか、月ですら憶えてはいない。
やがて、薄明が取り払われた波打ち際で、竜飛はふと口にした。
「言い忘れていた――古典には化鳥を射止める逸話がある。死者の肉体や魂が、弔われる前に悪いものにさらわれないように、弓を携えて番をする習わしもあったそうだ」
「――あ……」
「射てみないか、瑞鶴」
答えは、決まっていた。
払暁を迎えた空を、四条の矢が射抜いた。

四節　討チ起コシ（うちおこし）

地の上で、水の上で、如何なる物語の幕が開こうと、または閉じようとも、朝は無分別にその上へとなだれ落ちてくる。好もしさも厭わしさも区別せず、ひとしなみに。

「――どういうことなのです？」

空が白んでさほど間もない、横須賀鎮守府は第三司令部。いまだ太陽に温められる前の、冴えざえとした早朝の空気に、それすら生温く感じるほどの、冷ややかな声が響いた。

「件の海域へは、まず当横須賀と呉、佐世保から艦隊を編成して出撃し、その間、舞鶴と高雄基地（そちらさま）は本土近海の哨戒にあたるということ――会議に出席していただいた後、さらに口頭でも書面でも詳細を通達したと記憶しているのですが、この電の思い違いだったのでしょうか？」

灰色の角ばった電話機は、尋常の寸法で作られたものではあるが、声の彼女にとっては、それでもいささか持て余すような大きさである。

その彼女の、可愛らしいとしか表現できない幼い手が、野暮ったい造形の受話器を、いまにも粉砕せんばかりの握力で締め上げ、めりめりと不吉なきしみを上げさせていた。

「……なにを勘違いしていらっしゃるのです？　それが必要か判断するのも、編成を許可するのも、本営たる当横須賀なのです。そもそも艦娘は、本営の下命によって各鎮守府に配置されているのであって、その一切は本来、本営に帰属するものです。断じて、基地司令（あなた）個人に所有されているわけではありません」

こうして吹き込んでいるこの言葉を、字に起こして無関係の第三者に読ませたとして、これが成人男性の腰ほどしかない、いかにも幼げな少女の口から飛び出したのだと、信じられる者がどれだけいることだろう。

「そういえば、なのですが。基地司令（あなた）、同様のことを、すぐに確認できるだけでも、もう三回はしていらっしゃるのですね。――はわ？　脅

しなどではないのです。もとより本営は、脅してまで基地司令にかかずらう必要などありませんですし……。――はい、その駆逐艦の分際で、本営の指示に従い、第三司令部秘書艦であるこの電が、こうしてお話しているのです。そうでなければ、基地司令のようなお方とは、とてもとても……」

大人しげで、どこか舌足らずな口調に似合わぬ、慇懃な言い回し。言葉尻を捉えつつじわじわと、退路を一つひとつ丁寧に断つ、老獪かつ陰険ともいえるもの言いである。

それでいて、そこに撃発寸前の砲弾のような激情が込められていることは、どれほど鈍感な人物が見聞きしても、間違えようもないことであった。

「司令という立場は、言うなれば艦娘の運用許可証なのです。そしてそれを許可しているのが本営である以上、その意思を無視した独断での運用というのは、要するに貸与された機材を私物化し、供給された資材を横領しているということに他なりません。この意味、今回こそおわかりいただけます？」

腹の底で煮え立つものを抑え込んだまま、あくまで冷徹に事実を突きつける。考えようによっては、大声でがなりたてるよりも、よほど恐ろしい対応であった。その熱量が十全に解き放たれる、然るべき機会というものを待ち、その場では一切、浪費する気がないからである。

「はい。おわかりいただけたところで、現時点をもって貴官より全指揮権を剥奪します。追って沙汰しますので――くれぐれも、大人しく、お願いしますね？」

それでも最後のその一言にだけは、もはや鬼気に近いものを漂わせて、横笛を思わせる可憐な声で、冷然とささやき込んだ。

「では」

余韻もなにもなく、ほとんど一方的に通話を切断する。本体と受話器がぶつかる音は、むしろささやかだったが、それだけに固い意思を感じさせた。

張りつめた糸のような沈黙が室内に満ちる。小さな体がもうひとまわりは縮みそうなほど、盛大なため息を吐き出した彼女、駆逐艦電

が物憂げな視線を上げると、両手を重ねて自らの口を塞いだ夕張と眼が合った。
「……なにしてるのです？」
打って変わって力の抜けきったような電に、軽巡洋艦夕張がぱたりと手を降ろして苦笑した。室内の雰囲気が一気に緩み、他二名の間にも糸が切れたような笑みが浮かぶ。
「もう、なんなのですか」
「なにって」
「さすがの最初期艦さまさま、よねぇ」
眉を寄せる電の柔らかな頬を、夕張ともう一名――軽巡洋艦大淀がつつき回す。
「ご苦労だった、電。えらく面倒な役割をさせたな」
反発するように、ほっぺたを膨らませる小さな最古参艦を、最後の一名が労った。
初老の男であった。元は全体が黒かったのであろう、刈り込まれた短髪に、ところどころ霜をおき、若かりし頃の端整さを想像させる面貌には、深い苦労の跡が刻まれている。
だがそれらは決して、男を衰えたる者と印象づけはせず、白い軍装に包まれた、厚みのある体躯と相まって、むしろ経年による円熟味を感じさせた。
重厚な木製の執務机に座したまま、くっきりとした濃い眉を下げるその男に、電は、ふんと鼻を鳴らす。
「司令官さんのために苦労したわけではありません。そもそも、その面倒を進んで背負い込んだのは、この電の方なのです」
腹の虫が治りませんでしたので――並べば祖父と孫娘としか思われないであろう相手に、ずいぶんと遠慮のない物言いであった。それも、当の電によれば、男は彼女の司令官であるのだ。本来ならば許されぬ類の放言である。
しかし、文字通り鼻であしらわれた男、司令官こと松岡辰之進中将は、それを鷹揚に渋い笑みひとつで許した。
「で、予想通り先走ってくれたのね？」

「はい、先走ってくれました。おおむね予想通りなのです」
「急にお友達が音信不通になって慌てたのでしょうね。今を逃せば、もうどうしようもありませんし」
「いずれにせよ、もう詰みだったのです。お友達の道連れで、一網打尽にすっきり捕らえられるか、今回の独断専行を口実に、芋づる式に罪が明るみに出されるかの、二択しかなかったのです」
「現地の艦娘たちには、あらかじめ指示を伝達してあるわ。ただの人間には逃げようがない」
「偶然を利用する形になりましたが、これで掃除は完了しましたね」
「いいえ、焼却炉で燃え尽きるのを確認するまでが、上手なお掃除なのです」
「さすがは最初期艦さま！」
「それはもういいですから……」
　軽巡洋艦二隻と駆逐艦一隻が、和気藹々と首尾を話し合う中、松岡中将はいくつかの書類を執務机に並べていた。それらを一枚ずつ丹念に読み返した後、まとめて前へと滑らせる。
「さて――では、軽巡大淀」
　張りのある低音が、眼鏡の艦娘を呼んだ。軽口に興じていた三隻の姿勢が、ぴしりと改まる。室内の空気が、先刻とは別種のもので張りつめた。
　大淀が一歩前へと踏み出す。同時に電が退がり、夕張と並んだ。二隻を従えるような立ち位置で、大淀が背筋を伸ばす。
「打ち合わせ通り、ここに記載された内容を各位に通達せよ。次いで、高雄基地の先行艦隊を回収し、現地の艦娘および憲兵と連携して高雄基地元司令を拘束させる」
「了解いたしました。各鎮守府に電話と打電にて通達の後、高雄基地先行艦隊を回収し、艦娘および憲兵方に高雄基地元司令を拘束させます」
　復唱し、切れの良い動きで敬礼しつつ拝命した。そのまま退室の許しを得て、慌ただしく扉をくぐっていく。
「――軽巡夕張」

首の後ろで束ねられた、蕎麦切色の尾が跳ねた。一歩、近づいた夕張に松岡中将が厳然と下命する。
「必要資源の算出は済んでいるな。一両日中に、ここから出撃する全艦の艤装および兵装を、もうひとたび確認し、艦娘の状態も併せて報告せよ」
「承知しました。一両日中に艦隊の装備確認と、素体の体調を点検して報告いたします」
同じく復唱し、滑らかな動作で敬礼。背中に垂れる尻尾と、スカートの裾を翻しつつ、許可を得て退出した。
「――駆逐電」
「はい」
するりと前へ出る。踵をそろえて直立する電に、松岡中将は他二隻に対するよりも、やや和らいだ声と表情で命じた。
「高雄基地からきた先行艦隊を温かく迎えてやってくれ――食べさせて、休ませて、労わってやってほしい」
「承りました」
柔らかく受諾して、一呼吸。電はゆっくりと敬礼しつつ、静かに復唱する。
「高雄基地先行艦隊の受け入れ準備と、その後のお世話、電にお任せください」
「頼んだ」
緩やかにきびすを返す。後頭部の髪留めでまとめきれず、綻び落ちた毛先が、左肩でさらさらと揺れた。ひんやりと冷えた取手を握り、分厚い扉を引き開ける。
「すまない。本当にすまない……」
不意に追いかけてきた謝罪に、電は肩を強張らせた。開いた隙間に、半身を押し込もうとした体制のまま、静止する。
「ブルネイの艦たちが動くまで、私は結局のところ、手をこまねいているしかできなかった。守ってもらっている我々自身が、君たちを苦しめるような真似をしてしまっている。さらには、君たちに仲間を見捨てるような選択をさせ――あまつさえ、その助けなしには、次々とわ

いて出てくる白蟻どもの処分すら、まともにできない始末だ」
電は室内に視線を転じた。重々しい執務机に鎮座する男の、白い軍装に包まれた広い肩が、実年齢よりもずっと老け込んだように見えた。
艦娘を指揮するに足る者を采配し、また自らも何十という艦娘たちを動かす者の、責任と経歴を負う双肩は、今このとき、苦悩し、疲弊しきった男のそれでしかなかった。
「これほど我々に尽くしてくれている、君たちの献身に対して、この体たらく。あまりにも――あんまりにすぎる酬いだ。私は心底、恥ずかしくて申し訳なくてならない」
様々なものが入り混じった声色で、松岡中将は悔悟する。
「陸の君たちを守ってみせると、私は誓ったはずだった。だがこの後に及んでなお、それを果たせてはいない。本当に、彼女に会わせる顔がない……」
電は、半ば室外に踏み出しかけた足を引き戻し、そっと向き直った。後手に扉を押しやる。金具同士がこすれる小さな音を残して、再び内外が閉ざされた。
「誰もが、理想通りに振る舞えるわけではありません」
きっぱりと、電は言い切った。温度を感じさせないほどに平静な口調であった。しかし、それは意外なほど優しく響いた。
「電も――わたしも、かつて望んだようには、できませんでした。これからもきっと、あまり上手くできないでしょう。でも、その原因を、あなたに求めようとは思っていません」
小さな背を、厳つい扉に預ける。やんわりと腕を組んで寄りかかる姿勢は、彼女にはあまりに不似合いで、いかにも不遜だ。だがそれに言及することもなく、松岡中将は耳を傾けた。
「誰も彼もが、それぞれ勝手な思惑で、誰かと綱引きしているのです。綱を手にし続ける以上、なにもかも自分の望み通りになることはありえません。だって、他の誰かと、常に引っ張り合っているということなのですから。世の中そういうものなのでしょう」
静かな眼に宿る光は、幼い姿形からは想像もつかないほどに、怜悧

で苦み走ったものであった。世の理不尽に打たれ続けてきた初老の軍人よりも、さらに多くの不条理に歯を食いしばってきたような、酸いも甘いも噛み分け、清濁併せ呑むことを知った、古兵の眼差し。

「わたしもかつて夢をみました。今もみているのかもしれません。でも、かつてあったように、ずっとあれるわけではないのです。――はがねの艦すら錆びさせるだけの時間を経て、それよりもっと柔な心(もの)が、まったく挫けずにいられるだなんて、そんなのありえないのです」

若人に対するように、小さな小さな老兵は語り聞かせる。その語りが、いかなる思いから生み出されたものであるのか、長らく共に戦い続けてきた男にも、その心の内すべてを察することなど、できはしなかった。

しかし、その可能性が挫けていく痛みだけは、男もよく知っていた。

「だからこそ、わたしは――わたしたちは、あのひとが、この上なく美しく、鮮烈で、愛おしく、恐ろしく思えるのではありませんか」

ひととき、沈黙が落ちた。一人と一隻は、そろって同じ背を脳裏に描いていた。それは在りし日の理想のかたちであり、今もなお、彼と彼女に立ち止まることを拒ませる、共通の動機であった。

その在り方に魅了されたのだ。彼女のように、怠惰も妥協もなく、気高いまま生きていけたらと、そんな夢をみていた。願い続け、挑み続ければ必ずそうあれるのだと、無邪気にもそう思っていた。

「きっと、あのひとほど、挫折と蹉跌を知っているひとはいません。でも、なにによって、どんなに打ちのめされても、あのひとは叫び続けることができる。手を伸ばし続けることができる。思い続けることができる。そして最後には、どんなかたちであっても、望む結果をつかみ取ってしまえる――それはもう、狂人にしかできない所業なのです」

批判するでも侮辱するでもなく、電は話題の主をそう言い表した。

「あなたは、あのひとのようにはなれませんでした。あなた自身があのひとより劣っているだとか、そういうお話ではありません。ただ、あなたがあのひととは違うという、それだけのことなのです」

分厚い扉から、電は背を離す。ローファーと床を打ち鳴らし、男に

背を向けた。重い取手をひねる。
「わたしだって、そうなのです。あなたと同じように、あのひとのようにはなれませんでした。でも、あなたと同じく、嘘偽りなく、常に最善と思える選択をしてきました――ですから、それでもできないわたしが、それでもできないあなたを責めるなんて、それはまったくの御門違いなのです」
　ようやく温まり始めた室温を気にして、控え目に扉を開く。すり抜けるように、薄い肩を傾けながら、肩越しに一瞥を投げた。
「だからこそ、わたしたちは、わたしたちの選択をし続けましょう、司令官さん。たとえそれが、最高の結果に結びつかなくても」
　それなら、わたしたちにもできるはずなのです――そう最後に言い残し、電は第三司令部を後にした。
「――詭弁もいいところなのです。自分だって罪悪感で身動きとれないくせに」
　独白が、廊下に落ちて転がった。

＊　＊　＊

　黎明は照らす先を区別しない。夜を追い立て、なべてこともなく降り注ぐ。たとえそれが、本営横須賀から遠く海を隔てた、足跡のように連なる群島の一隅であっても。
「――瑞鶴、また左肩が上がっている」
　竜飛が淡々と伝える。
　拠点のすぐ側、密集した木々の隙間で、若い鶴がややぎこちなく、竜飛が貸し出した予備の弓を引いていた。
　また、という言い口が示す通り、幾度か繰り返されたやり取りではあるが、指導する竜飛の声に、この程度で呆れの色はにじまない。単純に事実を指摘しているだけである。
「うっ、うぅぅ……！」

しかし、受け取る側はそうは思わないらしく、食いしばった歯の間から、むずかるような唸り声を押し出した。
瑞鶴は――というよりも、竜飛が思うに、おそらく正規空母は総じて、負けん気が強い。この子の場合、その向かう先は教示する竜飛ではなく、上手くできない自分自身なのだろうと察し、うっすらと苦笑する。
「落ち着け、誰もがつまずく課題だ。――弓を貸してごらん」
宥めつつ、穏やかに背を叩くと、瑞鶴は唇を尖らせながら、馬手を放した。弦が鳴りながら跳ね返り、弓手が逸れる。そこにつまづきの原因を垣間見て、竜飛はひとつ頷いた。
竜飛と瑞鶴が、共に朝焼けを見た日から八日目、陽が昇ってすぐの早朝である。
暗さも明るさも、過ぎれば眼をくらませる。あの翌日から、砂浜の広い面で行おうとしていた弓の鍛錬は、払暁の光とそれを受けて輝く海によって、すぐさま中止を余儀なくされた。
眩しすぎる暁光に眼をやられた竜飛と瑞鶴は、仕方なく場所を改めることにして、まぶたをしょぼしょぼさせながら、拠点へと引き返した。出かけてすぐ戻ってきた二隻に、おチビがなにごとかと眼を見開いていたが、理由を知るや声を上げて笑った。
そのおチビが、外壁の角から顔をのぞかせた。なにを言うでもなく、体格差すさまじい空母たちの鍛錬を眺めている。朝食を煮炊きする火の調節が、ひと段落したのだろう。
艦娘というものたちの大半が、火気を嫌う傾向もあり、当初は火を熾すことも、それを保つこともおっかなびっくりであった。竜飛がほとんど身を寄せるようにして、微に入り細を穿って教えた結果、いまやおチビも慣れたものである。
二隻の注目を集めつつ、竜飛はおもむろに自らの襟元を開いた。着物の内側に収まっていた、大小ふたつの環が揺れる。
眼を白黒させる瑞鶴とおチビを気にもとめず、軽く身をかがめて、ぐいと両袖を抜く。苔色の着物を腰の周りにまとわりつかせたまま、上半身は黒い襦袢一枚の姿となって、弓を受け取った。

姿勢を変えて、左足をにじり出す。足先を張り出した木の根に阻まれ、仕方なくそれを踏みしめた。うねる洋上よりは安定している。
瑞鶴のために、できるだけ平らな場所を選んだものの、やはり足場が悪い。とはいえ、このにわか教え子は、弓そのものに慣熟しておらず、動きながら射る段階に達していない。人ひとり分が平らであれば、どうとでもなる問題ではある。
利点があるとすれば、逸れた矢でもどこかしらに刺さるため、見つけやすいという点か。まともに飛びすらしなかった場合は別として。
「御前、弦の方を引いているだろう。しかも弓の方は前に倒すようにして、過剰に力を入れていないか？」
矢を番えていない素引きの状態で、やおら諸手を立ち昇るように掲げて打ち起こした。次いで空を割り開くように滑らかな仕草で、成りと弦とを引き分ける。
その一連の動作を、瑞鶴は食い入るように見つめていた。やや吊りがちの大きな眼があまりにも強烈で、目線の当たった箇所が焦げそうなほどであった。
あるはずもない視線の熱さを、体のそこかしこに感じつつ、引き分けから会に至る直前で静止する。唇の他は一寸たりとも動かさないまま、臨時弟子（デシカツコカリ）を呼んだ。
「瑞鶴、触ってごらん」
「え」
竜飛の指示に、瑞鶴は一瞬、唖然として口を開いた。
「どこにどれくらい力が入っているのか、触って確かめてみるんだ」
「いい、んですか？」
「いいよ。御前はきっと実践派だ。論理で説かれるより、見て、して、実感する方が上達が早い」
「は、はい……！」
小さな暫定師匠（センセイカツコカリ）よりも、よほど大きな瑞鶴が、未知のものにでもするように、そろそろと両手を伸ばしてきた。そのまま恐々と、肩や腕を撫でまわす。
「あ――」

なんとも言い難いくすぐったさに、眉を曲げて堪えることしばし。感嘆とも驚愕ともつかない声が、竜飛の額へと降ってきた。
遠慮がちだった掌が、丹念に筋肉の力みと弛みを確かめる。籠手をまとわぬ弓手の、肩を、腕をやんわりと揉み、肩口から胸元にかけての関節の位置を調べ、背中にまわって、背骨の左右を、うなじから腰の上あたりまで順番に指で圧してたどった。
「わかるか。力任せに引くから、ぶれてしまうんだ。手の内は程よく。弦を引くのではなく、体を開くように弓を押して、弦と分ける。腕ではなく、背中と姿勢で引くようにしてみなさい」
「は、はい」
我に返ったのか、逃げるように感触が去った。一拍分の沈黙の後、再び指が肩甲骨の間に戻ってくる。そのまま体温は面積を増やし、指先から掌までが、そっと竜飛の背を温めた。
「あたし……。あたし、竜飛さんみたいに、できるようになりたいです――なれるでしょうか」
投げかけられたのは、問いのかたちをした希望だった。
「当たり前だ」
咀嚼するより早く、答えが口をついて出た。ほとんど反射的な返答であったが、なにひとつ、間違っているとは思わなかった。
「……いいや。私程度じゃあなく、私以上になりなさい」
引き分けが、会に到達する。触れる温もりの下で、己の背に力が充溢しきるのを感じた刹那、馬手が振り開かれた。弦が冴えて鳴り、弓返りも鋭く、存在しない矢が、的とした板切れを、過たず射抜く光景を幻視した。
ゆったりと残心しつつ、いましがたの射を反芻する。
何度かの呼吸を挟み、肩越しに振り仰ぐと、瑞鶴が的を凝視していた。瞬きすら忘れたように、的を穿った幻想の矢尻を見つめ続ける。
「――できるのかな」
うっすらと震えを含む声で、瑞鶴は再び問いかけた。あるいはもはや問いなどではなく、竜飛に向けたものですらなかったかもしれない。

「できるとも」
冷たく澄み、しかし焦がれるほどの熱をはらむ瞳が、竜飛を捉えた。
竦んだように揺れる新緑の輝きは、それでも一点のくもりもなく、こちらを見返していた。
あの日、この眼を灼いた朝焼けよりも、なおもまばゆい、始まりのそれ。
「私から持っていけるものは、すべて持っていけ。ありったけ盗みとって、御前のものにしてみせなさい」
「はい」
「楽しみにしている——まぁ、まずは」
弓を突き出す。黒い襦袢の袖が翻り、傷だらけの細い腕が露わになった。
これまでに負った手傷の数々は、竜飛自身にすら、どういった状況での負傷であったか、思い出せないほどに多かった。しかし、これらの痛みが竜飛を育てたのだと、それだけは自信を持って宣言できる。
「よく観察して、数をこなして、試行錯誤しなさい。自分にぴったり合ったかたちを、創り上げるんだ。弓の腕は、弓を引いてしか上がらないぞ」
「——はい！」
胸元に押しつけられた弓を受け取り、瑞鶴はいかにも跳ねっ返りな笑みを返した。

拠点は狭く、その食卓も狭い。
食卓といっても、半壊した戸板に足をつけただけであるが。
ささくれで手を切らないよう、大判の布をかけられたそれは、竜飛が索条を利用して、大まかな寸法を測ってこしらえたもので、床に置いてガタつかないだけ御の字の出来栄えである。
その粗末なテーブルもどきを囲めば、いかに竜飛自身が小型の艦であっても、他二隻の大型艦が空間を圧迫し、鼻を突き合わせるような

距離になる。
密集した、かがめば額同士をぶつけそうな食卓に、湯気を立てるごつごつとした椀が、三つ置かれていた。
厚く輪切りにされた木を丸く削る、いかにも呑気な作業工程を経て作られた木椀は、使用できる工具やかけられる時間、手間との兼ね合いで、相応に大ぶりの品だ。
その重い椀を両手で持ち上げ、静かに啜る。
「ちょっと薄かったか？」
「いいえ、美味しいです」
「うん。むしろ、よくこの環境でここまで作れますね」
「……そうか？」
竜飛は視線を泳がせた。
瑞鶴はこう言うが、あまり自慢できるようなものを、作ったつもりはなかった。
夜明け前に釣った魚が、どれも小さかったため、鱗をとって大まかに骨を取り除き、身を叩いてすり潰した。それに自生していた生姜を刻んで混ぜ、やや物足りないながら、つみれをこしらえた。これも自生していた野草と共に汁物に仕立ててみたが、調味料など、海水を蒸留し、飲み水を得る過程にできた塩のみである。
「私、最初はご飯を食べること自体に、ちょっと変な感じがしてたのですけれど、いまはもう病みつきです」
「あたしも同感！　それだけでも、この体になって良かったって思っちゃうわ」
幼い艦娘二隻が、笑いさざめく。素直な表現に、竜飛もいたたまれなさを拭われ、つい唇をほころばせた。大きすぎる椀の中身を、竹で作った箸でついばみつつ、二隻を見渡す。
「食べながら聞いてほしい。明日から遠征に行こうと思う」
おチビが、両手で持っていた椀をそっと置く。竜飛なら持て余してしまうそれも、おチビの手の中では、やや大きいだけに見えてしまうのだから、ただごとではない。
「燃料が心許ないんだ。敵性艦も静かなことだし、いまのうちに戦っ

ても問題ないだけ確保しておきたい」
「では、調達に行かなくてはなりませんね」
「あぁ、周辺海域の様子を見つつ、ゆっくり遠征してこようと思う」
「はい？」
「えっ？」
「うん？」
　思わずといった風情で声をもらしたおチビと瑞鶴に、竜飛は片眉を上げた。
「もしかして、竜飛さんだけで行くおつもりですか？」
「それはそうだろう。いざという時に御前たちも動けるように、燃料を調達してこようという話だぞ。御前たちが行ったら、汲んだ端から溶けてなくなるじゃあないか」
　おチビと瑞鶴が、ぐ、と押し黙った。悪意はないが、容赦もない率直な発言は、二隻を黙らせるには充分な説得力を持っていた。
「幸いにして、御前たちはこうして、三食きっちりよく食べてくれているから、停泊中の燃料消費は、最小限で済んでいるけれどな」
「はーい。師匠（せんせい）、質問です」
　瑞鶴の挙手が、頭上を突き上げた。暇をみては射を手ほどきしていた結果、ときおり彼女からこう呼ばれるようになった。
　言葉の意味するところは、いささか大仰だと感じているが、瑞鶴にすれば愛称のつもりなのだろうと考え、好きなようにさせている。
「なにかね、瑞鶴五号生」
　艦娘基礎教練過程の学年区分と、第五航空戦隊とをかけた呼称で応じる。海軍兵学校を真似て組まれたものであるが、実際には四号から始まり、一号が最上級生であるため、五号は存在しない。入学すら危ぶまれる現状に寄せた、単なる冗談である。
　この一週間強で、それなりに竜飛の性格を把握してきている瑞鶴も、特に機嫌を損ねるでなく、挙げていた手を、ひらひらと振って降ろした。
「燃料消費の軽減と食事との関係を教えてください」
「よろしい、ざっくり説明しよう。さすがにわかっていると思うが、

軍艦(ふね)をただ浮かべておくだけでなく、最低限でも機能させておくには、燃料を消費する。たとえ停泊待機していても、中身が動いているなら、それに燃料を食われるからな――おチビと瑞鶴のような大型艦だと、その少しずつも相応の量になる」

外壁に沿って並べられたドラム缶を、窓の穴ごしに指し示す。空の缶の方が多くなったそれを、二隻は神妙な表情で見やった。妙にそろった動作に、思わず頬を緩め、視線が戻ってくる前に、むりやりそれを抑え込む。

「では、そもそも艦娘が常に維持しなくてはならない機能とはなにか。御前たちが人の形になった今、その機能というのは、要するに身体的なものに他ならない。活動し、思考し、戦闘するに足るだけの活力がなければいけないんだ。これを完全に停止してしまうわけにはいかない。それは死を意味するわけだからな。生身の体で、不便な点のひとつだ」

人差し指で、肩口を軽く叩きながら解説すると、熱心にその仕草を凝視してきた。

唇に堪えきれない苦笑が浮かぶ。

微笑ましく、くすぐったく、そしてなんとも充実している。二隻と潜伏し始めてから、こういった場面が増えた。

自分のようなものが、この無垢なものたちに、たとえ些細なことでも、なにかをしてやれている。それが苦しいほどに幸せで、それだけに堪え難い。腹の底からじわじわと沸き立つような焦燥感が、この穏やかな日々に警鐘を鳴らすのだ。

気を緩めてはならない、すぐにまた鉄火場に飛び込み、満身創痍できりきり舞いすることになる。自分がするべきは、火中の栗を拾いに行くことで、このような安穏とした幸せなど、不相応も甚だしい――と。

「御前たちの身体機能は、人と似ている。だがそれと同時に、その本質は軍艦(ふね)だ。つまり、人の形をしていながら、燃料を消費することで、その身体機能を維持できる。同じく人としての側面も持っているので、摂取した食物を活力源とし、やはり身体機能を維持できる」

「だから、ちゃんとご飯を食べると、燃料を節約できるのね」
「三度の食事より、燃料の方が割高ですものね」
「そういうことだ。ついでに補足もしておこう。惜しいことに、艤装、兵装、航行装置などの方は、燃料でなければ動かない。あれらは魂を起点にしてつながった、御前たちのもうひとつの体だ。だが――あっちには給油口はあっても、ものを食べる口がないからな」
肩をすくめ、そんな軽口で締めくくった。おチビが鈴を転がしたような声で笑う。
「それは、本当にもったいないことですね」
感情の動きに合わせて、花びらが舞い落ちた。ふわりと着地するや、溶けるように消えてしまう。あまりに場違いな、しかし奇妙に心をざわつかせる南国の淡雪は、この大きな幼い艦娘に似ていた。
しばし声もなくそれに見とれた後、かすかなため息でそれを振り払い、仕切り直す。
「ともかく、明日の朝から遠征に出るよ。最短で三日、最長で五日くらいを見込んでいる。大丈夫だとは思うが、警戒を厳にしつつ潜伏していること。生活に必要なあれこれは、いままで見てきたからだいたい把握しているだろう？　今日の午前中は瑞鶴の発着艦訓練にあてて、午後からはざっくりとそのあたりを確認しておこう」
椀を持ち上げて、汁を飲み干す。重たいそれをそっと戻し、穴の空いたドラム缶の椅子を立った。
「おかわりはいるか？」
「……いただきます」
「あたしも欲しいです」
片や遠慮がちに、片や元気よく差し出された椀を受け取り、鍋の蓋を開けた。

＊　＊　＊

「師匠(せんせい)って、何者なんですか？」
思わずこぼれ落ちてしまった問いに、瑞鶴は内心で冷汗をかいた。
この体における発着艦の手順を確認し終えて、ひと息ついたまさにそのときである。気の緩みとともに、口も緩んでしまったのか、疑問に思いつつも、あえて訊ねまいとしていたそれが、不意にこぼれ落ちてしまった。
「――漠然とした質問だなぁ」
常にはない、間延びした反応であった。頬を引きつらせる瑞鶴の、あまりに正直すぎる表情筋を、苦笑ひとつで許容し、竜飛が浜辺へと視線を投げる。
曙光ほどの痛烈さを失った太陽は、それでも砂浜と海面を燦然ときらめかせている。
自分とともに木陰に佇む竜飛の、この南の島にあってすら白い面貌に、明るみの鮮烈さは、同時に、陰にあるものさえ鮮やかに際立たせるのだと、瑞鶴は知った。そのまま、思いのほか長いまつげが作り出す、眼もとの陰影をぼんやりと眺める。
「具体的に、私のなにを知りたいんだ？」
問い返され、意識が引き戻される。その背景を問うことに、はっきりとはしないながらも、忌避感を抱いていた瑞鶴とは裏腹に、竜飛は気安い様子であった。
「じゃあ――なにをしてきたひとなんですか？」
「経歴か？　そうだな……。こういう漂流生活を長らく続けた後、変な縁があって海軍本営に十年と少し飼われていた。そのとき、いろいろあって監禁されて、その後さらに軟禁されて、鬱憤がたまりすぎた結果、トチ狂って大騒ぎしながら出奔。いまに至る」
「なんですかそれ……」
「……本当にいろいろとありすぎて、説明が面倒きわまりなくてな」
指先で下唇をたどりつつ、眉をひん曲げる竜飛。こだわりのなさすぎる師に、瑞鶴はすっかり拍子抜けしてしまった。
「そもそも、私がなぜ海にいるのかは、あのときおチビに話したのを、聞いていたのじゃあなかったか」

「あのとき――えっ、あの、あ……」
うろたえる。その反応こそが、これ以上ない肯定となった。
薄暮の下に晒された、白く、細かな傷に彩られた背中を思い出す。一瞬のみではあれど、窓穴から垣間見たそれは、窃視に対する罪悪感と、滅多にないものを見てしまったような、なんとも形容しがたい感情とともに、脳裏に焼きついていた。
眼の前の師が言うところには、空母というのものは皆、程度の差こそあれど、記憶力に優れているらしい。役割を考慮すれば、必須の能力ではあろうが、皮肉にも今このときばかりは、それが瑞鶴の足を引っ張る結果となった。
「気づいてたんですか……」
「近くの気配には敏感な方でな。とはいえ、あのときはそんな気がした程度だったのだがね。確信をもったのは、そのあと夜中にここで弓を引いていたら、御前が来たときだ。御前、あのとき――」
竜飛が、に、とわざとらしく歯をむいて見せる。揶揄するような、しかし不思議と人好きのする眼が、瑞鶴に向けられた。
「――まだ知らないはずの、私の名を呼んだだろう？」
「……え？　――あっ⁉？」
「迂闊、だったな。ふ、ふふ……」
思い起こして、素っ頓狂な声を上げる。口をあんぐりと開けた、間の抜けた顔で竜飛を見つめると、その薄い唇から、吐息のような笑い声がもれ出た。細い肩が震える。
切れ長な目尻を下げた、控えめな笑みだった。鋭利な顔立ちや、普段の精悍な姿からは、想像もつかないほどに、可憐な笑顔である。
「うっ……。は、話を戻しますよ！　それじゃあ、海軍と合流したら、竜飛さんはその変な縁でまた本営に行くつもりなんですか？」
「いいや？」
ほんのりと笑いが尾をひいた声で、否定する。首を振る動作とともに、竜飛の視線が外された。どこともしれない、海の向こうに眼をやって、他人事のようにささやく。
「私ではなくて御前たちだよ、変な縁で本営に行くのは」

「竜飛さんは」
「行かない。合流するつもりもない」
穏やかな表情とは裏腹に、きっぱりと言い放った。瑞鶴は瞠目する。変貌、と表現してもいいほどに、かたく、陰をはらんだ声色であった。
「変な縁は、信用できるんだ。けれど、海軍は――あそこには……」
言葉を詰まらせる。否、呑み込んだのだろうか。
物静かで、瑞鶴やおチビを慮ることは多くとも、率直で明朗な竜飛がするには、違和感を禁じ得ない態度であった。
「――私のようなものがあそこにいても、誰も幸せにならないし、できない」
幾度か逡巡するように唇を開閉させたあと、奥歯にものが挟まったような口ぶりで、そう続けた。大概の場合において、根拠を示し、筋道を明確にしてものを言う、およそいつもの竜飛とは思えないような煮え切らなさであった。
瑞鶴は押し黙った。今度こそ、踏み込んではいけない、吃水線の存在を感じた。
「すまない、気にしないでほしい。ともかく、御前たちのことは変な縁――信用できる提督に任せようと思っている。私は私で、好き勝手にやっていくから、心配する必要はない」
「でも……」
それでも納得しきれず、やみくもに食いつこうとする瑞鶴の髪を、不意に小さな手が優しく梳いた。ふたつに結いあげた内のひと束を、かたい指先で撫で、毛先をさらさらと零すように弄ぶ。
「ありがとう、瑞鶴」
そのうえ、頑是ない幼子をあやすように礼など言われたら、瑞鶴はもう、今度こそ言葉を失うしかないのだ。
まるで、いつかと同じように。

＊　＊　＊

明朝。袂から取り出した二枚の紙を差し出すと、二隻が怪訝な表情でそれを受け取った。
「お守りだ。願掛けとも言うがね。今のうちに渡しておく」
掌に収まってしまうまでに、複雑に折りたたんだ、その紙のお守りを、幼子たちがそろってきょとんと見下ろす。
「すべて終わって、海軍で最初に提督と会うまで、開くんじゃあないぞ」
願掛けとは、そういうものだからな――そうつけ足す竜飛に、おチビは、熟練の絵師によってひかれたような、美しく線を描く眉を、情けなく下げる。
「嫌ですよ……。竜飛さん。今のうちだとか、すべて終わってだとか、縁起でもない。無事に帰って来れないみたいじゃありませんか……」
「え？」
ぽかんとする竜飛を見据え、おチビはその透き通った大きな瞳に、いまにもこぼれ落ちそうなほどの露をにじませた。
「――いやいや。私からすれば、御前たちの方がよほど心配なのだがね。本当に、私が帰ってくるまで、二隻で無事に生活できるといいのだけれども」
「もぉ。師匠(せんせい)ったら、それはさすがに心配し過ぎ――でも、ないかも……」
竜飛の本音が混じった軽口を、笑い飛ばそうとして、徐々にその語勢と自信を失速させていく瑞鶴。
この孤島生活で、日常の雑事のほとんどは、二隻に手伝わせるまでもなく、竜飛が手早く片をつけてしまっていた。必然として、二隻がそれらを経験する機会も少なく、それに伴って技術の向上も微々たるものである。
竜飛の手がなくなった途端、生活に必要なあれこれに悪戦苦闘することは、火を見るよりも明らかであった。
「え、ええと、あの。昨日、ひと通り教えていただいたので、きっと、

大丈夫かと……。――た、たぶん」
「そうだといいがね。まぁ、火と水さえ確保できれば、あとはどうとでもなるさ。私も慣れない頃は酷いものだったよ」
まったく自信のなさそうな二隻に、竜飛は苦笑する。手にしていた索条のたわみを、軽く振り回すようにして伸ばした。
「念のため、もう一度だけ確認しておく。二隻はその隠蔽を最優先にし、現地点にて潜伏していること。敵性艦が近づいても、発見されるまで手出しは控えて、極力やり過ごすこと。もしものことがあったら、ひらけて丸見えのこちら側ではなく、昨日の内に案内しておいた、見通しの悪い北側からこっそり出ること――大丈夫か？」
「はい、大丈夫です。竜飛さんもお気をつけて」
「あたしたち、いい子にしてますから。早く帰ってきてくださいね。せーんせい？」
内心を押し殺し、おそらく精一杯の笑顔を作って見せているのであろう二隻に、竜飛も笑い返した。
「善処しよう。では、行ってくる」
ひらりと手を振り、空のドラム缶を満載したボートを曳いて出航する。二隻の視線を背に感じつつも、振り返らず、粛々と航路をとった。

洋上に点在する油井は、海軍が制圧し、管理下に置いているものを除き、そのほとんどが敵性艦によって押さえられている。しかし、すべてではない。
「――っと……」
そのすべてではない例外に、竜飛はいた。拠点よりもさらに小さな島の、目と鼻の先にある、これもまた小さな施設の跡地で、持ち込んだドラム缶の最後のひとつを、燃料で満たす。
島の方角を見やれば、浅瀬からこちらへ向けて、粗末な桟橋が組まれ、物騒な壊れ方をした小屋が、いくつかその上に載っていた。作業小屋だったのだろうか。

丸くすり鉢条にへこんだ、施設の外壁を撫でる。
好立地であるにも関わらず、稼働していないところを見ると、おそらく、設備を竣工したか否かの段階で、敵性艦の襲撃によって、一旦は放棄されたのだろう。弾痕とおぼしき跡をつつきながら、竜飛はそう推察した。
その後、ほとぼりが冷めた頃に改めて調査し、湧出量かなにかの問題で、危険を冒してまで汲み上げるに能わないと、閉鎖したのかもしれない。もし有用な油井であるなら、艦娘を配してでも採油しにかかるはずだ。
むろん、すべて推論でしかなく、実際のところは不明である。いずれにせよ、竜飛のような立場のものにとって、比較的に新しい、まだ使用可能な施設は、非常に得難いものであることだけは、確かだった。
竜飛は、満杯になったドラム缶を、艦娘の膂力に任せてボートに積み込み、自在結びで固定する。
「よし」
ボートを係留していた索条を解き、曳きながら桟橋を歩いた。あちらこちらが腐り落ち、空いた穴から揺れる海面がのぞいている。
竜飛は足を踏み外さないよう注意しつつ、油井ではなく島の方にある、利便性など知らぬと言わんばかりの、簡易的な係留施設に、ボートを持っていった。
錆によって、頭をでこぼことさせた係船柱に、変則的なもやい結びの輪をかけ、結び目に触れて強度を確かめる。
「まぁ。取りに来られるのかは、わからないが……」
聞くものもない呟きをこぼし、ふと口もとを押さえる。
なんて馬鹿な――竜飛は眉間にしわを寄せて苦く笑った。おチビや瑞鶴と過ごす内に、随分と口数が増えてしまった。否、戻ってしまったというのが、正確なところかもしれない。
前日の昼間、瑞鶴に語ったように、これまでのすべての時間を、ひとりで生きてきたわけではなかった。そして、そういった時間が、優しく、幸せであればあるほど、竜飛は息もできなくなるような危機感を覚える。

竜飛は、弱い。
おチビのように、頑強な装甲や強大な主砲もなく、瑞鶴のように、最新鋭の航空機を運用できるだけの素地も、土壇場で見せる爆発的な潜在能力もない。
あるとするなら、艦娘としては当たり前の水に浮く特性と、旧い機体でないと操れない、空母としては中途半端な管制能力だけだ。
強いて優っているものを、ひとつでも挙げられるのなら、それは、この人の形をした体の扱い、ただそれのみである。しかしそれも、艦娘たちが経験を積めば追い抜いてしまえる要素なのだ。
戦い続けるためには、竜飛は誰より鋭くあらねばならなかった。一切の油断も容赦も、してはならなかった。それこそが、竜飛を戦うものたらしめている、唯一の要素であるのだから。
――だから、おチビの懊悩に、知ったような顔で説教するような資格など、本当はないのだ。
「さて」
今度は意図して声を上げる。穏やかな幸せに浸りきって、鈍ってしまった意識を、いま一度、研ぎ直す。
竜飛はその場に膝をついて、地面にやや大判の布切れを広げた。雫がしたたり落ちた跡のような形や、砕けた枯れ葉のような形が描かれた、それは海図であった。
おチビや瑞鶴に見せていたものと比べ、四半分ほどの大きさでしかないそれは、しかし拠点で使用していたものより細かく、大量の書き込みがしてあった。
その海図の上を、骨ばった指先がなぞる。
あの二隻が、あの説明で納得してくれて本当に良かった――思案しつつも、頭のどこか隅の方に、そんな思いが浮かんできた。
いずれかの鎮守府に所属し、実際に艦隊行動をとっている最中なら、旗艦の指示を強硬に拒否することなど、まずあり得ないであろう。しかし、あの場において暫定的な旗艦である竜飛は、自分とあの二隻を、良くも悪くも、艦隊として括ることはしてこなかった。
あの環境にいるうちは、彼女たちも、思い余って任務では決してし

ないような判断を、してしまう可能性があった。
それだけは避けなければならなかった。この遠征、否、強行偵察にだけは、絶対に連れて来るわけにはいかなかったのだ。
――燃料の不足に関しては、嘘でもなんでもない。正確には、有事に備えて秘蔵していた分を除いて不足しているのであり、それも出がけに指示した北側の、入り江と呼ぶにはあまりにささやかな砂浜に、目立たないように置いてある。急場に際して、実際にあの場所から出航しない限り、まず気づくまい。
出航時の二隻の様子を思い返すと、竜飛も少々、気が咎める。しかし、この状況では他にどうしようもなかった。
瑞鶴を迎え入れてからしばらく経つが、このところ、敵性艦による襲撃が、まったく行われなくなっていた。
瑞鶴を保護する以前は、下位のものばかりとはいえ、四日に一度は必ず敵性艦隊の襲撃を受けていた。散発的なはぐれによる襲撃は除いたとして、艦隊による襲撃に規則性があったことを鑑みれば、拠点とした島は、固定の航路に近かったのだろうと、竜飛は考えている。
以前、拠点の移動に関しておチビと相談した際にも、話題に上ったことではあるが、固定の航路ということは、竜飛たちが撃沈した艦隊がどこを航行していたのか、敵性艦側も把握しているということだ。
要するに、あの拠点は、すでに割り出されているはずなのである。加えて、瑞鶴が加わる二日前、竜飛は敵性艦隊のうち、駆逐艦の一隻に、撤退を許してしまっている。
おそらくそれが原因で、一旦、襲撃頻度が増したにも関わらず、あの夜からぱったりとそれが途絶えているのだ。
この状況に、違和感を覚えない方がおかしい。
どこかで、なにかとんでもない事態が、起こりつつあるのではないか。そのために、敵性艦も、たかだか三隻のみの少数艦隊に手をこまねいている暇など、なくなったのではないか。
「敵性艦側か、艦娘側か――事を起こそうとしているのは、はたしてどちらなのか……」
いずれにせよ、きっと今回も後手に回るのだろうな――ぼやきつ

つ、海図を畳んで懐にしまう。
袂をさぐり、作業中は外していた黒い弓懸を挿した。台皮を押さえ、本体と同色の紐で巻き止める。四掛のそれの、使い込まれて毛羽立った弦枕の表面を撫で、浮いた股を押し込んだ。軽く握って放し、具合を確かめる。
次いで胴をまさぐり、左上半身のほとんどを覆う籠手の、着け心地を確認した。手首の緒を歯で緩め、一本だけ露出した馬手の小指を差し入れる。手首の内側をのぞき込み、そこに仕込まれた暗器を眼で確かめた。
弓手をそのまま鞭のように振るう。手もとに飛び出てきた釘を五指の間に挟み、その先端まできっちりと見てから、器用に元の位置へと差し込んだ。
「よし、では――」
伸べた右腕の上に、ずるりと飛行甲板が生え出でる。同時に矢筒や探信儀も表出したことを、背の重みで感じ取りつつ、右足を退いて半身になった。通常発艦姿勢。
射法の前半を省略し、するりと一挙動で打ち起こして引き分け、瞬く間に会へ。
「偵察機、発艦」
――いざ、戦さ場へ。

五節　退キ別ケ（ひきわけ）

分厚い雲が、低く垂れ込めていた。
生温い風がおうおうと吹きすさんでいる。鈍い色をした海原は、その上を往くものを、自らの内に引きずり込まんとするかのように、獰猛にうねっていた。
雲の帳を、薄く削ぐようにかすめ、彼女はその装束に似た深い緑の翼で、入り乱れる強風のあわいを滑る。大気は湿り気を帯びて、全身にまとわりついてくるようだった。
つつけば底が抜けそうな雲の波と、荒々しく跳ね上がる海の波に挟まれて、横溢する気流に揺さぶられながら、彼女は――飛翔した。

＊　＊　＊

天気雲翳にして風強し。
鉛色の海面に、六つの航跡が尾をひく。
密度をも感じるような風に肌をなぶられ、髪を、裾を流されながら、白い飛沫を散らして、横須賀新海域偵察艦隊は海の果てを目指していた。
［――なんだか、妙に静かね］
旗艦である軽巡洋艦阿武隈のつぶやきを、無線が真正直に電へと伝える。右舷へ視線を流せば、数メートル離れたところから、彼女がこちらを見返した。
［うーん。いいことなんだろーけど、あたしちょっと退屈になってきちゃった］
［気持ちはわかるけど、気を抜いたらだめだよ、白露］
［そうそう。一応ここ、もう新海域なのよ？］

［わかってるよぉ］
［まぁ、危なくなったら、後ろにいる私も助けてあげるよ］
［響ちゃんありがとう！］
［わ、私も！　私も助けるから！　頼っていいのよ！］
［雷ちゃん……！　六駆の子たち、優しいなぁ……！］
［つまり、妹は優しくないって言いたいんだね］
［し、時雨も優しいよ！］
旗艦の言葉を皮切りに、後ろに続く駆逐艦四隻、白露、時雨、雷、響がじゃれ始める。無線からあふれる僚艦たちのやり取りに、思わず笑みがこぼれた。
電には、そしておそらく阿武隈にも、彼女たちの私語を咎める気はない。
今回、編成された艦たちは、電も含めて、横須賀でも上から数えたほうが早いような手練だ。自分も、彼女たちも、艦隊行動中に少しばかり談笑した程度で、陣形を乱したり、索敵が疎かになるような鍛え方はされていない。必要なことは、もはや習い性のように、各々の体に染みついている。
電は小さく息をついた。
この編成における彼女の役割は、旗艦と僚艦たちの齟齬を埋めることにあった。
この中に、いまさら互いを知らないなどという者はいない。しかし彼女たちは、連携の都合上から、平時は姉妹艦をひとまとまりとして編成し、運用されている。暁型なら暁型、白露型なら白露型と、艦型ごとに、それぞれ別の遠征艦隊として、シフトを組んで入れ違いに出撃しているのだ。
つまるところ、ここにいるものたちは、それぞれ熟練の水雷屋ではあるが、艦隊としては、遠征のシフトを考慮して編成された、三つからなる混成艦隊――いわゆる寄せ集めと表現してもいいものであった。
だからこそ、些細な衝突や行き違いが起こった際、そこから任務に支障をきたすような軋轢へと発展しないよう、秘書艦として全員と少

なからず交流のある電に、いわば潤滑剤としての機能が期待されていた。
しかし、この和気藹々とした様子を見るに、どうやらその懸念は、ほとんど杞憂であったらしい。
「ついでにこちらの懸念も杞憂であればいいのですが……」
無線にすら乗らない、小さな独白。
［電ちゃん？］
名を呼ばれ、電は反射的に背筋を伸ばした。眼の端で、阿武隈が気遣わしげにこちらを見ていた。
［大丈夫？　なんか険しい顔してるよ？　――腕、痛い？］
目線で示され、無意識に左腕をさすっていたことに気づいた。
「あ、いえ。違うのです」
［そっか。……それ、怪我してるとか、なんかの後遺症とかじゃ、ないんだよね？］
眼を落とす。持ち上げた手は、甲の半ばまでを黒い布地に隠れていた。ところどころ修繕跡が残る、そのふちをなぞりながら、電は苦笑する。
「いいえ。これを触ってしまうのは、本当にただの癖なのです。――その、実はあまり良くない感じの……」
［良くないって？　どういう？］
「……ずっと、嫌な予感がしているのです」
電はしばし表現に悩み、結局はただ漠然とした不安感のみを告げた。
［ちょ、ちょっとぉ、やめてよぅ。そんな不吉な――］
［――左舷、約三万四千に不明艦隊。呼びかけに応答なし。敵艦隊、見つけたよ！］
眉を寄せる電と、頬を引きつらせる阿武隈の耳に、時雨の警告が飛び込んできた。
［ひぇっ。やだぁ、言ったそばから……。はいはいっ、皆さん気を引き締めて！　会敵よ！］
阿武隈が緩んだ雰囲気を一掃しようと声を張り上げる。

［たぶんこっちも見つかってるわ！　砲撃で牽制しながら、雷撃距離まで単縦陣で突っ込みましょ。はい、序列つくって―！］
［――ちょっと待って］
てきぱきと指示を出し始める阿武隈を、時雨が制止する。
［なんだか……変だ］
曖昧な言い口とは裏腹に、その声は暗く、慄くようだった。

＊　＊　＊

――海が、黒い。
ものの例えではない。雲の天蓋と同じ色をした海面が、彼女の眼下を境目として、くっきりと黒く変じていた。
彼女は息をのんだ。
黒々とした海は、雲影をおとしたためでも、重油を流したためでもない。黒い色をした何者かが、海を塗り替えんばかりに、隙間なくひしめき合っていると気づいたのだ。
――うごめいている。
高みを飛ぶ彼女の視座からは、いびつで小さな黒い丸が、びっしりと水上を覆っているように見えた。それらが、まるで波の一部であるかのように揺らぎ、蠕動しているのだ。
ゆるりゆるり、ゆうらゆうら。
ざわりざわり、ぞわりぞわり。
総毛立つ。これらは――この黒いものたちは、ひとつひとつが別の個体であるのだ。上空から見下ろせば、もはや液体と見紛うような風情で大量に寄り集まり、押し合いへし合いしながら、水面をたゆたっているのだ。
彼女は呼吸を忘れて、それらを眺めていた。背筋をなにかが這いまわるような錯覚に陥りながら、固唾を飲んで眼を凝らす。
遠目には、餌にたかる小虫の群れにしか見えないそれらの、細かな

造作を見てとろうと高度を下げ――その形を眼に焼きつけた瞬間、視界の端を小さな影がよぎった。破砕音とともに、視界がぶれる。
暗転――。

＊　＊　＊

［――さ、散開！　散開してっ！　ばらけてぇっ！］
阿武隈の悲鳴のような指示が、無線を伝って、硬直する艦隊に喝を入れた。
敵性艦体――艦隊と表現するのも馬鹿らしくなるほどの大艦隊である。ひしめき合うような密度で、水平線をじわじわと染めるように湧き出て、あっという間に、海が視界の端から端まで真っ黒に染まった。
最古参にして歴戦たる電ですら、背筋の震えが止まらない。もはや、個々の艦種を判別することすら困難なほどのそれは、遠目には黒い波、あるいは近ければ黒い壁のようですらあった。
おそらくは、最もわかりやすいであろう形で示された、純粋な〝数の暴力〟が、横須賀新海域偵察艦隊をひき潰しにかかっている。唯一、救いがあるとするなら、あまりに密集しているがために、全体の足が遅いということだけだ。
［早く散開して！　滅多打ちにされちゃう！　とにかく一旦ばらけて！　回避っ！　回避ぃぃ！］
至近に打ち込まれた砲撃に、弾かれるようにして六隻が散る。やや前後して、海面のそこかしこに水柱が生まれては消えた。
［雨は好きだけど、この雨はいただけないね……！］
［いっちばーん！　は、さすがに遠慮したいっ］
白露型姉妹の諧謔に焦りの色が混じる。
［各艦、とにかく回避よ！　回避を優先して！］
阿武隈が指示を叫びながら、忙しなく視線を動かして状況を確認し

ている。呼応して、白露が、時雨が、響が、雷が、そして電が、それぞれ回避運動をとり始める。
「阿武隈さん！　司令部に連絡を！」
［わかってます！　――第三！　第三司令部！　こちら旗艦阿武隈です！］
意見を具申し、電はすぐそばで水柱を上げた砲弾に顔をしかめた。波のうねりに乗るように何度も舵を切り、不規則な加減速で砲撃を避ける。
と、黒い大艦隊の波打ち際に視線を向け、手前の海面に白い筋を見て取るや、電は反射的に無線の向こうへ叫んでいた。
「雷跡確認なのです！　数限りなく！　方角そこら中！」
［ええいもぉう次から次へと！　気合いで避けてやるわよ！］
［さすがにこれは、辛いね……！］
姉妹たちが、片や自棄ぎみに、片や苦しげに応答する。それに耳を傾けつつ、電は急加速した。特攻と見誤られかねないほどの思い切りの良さで、微塵の躊躇もなく、砲弾の嵐を掻い潜る。その勢いのままに、司令部とやりとりする阿武隈と、敵艦隊の間に身を滑り込ませた。
［了解です！　お願いしま――電ちゃん⁉？］
阿武隈のもともと高い地声が、さらに上ずる。
それを一顧だにせず、甲の半ばまで黒い布で覆われた左手を、鞭のように振るった。銀光がきらめいて奔る。一瞬の後、唐突に周囲の海面が数ヶ所ばかり持ち上がり――盛大に破裂して水しぶきを上げた。
［ひっ！　な、なに⁉？］
「魚雷を迎撃しただけなのです。――それで、司令官さんは、なんておっしゃってました？」
［そ、そう！　各艦に通達！　同じく偵察に出てる、呉と佐世保の艦隊がこっちに来てくれるわ！　そしたらあたしたちは撤退して、本土近海の司令部と合流！］
阿武隈の張り上げる声が、艦隊を鼓舞する。
［急いで補給して、艦隊の再編成！　横須賀のと、呉と佐世保の主力艦隊が合流して、連合艦隊を組んで再出撃よ！］

だから、どうにかして全力で生き残るわよ！　――必死さのにじむ声は、任務上のものであり、また仲間たちへの偽らざる願いでもあった。

艦隊に士気が戻る。

［よぉーっし！　はりきっていきましょーー！］

［雨は、いつか止むさ。砲弾の雨なら、止ませてみせる］

［不死鳥の名は伊達じゃない。見せてあげるよ］

［この雷さまに敵うとでも思ってんのかしら！］

皆、口々に気勢の声を上げる。

電は、口の端が緩むのを自覚した。状況は最悪の半歩手前。彼我の戦力差は目眩がするほどである。このままいけば、大した抵抗もできずに圧殺されかねない。

しかしいま、この時、この状況で、どうしようもない高揚感が電の胸を突き上げていた。

たとえ覆しようもないほどの劣勢であっても、己が能力を十全に振るう機会に恵まれ、背後に護るべき国がある。そして傍らには信頼すべき旗艦と、頼もしい僚艦らが肩を並べているのだ。

なんと贅沢な戦さであろう。なんと軍艦冥利につきる戦さ場であろう。

――嗚呼。これこそが、自分があのひとに教えたかったものだ。

――できることなら、あのひとにもこれをあげたかった。

胸裏に差し込む憂いは、一瞬。

右舷をかすめるように飛んできた砲撃を、ほとんど横に跳ぶようにして避ける。体全体で回転して慣性を殺し、至近に立つしぶきで肩を濡らしながら、無線へそっと言葉を吹き込んだ。

「今のところ、電は駆逐と軽巡しか目視できていません」

この場において、なおも平静さを保つ声で、艦隊に警告する。

その胴の左右で、金属が噛み合う重々しい音がした。幼げな円い双眸が、刃物のごとく研ぎ澄まされて、黒い大群を睨みつける。

「でも先ほどから、ときどき大きな弾が飛んできているのです。皆さん、充分に注意してください」

その面差しには、常日頃の大人しく優しげな気配はなく、ただ激甚なる戦意を――艦娘の誕生以来、数多の海戦を戦い継いできた、古兵の覇気を滾らせていた。
［まったく、電ちゃんの方がよっぽど旗艦らしいんだから……］
阿武隈のぼやきに苦笑し、腰を据える。
「雷撃いきます。電の――本気を、見るのです！」
魚雷が、我先にと海中に飛び込んでいった。

＊　＊　＊

ち、と舌打ちがこぼれる。
「撃墜されたか……」
じっとりとした潮風が着物の袖をはためかせ、髪を巻き上げる。乱れた前髪をぞんざいに撫でつけつつ、彼女――竜飛は彼方を睨みつけた。
油井から偵察機を飛ばして、一夜を経た。
あの後、自らも周辺の哨戒を済ませ、帰還した偵察機を着艦させたのち、竜飛は放棄された油井に戻り一泊した。そうして、今朝から再び偵察を開始し、改めて敵性艦の捜索を開始している。
近場には、相変わらず敵影が見当たらなかった。常ならばそちらこちらをさまよっているはずの、はぐれですら見つけられなかったほどだ。
竜飛は、拠点の周辺海域にいながらにして、敵性艦の動向をつかむことは不可能と判断し、より広域での偵察に乗り出した。ありったけの偵察機を発艦させ、自身もひとり、大海原を進んでいる。
島影は水平線に隠れて久しく、どこに眼を向けても、鬱々とした雲と海だけが広がっていた。
しかし、この天候の他は平穏な海原の向こうには、全身が毛羽立つような光景があったのだ。むろん、自身がその場に直接居合わせたわ

けではなく、先んじて発艦した偵察機によって垣間見たものであるが。
竜飛をして、生理的な忌避感を禁じ得ないほどにひしめき合う、敵性艦の大艦隊。思い出すだに身の毛もよだつような光景であった。
しかし、待ち望んだ発見でもあった。
さて――と、幾度目かの仕切り直しの声。
「どうするかな」
拠点に対する襲撃が止んだ理由は、おおむね理解できた。おそらく、あの大艦隊によって、なんらかの作戦が展開されており、戦力の大半がそちらに割かれた結果、あの島は捨ておかれることになったのだろう。
都合の良い話ではある。こちらは竜飛自身も含めて三隻の少数艦隊。それも、うち二隻は生まれて間もない新造艦娘で、どちらも多量の資源を必要とする。
すなわち、手も足りなければ、資源も足りない。この状況では、下手に身動きせず、頭を低くしてやり過ごすのが、最も賢い選択であろう。
ただ――。
「方角的に、本土へ向かっているんだろうな」
現在の、海軍の戦力を竜飛は知らない。自身がそこに名実ともに籍を置いていたのは、もうずいぶんと昔のことであった。具体例を挙げるのであれば、当時は子供だった者が、大人になるだけの時間が経っている。
あるいは、働き盛りの大人が、老境にさしかかるくらいの時間か。
竜飛が矢筒から矢を引き抜いた。
嫌な予感がする。腹の底を、じわじわと炙られるような。
「――偵察機を墜とした、あれは……」
偵察機の視野をかすめて飛来した、小さな影を思い起こす。
海軍の時流は、どう変わっただろうか。相も変わらず、偏った編成が好まれているのだろうか。自分や、仲間たちが口を酸っぱくして説いたあれこれは、どれくらい根づいているのだろうか。

すい、と弓を引く。もはや射法など無視した挙措であったが、染みついた動作はおそろしく自然で、常のごとく最適な結果を出してみせた。

矢が、風を貫いて飛んだ。

射付節(いつけぶし)から箆中節(のなかぶし)のあたりまで巻かれていた、紙垂(しで)のような紙が解けて、白い尾を曇天にたなびかせる。

瞬間、それが激しく煙を吹いた。

もうもうと吹き上がった煙を、つやめく翼で散らし、銀の鷲たちが躍り出る。仄暗い空を切って、水平線の向こう――北へと翔け出した。

「まぁ、いずれにせよ」

小さな嘆息をひとつ。

早くも小さくなった機影を追い、竜飛も舵を切った。水面を削り、しぶきを立たせる足で、滑らかに踏み込む。そのまま、航行するというよりは、水上を飛ぶように、竜飛は走り出した。

頬に苦笑が刻まれる。

「賢い選択なんて、私には無理だ――馬鹿だもの」

それきり、苦くも柔らかだった笑みが消えた。否、笑みだけではない。竜飛の内面の動きを映す、表情そのものが、抜け落ちたように失せた。

力強く波を踏み締める足が、断続的に水面を鳴らす。切れ目なく続くそれは、機関銃の斉射のようですらあった。

偵察機の生き残りは、一旦、着艦するために折り返させた。その途上の光景を、分割した意識を割り当てて、次から次へとめまぐるしく確かめる。

雲の切れ目、晴れた空。敵影なし――本艦ヨリ東北東。

降り始めた雨、風がびょうびょうと鳴る。敵影なし――本艦ヨリ西南西。

風が強い、荒れた白波。敵影なし――本艦ヨリ西北西。

のしかかる雲、うねる海面。敵艦隊見ゆ――本艦ヨリ北西。

「あれは――輸送艦？　前線への補給か？」

敵艦隊、重巡二、輸送四の複縦陣と認む――本艦ヨリ約五万八千。
彼我の距離を知るや、竜飛は腰をねじった。
ほとんど速度の落ちない、急激な転進である。
全身の、信じがたいほど柔軟で粘り強い筋肉と関節が、遠心力すら操作せしめ、その方向をひとつに束ねた。
波を踏んで、駆ける、駆ける、駆ける。
なにもかもが、およそ艦艇になし得る動作ではなかった。生き物にしても、これほど自在に己が体躯を、その四肢を駆動させるものが、どれだけ存在することだろう。
それからしばしの後、雷撃距離の直前にまで接近した竜飛の左舷に、水柱が立った。それを幕開けに、疾走する竜飛を追うようにして、次々と盛大な水しぶきが上がり始める。ようやくこちらに気づいた、重巡の砲撃。
近、夾叉、近近、遠。
竜飛を戦場へ――その先にある地獄へと誘わんとする、物騒な花道だ。
だが、もう遅い。
竜飛は弓をもたげる。
駆ける勢いのまま、体を斜にかまえた。横滑りしつつ矢を番える。高々と水しぶきをはね散らしながら、立て続けに三度、弦を鳴らした。戦闘機と爆撃機、攻撃機が、銀と濃緑の翼を翻し、一挙に白煙を散らして飛び出す。
足首をひねり、腰で重心をずらして、体勢を戻した。
「見えた――敵艦隊視認」
白と黒の異容が、水平線から頭を出した。全艦こちらに回頭を済ませ、重巡二隻が最前列から竜飛を睨み返している。ちらりと見えた、こちらへ向かう微かな白い航跡は、先んじて重巡が放った魚雷だろうか。
左手の内で、弓が溶けるように形を崩した。幾条もの黒ずんだ管のようになって、ずるりと籠手の中に消える。無手となった竜飛は、自らこそが矢尻のように、敵艦隊へ向けて突撃を開始した。

「とりあえず、貴艦らから退役してもらおうか」
眼前で水柱が弾ける。それを鮮やかな足捌きで、くるりと回転して避け、海面に白く爪痕を引く魚雷の間を、紙一重ですり抜けた。
さらに肉薄。
艦攻が位置につく。仰角を修正する重巡へ、今度はこちらが十字に雷撃を放った。眼を凝らしてようやく見えるか見えないかの、ごくうっすらとした雷跡が、敵艦隊の左舷と艦尾からじりじりと迫る。
敵艦隊が舵を切った。
「させない」
回避運動をとろうとした敵艦隊に、艦戦の機銃が襲いかかる。猛射に海面が粉砕され、塩を含んだ驟雨が舞った。そのまま頭上にまとわりつくように、何度も旋回して弾丸を降らせる。
致命傷を期待してのものではない。少しでも注意を引きつけ、足を乱すことができれば御の字だ。
期待通り、敵艦隊の挙動がわずかに乱れた。堅牢な複縦陣が仇となり、互いに回避運動を阻害している。輸送艦に至っては、ずんぐりとした艦体が接触し合い、まったく身動きがとれていない。
――こちらの魚雷が到達するまでには、未だ間がある。
竜飛も舵を切った。
敵艦隊の右舷へ向けて、なおも接近する。
刹那、直感じみたものに従い、上体を思い切り振るようにして屈んだ。
砲声――肩から背までを、強烈な風圧に叩かれる。身をしならせて、柳のように受け流した。
姿勢を起こすや否や、すぐさま体を右に開く。
再度、砲声――胸もとから胴を、猛烈な風圧に弾かれる。腰から上を振り回すようにして、これも受け流した。
背を冷たい汗が伝い落ちる。
少しでも回避が遅れれば、体の上下が盛大に千切れ飛んでいたに違いない。
装甲の薄い竜飛のこと、相手が重巡ともなれば、砲弾がかすめただ

けで行動不能に陥るのは、想像に難くない。それも、距離を詰めている分、弾着までほとんど間がないのだ。

――だが。

竜飛が再度、転舵する。失速しない転進でもって、猛然と敵陣へ突貫した。反航戦。否、この近さと大胆さたるや、もはや逆落とし戦法でも仕掛けようかという具合である。

その動きに触発され、重巡が一隻、方位角を正そうと、両腕の砲門をくわえた顎を動かす。

しかし。

「遅い」

気づけば、彼我の距離はすでに十数米（メートル）にまで縮まっていた。

竜飛の動きに、照準が追いつかない。

真っ白なおもてに、愕然とした表情を刻み込み、重巡がこちらに眼を向ける。茫洋としつつも驚愕に揺らぐ眼差しと、冷徹に狙いを定める竜飛の視線が、空中でかち合った。

竜飛が胸の前で緩く握っていた左手を、発条（ばね）のように振るう。

――――――――――――‼?

おぞましいほどの絶叫が、耳をつんざいた。

重巡が、自らの顔面を押さえて苦悶している。身を反らし、仰のく両の眼から、いつの間にか掌ほどの長さの金属針――釘が突き出していた。

眼を潰され悶え苦しむ重巡を、もう一隻がわずかに動揺を込めた視線で見やる。転瞬、隊列から外れるのもかまわず、弾かれたようにその場から身をかわした。その足先すれすれを、仄かに白い雷跡がかすめていく。先に放った十字の雷撃が、いま敵艦隊に届いたようだ。

爆音が上がった。

眼球の復元が間に合わなかった重巡が、爆風を巻き上げ煙をふく。それを尻目に、もう一隻の重巡は、格子を描く白い泡の筋を間一髪ですり抜けた。その背後で、再びの爆発。輸送艦に命中したのだろう。

無事に回避し切った重巡は、それらをまるで意に介さず、硬質な輝きの頭髪を爆風に乱しながら、嘲弄するように唇を薄く吊り上げた。

その眼と鼻の先で、竜飛が唐突に急回転する。
体ごとぐるりと回る胴から解き放たれるようにして、縄状のものが乱れ飛んだ。竜飛の舞うような動きに従って、小さな嵐のように荒れ狂い、空間に無数の残像を刻みつける。
――雷撃が本命だなどと誰が言った？
生き物のように躍る縄――曳索が、頭上で美しい円を描いた。遠心力を味方につけ、瞬く間に重巡の首に巻きつく。
真っ白な顔に浮かんだ笑みが、凍りついた。
「私の手は二本しかなくてな」
たわませた曳索を打ち振るうと、沈みかけている重巡の首にも、魔法のように索が絡みついた。敵艦隊の真正面で、竜飛がぐいと舵を切り、波を蹴って陣を右舷から丁字に過る。のたうつように曳索を振り、さらに巻き締めた。
重巡二隻の首がひとつにくくられる。
「そこでちょっと待っていてくれ」
絡み合って団子になった重巡二隻を横目に、竜飛は敵陣の左舷へと一気に駆け抜けた。勢いのまま、二隻に巻きついた索が凄まじい力で曳かれる。
曳索が長さの限界を迎えて張りつめた。
もつれ合う重巡二隻を軸に、速度を保ったままハンマー投げの要領で自分自身（ハンマー）を振り回し、海面に大きく弧を描いて反転する。
遠心力で足が浮いた瞬間、竜飛は曳索を手放した。
小柄な体躯が敵陣の後列へ向けて空を飛ぶ。輸送艦四隻へ、文字通りの再突入を敢行した。
横向きの身を空中でよじる。
回転する力に、腰のひねりも加えて突き出された膝頭が、輸送艦の黒く平べったい頭部に叩き落とされた。ごきり、と生々しい音を立てて、白く、異様に細い首がへし折れる。
力を失った頭部を膝で押しやるようにして、竜飛は跳躍した。蜻蛉を切りつつ、おまけと言わんばかりに横蹴りを放つ。
骨が砕け、肉が潰れる乾湿入り混じった音をたてて、項垂れる輸送

艦の胸郭が陥没した。
反動に任せて、くずおれる輸送艦からくるりと飛び離れる。そのまま輸送艦四隻の中心に、足首まで埋めるようにして着水した。海水が飛び散り、頬にかかる。
素早く見回す。残りの三隻のうち、一隻は被雷したのか沈みかかっていた。二隻は撤退しようとしているようだが、動かなくなった僚艦や、互いに阻まれて、上手く事が運んでいないようだった。
「次はスリムに生まれておいで」
一足飛びに、生き残りの輸送艦へと接近する。卵を孕んだ昆虫の腹を思わせるそれに指先をかけるや、振り子のように体を振り上げた。輸送艦が、竜飛の重みでわずかに沈み込む。傾いで揺れる艦体をよそに、小揺るぎもしない倒立の姿勢から、背を丸めて転がり、停滞なく立ち上がった。
竜飛を振り落とそうと、輸送艦が艦体を振る。不規則な揺れを足腰で完璧に吸収しつつ、黒い艦体を踏み鳴らして艦首へ向きなおった。
自らを見つめる〝死〟の視線に、輸送艦が白い体をよじり、もがく。しかし、拘束されているのか、そもそもそういった構造なのかは判然としないが、仰け反る体勢で両腕を固定されている輸送艦には、そこから逃れようがない。
黒い弓懸を挿した竜飛の右手が挙げられる。その手が指先まで伸ばされ、手刀の形をつくった。
「――おやすみ」
艦体が激しく鳴った。竜飛の足が、はがねの装甲を砕かんばかりに踏み締めた音だった。
四股のような踏み込みの、その反動を、下肢から上体、そして腕へと伝わせて、螺旋を描くように、総身の力と縒り合わせるようにしてひとつにまとめる。それらを一点に込めた手刀が、艦体と同じ色をした、平たい頭部へ向けて、鉈のように打ち下ろされた。
朱が散る。
頭頂部へまっすぐ落とされた右手に、笠状の頭部が真っ二つに割れ砕け、無残にその形を変えた。脳漿と血の飛沫に、点々と頬や肩口を

汚しながら、竜飛が手を引き抜く。刀剣の血振るいのように体液を振り落とし――。

猫のように跳ね退いた。

轟！

竜飛の残像を、砲弾が穿つ。背を弾く風圧すら追い風にして、輸送艦の残り一隻に降り立った。やや荒っぽい着地に、艦体が大きく沈む。

「早いな。もう立て直したのか」

ひとつに絡げた重巡が、ぐったりとする一隻を抱えるようにして、肩越しに砲門を向けていた。こちらを睨む視線と、自身のそれがぶつかった瞬間、竜飛は背筋を走った危機感に従って、尻餅をつくように腰を落とした。

再びの轟音。

急な動作に束ねた髪がなびき、逃げ遅れた毛先が砲撃に千切れ飛ぶ。余波を額に受けながら、竜飛は艦体から転がり落ちるように後転。再度、足から海面に降りた。

間髪入れず、右腕を下から振るう。あえて襷でまとめず、垂れるままにしていた着物袖が、輸送艦の首に巻きついた。そのまま引き寄せてがっちりと捕まえ、重巡側へと突きつけた。

活魚のように暴れる輸送艦を、ぎりぎりと羽交い締めにしながら、竜飛はちらりと上空をうかがう。それをつけ入る隙と感じたか、重巡が再装填を完了した砲門で、狙いを定めた。

竜飛の唇の端がほんの一瞬だけ持ち上がり、すぐにもとに戻った。

重巡が力んだ――と見えた瞬間、竜飛は盾にしていた輸送艦に肩口をぶつけ、豪快に突き飛ばす。即座に、海面に手をついて這いつくばった。

またも轟音。

それに混じって、水気を含んだものが弾け飛ぶ音と、金属同士がぶつかり合う音を聞いた気がした。赤黒い欠片が、眼前の水面にぼちゃぼちゃと降り注ぐのを無表情に見やり、竜飛はゆらりと立ち上がる。

白い肉体のほとんどが消し飛んだ輸送艦の陰から、のっそりと顔を

出した。妙に泰然とした仕草の竜飛に、爛々とした眼の重巡が、いま一度、砲門を構える。
「ところで――」
不意に、竜飛が口を開いた。
「白兵戦が本命だなどと誰が言った？」
鈍く空気を震わせる音が響いた。
否、実際には最初から響いていた。ただ、海上にていくつも欺瞞を重ね、上空を同種の音で満たして、重巡の意識からそれが外れるよう誘導していただけである。
――開戦から今までのすべてが、この爆撃機を隠蔽するためのものだったのだと、はたして重巡に理解できただろうか。
茫然と空を仰ぐ重巡へ、銀翼の群れから次々と切り離された黒い礫が、先を争うように襲いかかる。
僚艦と結び合わされ、回避運動をとることもままならず、爆撃に身を灼かれて、爆煙と水柱の中で重巡は息絶えた。

「――は、あぁぁ……」
重巡の絶命を確認して、竜飛は深々と息をついた。様々な感情の残滓をはらんだ、重苦しく長いため息であった。
思わず、傍らの輸送艦に手をつく。黒い艦体のみが未だ浮かぶそれを眺め、周囲を見回した。
輸送艦のうち、一隻はもう沈んでいる。三隻もかろうじて浮いてはいるが、じきに彼女らも水底へ消えていくだろう。竜飛が曳索で無理やり絡げた重巡二隻も、徐々に沈み始めている。
「……おっと」
竜飛は輸送艦から離れ、重巡へ接舷した。彼女たちが沈む前に、曳索を返してもらわなくてはならない。釘も、使い物になるなら再利用せねば、すぐに底をついてしまう。
それらを手早く回収し、破損を確かめて納める。曳索を折りたたん

で、腰の後ろに押し込みながら、ふと眼を上げた。
雲の底をかするように、こちらへ戻ってくる小さな翼が見えた。
竜飛は腕をまっすぐ突き出すようにして、前へと掲げる。着物袖のたもと、開いた身八つ口と振りの穴から、黒ずんだ飛行甲板がずるりと生え出た。肘を曲げ、上腕から肩に載るようにして支え、腰を落とす。
他の空母のものより明らかに短いそれに、戻ってきた九九式艦上爆撃機が次々と滑り込む。勢いを殺すように一歩下がりつつ、着艦。
「よし」
迎え入れる竜飛の顔の横で、静止した艦載機たちの風防が開くと、中から燻るように煙が立ち上り、機体が紙切れへと変じた。甲板からひらりひらりと舞い落ちるや、水面につく前に、すべて仄青く火を灯して燃え尽きてしまう。
それを幾度も繰り返し、九七式艦上攻撃機も九六式艦上戦闘機も、ついでに今しがた追いついた偵察機も、片端から青白い焔に変えた後、竜飛は再び嘆息した。
白い肉体は挽き潰されて肉の色を晒し、残された艦体は黒く丸い、大きな浮標のようになってしまった輸送艦を検分する。揺らぐ波が艦体を打ち、妙に空虚な音を立てていた。
「彼女らの優先基準というのは、本当に、どうなっているのだろうな……」
益体もない愚痴を垂れ流しながら、先ほどまでも触れていた、この金属製の昆虫の腹を撫で回し、そこにぽっかりと空いた大穴を見つける。
重巡への盾として押し出した際に、砲撃で穿たれたものだろう。砲弾によって装甲が破られ、内部へと巻き込まれて丸まったふちをなぞりつつ、中をのぞき込む。
「――ボーキサイト……」
やや灰色味を含んだ褐色の鉱石が、黒い腹の中にみっしりと詰まっていた。砲撃で砕けたのであろう、小さくなったそれを手に取り、竜飛は眼を細める。

――と、不意に弾かれたように彼方に視線を投げた。
眉を寄せて、いずこかを睨みつける。
「……どうしてこう、当たってほしくない予感ほど……」
弄んでいた小さな褐色を、艦体の穴に乱雑に放り込む。
ぶつぶつとこぼしつつ、再び水平線を目指して駆け出した。

＊　＊　＊

［――全艦一斉回頭、単横陣で後進！］
阿武隈が愛らしい声に似合わぬ戦意を漲らせて、指揮をとる。
［間隔は広めにとって、確実な回避を徹底して！　砲撃も雷撃も狙いは適当でいいわ！　誤射しなければね！　どうせ狙わなくても当たります！　とにかく足を止めないで！］
幾度も繰り返される指示が、熱くなりかける艦隊の思考を、堅実なそれへと引き留めた。
［はい！　雷、もっかい魚雷いくわ！］
［同じく響、雷撃する！　ｙｐａａａ！］
乱戦での状況把握のために、各々が名乗りをあげて行動に移る。
大群の中から、めいめい好き勝手に頭を出す敵駆逐艦らへ向けて、暁型姉妹たちから雷撃が放たれた。三隻から放射状にのびる、うっすらとした雷跡が交錯して、波間に菱格子の文様を描く。
駆逐艦らが互いにもみ合いながら、それでも回避運動をとろうとざわめき立つ。
［僕――時雨、砲撃いくよ！］
［あ、あたしも！　白露、撃つよ！　いっけぇー！］
砲撃音が響き渡る。敵艦隊の前列、押し合いへし合いしている駆逐艦らの吃水線が、激しく波を弾けさせた。
［阿武隈も撃ちます！　やるときはやるんだから！］
気勢をあげて、阿武隈の砲撃が敵艦隊の最前列へ斉射される。その

砲声が、白露型姉妹が再装填するまでの時間を埋め、先の雷撃を鈍色と黒に分かれる吃水線まで導いた。
爆音とともに、水壁が曇天を突き上げる。電は脳裏で秒を読みながら、肩の後ろで主砲を旋回させた。艦隊に注意を促す。
「そろそろ、また次の雷撃が来ます！　海面をよく見て、でも海面ばかり見ないで、頑張って避けるのです！」
［うわー！　眼があと三対くらいほしい！］
［敵艦と雷撃と砲撃と、あと一対なにに使う気なの？］
白露の元気な泣き言へ、雷が生真面目に問いかけた。
［妹と対潜！］
寸毫のためらいもなく、きっぱりと言い放つ白露。
［なに言ってるのさ。しかも一対たりない上に、眼で水中は見れないじゃないか］
［仲がいいな、君たちは］
時雨のどことなく照れを含んだ反応と、響の羨むとも呆れるともつかない評価。
［もぉぉお！　皆さんもうちょっと真剣にやってくださいぃ！］
一気に崩れた緊張感に、阿武隈の泣きが入る。しかし彼女の心配をよそに、僚艦たちはじゃれ合いながらも確実に、交差する白い航跡の間を縫った。
雷撃を凌いだ各艦の間に、大きくしぶきが立つ。電が先んじて警告していた、大口径の砲弾が夾叉しているようだ。艦隊の後方で魚雷に誘爆したのか、尋常ではない規模で海水が破裂する。驚いた数隻が短く悲鳴をもらした。
［これだけ撃たれて、未だに誰も大した傷を負っていないとは……！　Ｘｏｐｏｗｏ（すばらしい）．　もはや奇跡だね］
［ずっと続くといいんだけどね。次は僕らの番だよ。］――時雨、雷撃するよ］
［はいはいっ！　白露も雷撃するよ！　いーっけぇえ！］
「電、砲撃はじ、め――」
主砲の仰角を合わせ、砲撃する直前、電の声が尻すぼみに途切れた。

「――白露さん、電もあと四対は眼がほしいです」
一拍の後、低く呻くような声色で、唐突に僚艦の軽口を引き合いに出す。ひどく苦々しいそれが、鼓膜を圧する砲声や爆音の中で、奇妙なほど鮮明に無線を巡った。
［電ちゃん？］
気遣わしげな、白露の声。
電は応えず、その主砲が、無言の内にさらに上を向いた。もはや険しいどころではない、鬼気迫る表情で、真っ黒な海の上、薄暗い雲の天蓋へと視線をねじ込んだ。
［……すっごく聞きたくないけど、とりあえず訊くね。――敵艦と雷撃と砲撃と、あと二対なにに使う気なの？］
眼前に弾着した余波を危なくかわし、白露が訊ねる。
「……姉たちと」
［うん？］
「――対空なのです」
［はい？］
ひと時の静寂が、各々の間を満たす。息を飲んだような静寂に支配される中、誰もが戦況を忘れ、電の睨みつける先を誘われるように見遣った。
天を覆い隠す分厚い雲の陰影から、無数の黒点が現れる。それらはじわじわとにじむようにその姿を大きくし、ほどなく、全艦がその正体を知ることとなった。
［……こっ、航空機!?？　敵航空機確認！］
雷が悲鳴まじりの警告を発する。その声をかき消さんばかりに、先に放った白露姉妹の雷撃が、高々と海水を散らした。
「――なのです！」
それを合図としたように、電の主砲が火を噴く。二つの砲門から放たれたはがねの礫が、空を裂き、敵機に食らいついた。経験に相応しい正確な砲撃ではあったが、雲に代わって天を塗り替えんとする、どす黒い雲霞には、あまりにも数で劣る。
白煙を上げながら落ちてきた、ほんの数機の火の玉に、電は歯噛み

した。
「手数も頭数も圧倒的に足らないのです！」
［対空用意！　くるよ！］
［もぉー！　この状況で空まで！］
警戒を促す響と、激する白露が主砲の仰角をとる。
しかし、砲弾が放たれる寸前、周囲にいくつもの水柱がはね上がり、照準を揺さぶった。体勢を崩しながらも、なんとか踏みとどまった二隻の眼と鼻の先に、白い筋。
雷跡。
「――こっ、のぉお！」
電は反射的に左手を振るっていた。しなる手首の動きで射出された銀光――釘が、白く尾を引く魚雷へと襲いかかる。
「全部は無理なのです！　早く避けて！」
数本を穿つと同時、電は叫んだ。内側から破裂する海水に、半ば吹き飛ばされるようにして、響と白露が跳ね退く。
［痛っ！　もう！　おたくの妹さん無茶するね！］
［くっ……！　頼もしい、だろうっ？］
［まったくだよありがとう電ちゃん！］
交わす冗句にも苦しい色が混じる。至近で起爆した魚雷に、さすがに完全な無傷では済まず、あちらこちらに小さな切り傷ができていた。
［もう！　あっちからこっちから！　――ってぇー！］
雷の砲撃。それと同じくして、敵艦隊のいたるところから発砲炎が上がる。
時雨のひゅ、と息をのむ音が聞こえた。
［阿武隈さん！　――ご……っ］
［時雨ちゃん⁉？　――きゃぁあっ］
［時雨っ⁉？］
薄暗い海上に紅の花びらが散る。白露の悲鳴。
咄嗟の警告を発した時雨と、その悲鳴に出足を乱した阿武隈が、順に被弾した。片や脇腹を抉られ、片や左脚と右腕を千切り飛ばされて

いる。そのままばしゃりと音を立てて水面に伏す二隻に、雷が駆け寄った。
［阿武隈さん！　時雨！］
［だ、大丈夫……！　時雨、復元完了。判定はまだ中破だよ！］
艤装の内蔵余力を消費して、時雨の脇腹が復元される。尻目に、阿武隈は残った左腕で海水を掻いた。
［ごめん、なさい……。阿武隈、大破です……］
阿武隈が息も絶えだえに謝罪する。出血は治まったものの、内蔵余力を消費し切っても、欠損を復元するには至らなかった。
「雷ちゃん！　時雨さん！　阿武隈さんの曳航を！　――なのですっ」
［わかったわ！］
［了解……！］
指示を出しつつ、唸りを上げる黒雲に砲撃を加える。
「まずいのです……！」
阿武隈も時雨も、轟沈を免れた。撤退して入渠すれば、阿武隈の欠損も跡形もなく回復する。経過時間を考えても、もう充分だ。しばらくすれば、呉と佐世保の艦隊が、この場を引き継ぎに来る。
旗艦大破。撤退すべきだ。
しかし、戦況がそれを許さない。
直撃弾を受けたことで、艦隊の足が鈍ってしまった。左脚を失った軽巡阿武隈を曳航し、速力の大幅に落ちた艦隊が、今しも圧殺せんと向かい来る敵大艦隊に背を向けて、逃げおおせる可能性はいかばかりか。
それも、雲霞のごとく迫り来る敵航空機の猛攻を掻い潜って、である。
艦隊六隻のうち、まともに戦えるのは電と響と白露。阿武隈は自力で立つことすら難しい。中破した時雨には無理をさせないため、雷と共に阿武隈の曳航につかせている。駆逐艦二隻による曳航でも、やはり動きは遅い。
――だが。

黙考する電の視界に、一瞬、影がちらついた。敵艦戦の機銃が弾丸の雨を降らせる。水しぶきが尾を引くようにはね上がった。腕で眼をかばう。塩水の飛沫に、鮮やかな紅が混じった。遅れて、前腕にやってくる痛み。機銃がかすめたようだ。

迷っている暇などない。

電はぎり、と唇を噛み締めた。

「響ちゃん、白露さん」

［……なにかな］

［魚ら――な、なにっ？］

自らを呼ぶ声の色に、響は眉を寄せ、白露の頬は引きつる。その表情に電は気づいたかどうか。

「撤退しましょう。電が残るのです。おふたりは阿武隈さんたちを護衛しつつ、離脱してください」

［な、なに言ってるのよ⁉？］

「誰かが派手に注意を引かないと、背中を撃たれるのです」

雷の声が動揺に裏返っている。対して、電は平然としたものだった。

［ま、待って……。あたしが、あたしが残るから……！］

「それで、何秒もたせられるのです？」

阿武隈の必死の声を、ぴしゃりと叩き斬る。あまりに容赦のない物言いであったが、事実であるだけに、文句の言いようもなかった。

「だいたい、阿武隈さんは旗艦なのです。撤退して司令官さんに委細を報告する義務があります」

淡々と言葉を積み重ねながら、砲声を響かせ、雷撃を放つ。いちいちもっともな意見ではあるが、それが電の内心すべてではないということなど、誰にでもわかることであった。

わかるからこそ、受け入れ難かった。

「それに電は、おそらくこの中でいちばん、対空に慣れていると思われます。電なら、しばらくは保つのです」

少なくとも、艦隊が離脱するくらいの時間ならば。

――そしてそれが、そのまま電の余命となる。

［でも……！］
［そ、それなら私も残るから！］
なおも言い募ろうとする僚艦たちの前で、唐突に電が跳び退いた。一瞬遅れて、その波紋に爆撃が落ちる。電を囲うようにして、次々と水が打ち上がった。
その爆風になど毛筋ほども臆さず、電の左手が、飛燕のごとく頭上で翻る。遠ざかろうとしていた敵艦爆が数機、海面へと斜めに衝突した。討ちもらした数機がそのまま飛び去る。
「残ったところで、なんになるというのですか！　仲良く沈むだけなのです！　――もう時間がありません。遠からず包囲されてしまいます。さあ、早く！」
まるで鶴翼の陣なのです――呟きに苦々しさが含まれる。
無秩序に横へと広がる黒い大群が、電たちを要として、まるで大鳥がその翼を閉じようとするかのように、両翼から迫っていた。
阿武隈が無線越しに、ぐぅ、と唸る。
雷のすすり泣きが聞こえる。
［ごめんなさい……っ。どうかご武運を］
［嫌ぁ……っ、なんで、こんな……］
［……Простите пожалуйста.　電……］
［電ちゃん、ごめん……っ］
［ごめん、ごめんよ、電……］
無線がおそろしく湿っぽい。電はまったく場違いな笑いの衝動にかられた。本当に、自分はなんと贅沢な艦娘であろう。そろそろ四十年にも及ぼうかという、長い艦娘歴の最期がこれであるなら、未練はあれど後悔はない。
上空から敵機が、海上から敵艦が迫る。黒い空と海が迫る。
電は魚雷を放射状に射出し、叫んだ。
「早く！　務めを果たしてください！」
背後で波を蹴る音がした。艦隊が反転したのだろう、徐々に遠ざかる水音を聞きながら、電が砲の仰角を修正する。
「電の――わたしの、覚悟を、見せてやるのです」

魚雷が迫る艦隊に突き立ち、爆風を上げる。
主砲が咆える。火球が数機落ちてくる。
再装填した魚雷を放つ。
雷跡同士が交差しあい、水面に紋様を描く。
航跡の間をすり抜け、回避。
砲弾が降りかかる。舵を切って、回避。
さらに砲弾、跳ぶように回避。
砲弾、砲弾、魚雷、砲弾、機銃、機銃、爆撃――。
電には、もう時間の感覚などなくなっていた。いつしか反撃など忘れ、身をよじり、這うようにしてでも、ただ遮二無二、襲い来る最期から逃れ続けていた。
疲弊した体が、重く、冷たい。
頭頂から足先まで、みっしりと鉛を詰めたようだった。生を受ける前の、記憶もおぼろげな、はがねの軍艦（ふね）だった頃とは違う。徐々に活力を失い、弱り切って死に向かう――生と苦が等価に結ばれ、肉体が重荷になるような、それであった。
――貴女は、いつもここにいたのですね。
――こんなふうに生きていたのですね。
得心とも納得ともつかない述懐が、胸裏でふつと湧き出でる。
重く、冷たく、苦しい。早く終わってほしいとすら、思ってしまうかもしれない。それでも、彼女は――今も忘れ得ぬ背中のあのひとは、いつもそうして生き、そうして戦い、そうして沈んでいくのだ。
その孤独を思う。
人間と初めて手を取り合った、最初期艦の五隻。その一隻たる、この電よりもずっと前に生まれ、母港もなく、同族もなく、展望すらも曖昧なまま、ひとり海を往き、闇雲に戦い続けるしかなかった、彼女を思う。
理解など、できてはいなかったのだ。できようはずもなかったのだ。夕張も、大淀も、叢雲も、香取も、龍驤も、松岡中将も、そして自分も。寄り添い合う温もりよりも、この孤独と冷たさの中にいる方が、ずっと楽だなどという、彼女のことなど。

電たちが、温もりと信じたものにこそ、打ちのめされてきた、彼女のことなど。
爆風にあおられ、海面を転がる。のろのろと立ち上がりかけたところに、さらなる爆風。吹き飛ばされ、波間をはねた。砲撃か爆撃かすらもはや判然とせず、直撃せずとも、ただ余波に細かい傷ばかりが増えていく。
ぼやける視界に、朱に染まった腕が見えた。血まみれで、どこが傷口かもわからない。否、腕だけではない。全身、ありとあらゆる箇所が、痛みと痺れで震えていた。
もがく。ぐらつく頭をなんとか支え、壊れかけの人形のように、電はぎしぎしと体を起こした。両手をつく。這うような姿勢で、きしむ砲塔を動かす。
「ま、ぁっ……だ、なの、です」
声帯は錆びたようだった。脚は萎え、首は据わらず、上体を支える腕もくずおれる寸前。呼吸すらおぼつかず、ひゅうひゅうと隙間風にも似た音を立てている。
それでも、まだ。
「まぁ、だ、いきて、るの、です……！」
砲が、上空を仰ぐ。鈍った眼には、すでに黒いとしかわからぬそこに、ぶれる照準を向けた。
「う……ぁ……、ぁぁぁぁぁぁ――っ‼？」
喉を裂いて飛び出した咆哮に、轟音が合わさる。朦朧とした視力では捉えられない砲弾が、敵機の手前を通り過ぎ、敵艦隊へと落ちた。
直後、その何倍以上もの爆炎が、大艦隊のあちこちから巻き起こる。
「は――」
吐息がもれた。疲労に空回りしつつも、それでも働いていた思考が、一瞬で空白と化す。茫然と身をふらつかせる電の頬を、影が通り過ぎた。反射的に身を縮め、すぐに己の無事を訝しむ。
脱力する背筋を伸ばして、過ぎ去ったそれに眼を凝らした。
「ぎん、いろ」
曇天の下ですら銀の翼がきらめき、翻る。旋回する銀の鳥に眼を奪

われた電の耳に、それは飛び込んできた。
［間一髪だったようだ］
息をのむ。指先が、肩が、背が、疲労と苦痛とは別種のものでうち震え、絶望にすくむ心臓が激しく鼓動しだした。
「あっ、あ……、た――」
胸が苦しい。想いも、言葉も、なにもかもが、そこにつかえて、いっぱいになってしまったようだった。
「た……っ」
［さてと］
わななく電をよそに、その声の主は言い放つ。
いつかの、出逢いの日に聞いた、その言葉を。
［〝我に航空戦力あり――〟］
あの日、祖国を目指して海を往き、その半ばにして斃れんとした自身に、もたらされた救いの言葉を。
［〝――貴艦に味方せり〟！］
彼女の常套句を。
「た、……っ、ぴ、竜飛さぁぁあん‼？」
数十年の時を隔てて、かつてと今とが、つながった。